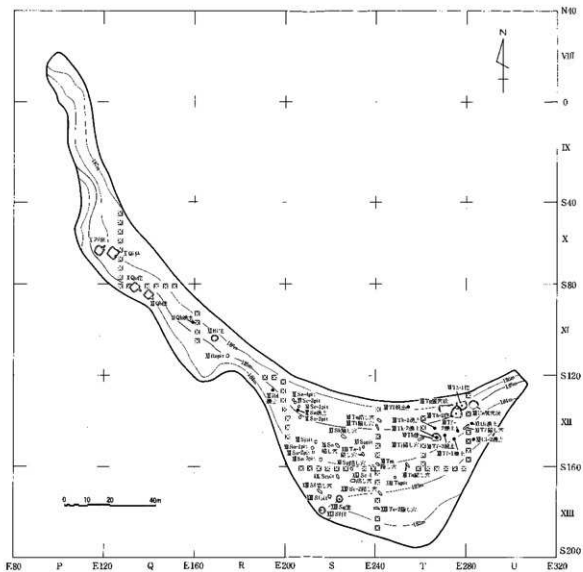


6

区

略号	YH 6
調査面積	8,550㎡
調査機関	(財)岩手県埋蔵文化財センター



第1圖 6区通水配管圖

## I. 調査区地形概観

本調査区は、湯舟沢遺跡の北東側に位置しており、調査面積は8,550㎡に及ぶ。北側は丘陵の裾にあたり、東側は埋没した小沢を隔てて7区があり、また南側は南流する沢と湿地帯に面している。調査区はこの丘陵の裾を取り巻くように細長く発達した段丘面上に載っている。中央部から北西部にかけては段丘崖を形成し、沢との比高は2m前後である。遺構は7区寄り南東部と北西側の2地域に分布している。

基本土層は地質対比図(第1分冊)に示す通りで、他の調査区とほぼ同様である。遺構検出面はⅢ層～Ⅳ層中位にかけてである。

## II. 検出遺構と遺構内出土遺物

### 1. 縄文時代竪穴住居址

6区では縄文時代に位置づけられる住居址が7棟検出されている。うち6棟が南東部の緩斜面上に位置している。

#### XI Ri 住居址(第2図・写真図版3)

**位置** 調査区のほぼ中央付近、道路の近くに位置している。南側10mに段丘崖がある。検出Ⅲ層の下位で検出され、Ⅳ層まで掘り込んで構築されている。形態・規模 平面形はほぼ楕円形状を呈し、規模は長径3m×短径2.5mである。壁 壁高は10cm位で、床面から直立ないし80度で外傾して立ち上がる。

**埋土** 粒径数mmの橙色～赤褐色の浮石が少量まじる黒褐色土で構成されており、中央付近からは土器片がまとまって出土している。床 平坦で堅く締まっている。東側に径10cm・深さ15cm～20cmの小ピットが2基検出されているが、柱穴になるかどうかは不明である。周溝は検出されていない。

#### 遺物(第2図1～5・写真図版23-1～5)

出土遺物として埋土下位から土器1点と石器4点が得られている。

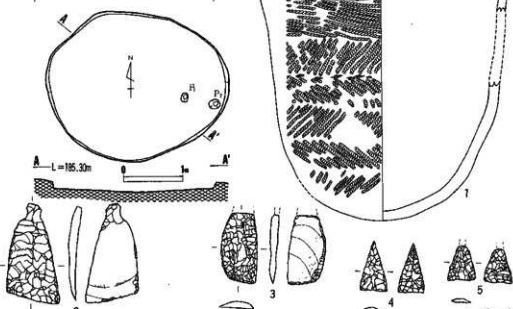
1は丸底の鉢である。底部から徐々に膨らんで立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部には絡条体回転文が横位に巡り、胴部には撚り方の異なる原体を横位に交互に回転させたと思われる羽状縄文が施文されている。羽状縄文の異種の原体が近接する所は粘土が盛り上がり、そのヵ所は横位にナデられている。胎土には粒径2mm未満の粗砂と繊維がやや多く混入しており、焼成はやや脆い。法量は口径21.1cm・器高18.9cmで器厚7mm～9mmである。

石器4・5が石鏃、2・3は石匙である。4は平基でほぼ二等辺三角形形状を呈しており、両面の全周縁から丁寧な剝離調整が施され、尖端は鋭い。5は尖端が欠損しているが4とほぼ同

E167  
S102E170  
S102

21.1・18.9-

埋土・F



第2図 XI R+住居址・出土遺物

1 S=1/4  
2-5 S=1/5

形態を呈している。2は三角形を呈する縦形の石匙で頂点付近に握みがつくり出されている。三縁辺とも背面側に丁寧な剥離加工調整により刃部が形成されている。いずれも刃部角度は30度未満である。3はつまみ部付近が欠損する縦形の石匙で、一縁辺は直線、他の二縁辺はやや丸味を帯びる。主に背面側に丁寧な剥離調整が加えられているが、丸味を帯びた縁辺は腹面から小さな剥離加工調整が施されている。刃部の角度は直線的な縁辺がやや急であるが、ほぼ30度未満である。

本住居址の所属する時期は、出土遺物等から縄文時代前期の初頭に位置づけられると思われる。

### XII Th-1住居址 (第3図・写真図版3・4)

**位置** 調査区東端部沢寄りの緩斜面上に位置しており、南西壁側でXII Th-2住居址と重複している。重複の新旧関係は、XII Th-2住居址を切っていることから(新)XII Th-1住居址(旧)XII Th-2住居址となる。形態・規模 北側の一部が調査区域外の林道下に延びていることから詳細な規模は不明であるが、現存する東西辺から長径4.6m×短径3.9mのやや不整の楕円形を呈すと推定される。

**埋土** 西壁側の一部は覆乱削平されており不詳であるが、黒褐色シルト質土主体の5層に大

別される。全体的に炭化物、焼土粒を多く混入しやや締まっている。多量の炭化物と土器は埋土下位から出土している。壁 西壁側は攪乱削平のため曖昧なヵ所があるものの、現存する壁高は南壁25cm、東壁29cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がっている。

床 基本層序V層上位を床面としており、全面堅く締まり多少の凹凸が見られる。柱穴 大小合わせて小穴が29ヶ余り検出されているが、木根攪乱を余く18基の規模は次のとおりである。

P <sub>10</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>
口径cm	38×19	15×14	13×12	18×11	14×13	30×25	12×12	18×14	16×10
深さcm	26	11.5	19	4	9	9	10	7	4
P <sub>16</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>7</sub>
口径cm	21×13	20×13	30×14	21×19	17×12	18×14	10×9	9×9	23×11
深さcm	3	6	1	7	3	10	10	10	7

P<sub>1</sub>埋土中からは石器と土器破片が出土し、P<sub>2</sub>は炭化物が充満している。位置的にP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>15</sub>の4基が考えられる。

炉 中央部のやや南寄りに2ヶの石を使用した配石炉がある。規模は長径82cm×短径74cmの円形を呈している。石は10cm～16cm大の亜角礫で、全体に火熱を受け焼くなっている。焼土形成は良好で最大9cmを測る。また、焼土の上面東側には炭化物の散在が見られる。

遺物 (第3図1～10、第4図11～16、第5図17～22、第6図23～40、第7図41～54、第8図55～76・写真図版23～6～19、24～20～27、25～28～49、26～50～81)

土器は壺形土器と鉢形土器が得られている。壺形土器は体部が無文(1・2・21)のものと縄文(8)を施文した2種類がある。1はほぼ完形品で、頸部に浅めの沈線が一条巡り、体部が丸味を呈するものである。また、底部は上げ底気味である。2は平底で体部上半部が胴張り、21は丸底で体部が楕円形状を呈している。いずれも器面は丁寧なミガキ調整が施されている。8は上記の3点に比べて小形のもので、口縁部は欠損し体部に斜縄文LRを施文している。鉢形土器は、5が浅鉢形のほかにすべて深鉢形を呈している。5の浅鉢形土器は口径17cm、器高6.5cm、底径8.5cmである。口縁部は内湾し、小突起が8ヶ巡っている。体部は斜縄文RLを施文している。4は完形の深鉢で、口縁部は外傾し大小の突起を16ヶ持ち、口唇部に指頭圧痕と刻目を施している。体部には貼瘤があり、上下に入組文と磨消縄文を施文している。深鉢の粗製土器地文は、斜縄文LRとRLの施文があり前者のものが多い。大部分の粗製土器には煤の付着が認められる。14の口縁部には補修口と思われる小孔がある。17は無文で器面はミガキを施している。23は刻目が平行沈線の間と口唇部に施されている。24は沈線と刷毛目状圧痕がある。土製品は22で、円板状を呈しているものの破片のために器種は不明である。

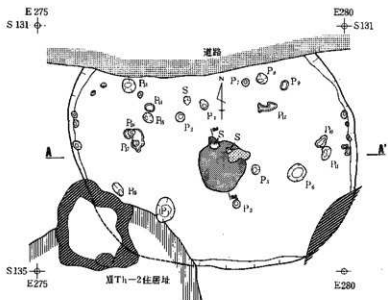
石器は剥片石器と礫石器があり、多くのものは埋土中位～下位にかけて出土している。以下、

器種別に剥片石器・礫石器の順に述べることにする。

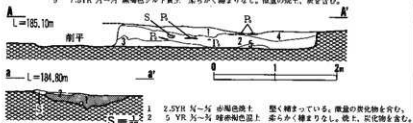
剥片石器は22点出土しており、器種は石鏃(55~60)、石匙(62・67)、石錐(61)、搔削器類(64・65・70・71)、石核石器(73)、不定形石器(63・66・68・69・72・74・75)等がある。石鏃は鏃身の幅に大小はあるが、いずれも有茎鏃である。鏃身と茎部は鈍角を呈している。茎部のつくり出しとしては、平坦茎状につくるもの(55・56・59)、短かく突出した茎部をなすもの(57・58)等がある。また、56・59の茎部には黒色のタール状のものが付着している。石匙は縦形のもの62と横形のもの67である。62は柄みが一方向に片寄る非対象形を呈し、一側縁の表面に刃部加工が施されるものである。67はやや厚手の玉髓剥片の一側縁に表裏から加工を施し、曲刃状の刃部を造っている。刃部角は大きく、柄みは僅かに造り出されている。70・71は曲刃状の搔削器類である。横長剥片の一縁に片面加工を施し、70は凸刃状に、71は凹刃状につくるものである。64は直刃状搔削器の折損したものと思われる。一縁の表面に連続加工調整を施し、鋭利な刃部をつくっている。65は片面に粗い加工を施し、尖頭状を呈している。73は石核の一面に打撃加工を施してやや粗い稜をつくり出し、その稜線部を刃部とする石器である。63・66・68・69・72・74・75は、一部に加工調整または使用痕を有する不定形石器である。76はフレックである。

礫石器の器種は磨製石斧(35)、凹石(37~39)、凹石・敲石(36・47)、敲石(46・48)蜂の巣状石器(40)、敲石・磨石(41)、磨石(42~44)、磨石・凹石(45)、石棒(49)、浮石状石製品(50)、石皿(51~54)等があり、計20点出土している。35は現存長6.3cm、幅3.6cm、厚さ2.7cmの乳棒状を呈すると思われる磨製石斧の基部破片である。37~39は凹石で、39は表裏に3カ所凹面を有している。36・47は凹石と敲石の複数の機能を備えたものである。36は表裏に凹面を有し、両端部に敲打痕跡が認められる。47は先端部に敲打痕と1カ所の凹面を有している。40は埋土中位から出土した蜂の巣状石器で、長さ25.5cm、幅20cm、厚さ16.8cmである。表裏と側面の3カ所に、径2cm前後のすり鉢状の穴を70ヶほど有している。41は敲石と磨石の複数の機能を備えたもので、4面に使用痕の摩滅と端部に敲打痕が認められる。磨石は42~44で、42と44は2面、43は5面が使用され摩滅している。45は半分ほど欠損しているが、表裏の2カ所に凹面を有し、側面は使用痕の摩滅が著しい。複数の機能を持つものである。敲石は46・48で、46は側縁の使用剥離が著しい。48は欠損した磨石の側面を敲き面としている。49は石棒の一部破片と思われるもので、器面に擦痕が認められる。石質は粘板岩である。50は埋土下位から出土した浮石状石製品で、一部が欠損している。石質は白色細粒凝灰岩である。51・54は石皿で、表裏の2面が使用されており、54の側面は丁寧に面取りが施されている。52はやや小形の半円状の石の1面を使用しているもので、側面の一部は整形されている。

本住居址の時期は、出土遺物等から縄文時代後期中葉~末葉に位置づけられると思われる。



- 1 7.5YR 5-1 褐色シルト質土 堅く締まっている。炭化物、土層を多く含む。
- 2 7.5YR 5-1 黄褐色シルト質土 やや堅く締まっている。多くの炭、焼土粒を含む。
- 3 7.5YR 5-1 黄褐色シルト質土 やや堅く締まっている。少量の炭化物を含む。
- 4 7.5YR 5-1 暗赤褐色焼土 堅く締まっている。褐色土がブロック状に混入。
- 5 7.5YR 5-1 黄褐色シルト質土 柔らかく締まりなし。微量の炭、灰を含む。



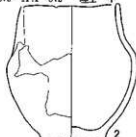
- 1 7.5YR 5-1 赤褐色焼土 堅く締まっている。微量の炭化物を含む。
- 2 5 YR 5-1 暗赤褐色土 柔らかく締まりなし。炭、炭化物を含む。

5.3・10.3・4.9 埋土・中



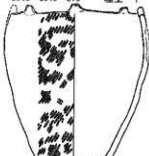
1

8.0・11.1・5.2 埋土・中



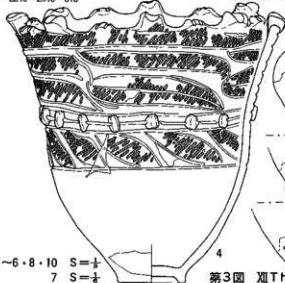
2

10.5・13.5・5.6 埋土・下



3

22.8・23.0・5.5 埋土・中一下



4

17.0・6.5・8.5 埋土・下



5



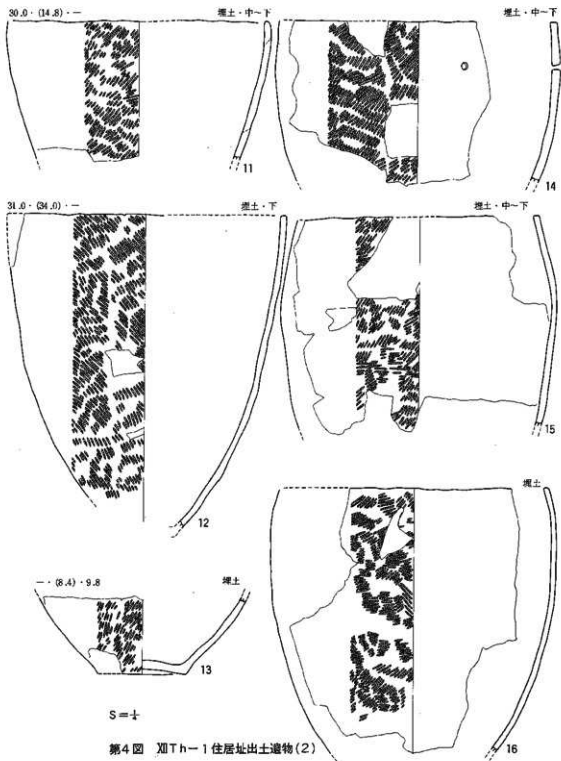
6



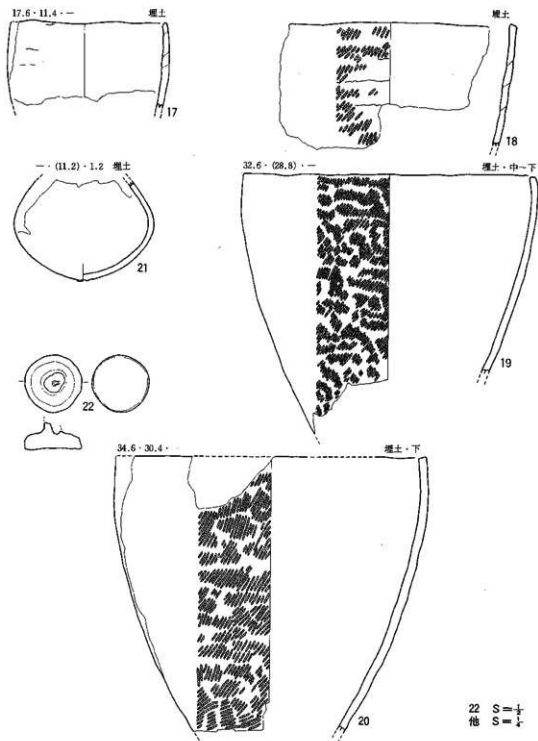
7

1~6・8・10 S=1/2  
7 S=1/4

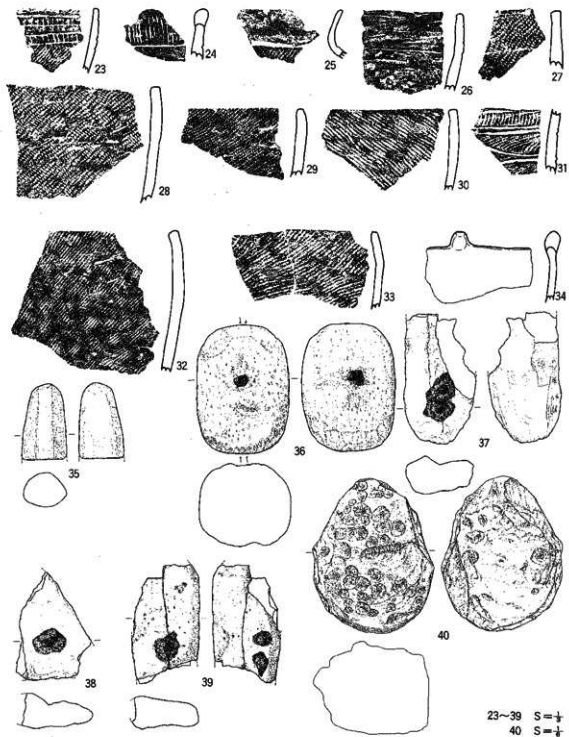
第3図 厩Th-1住居址・出土遺物(1)



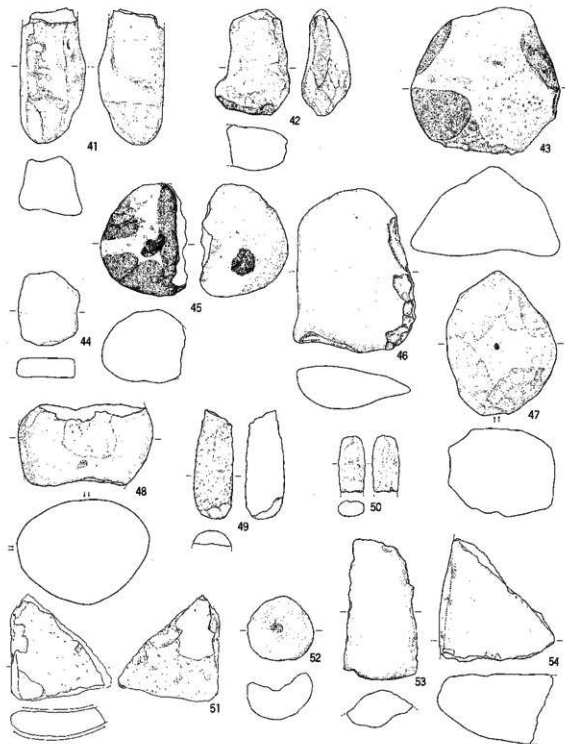




第5図 ⅧTh-1 住居址出土遺物(3)

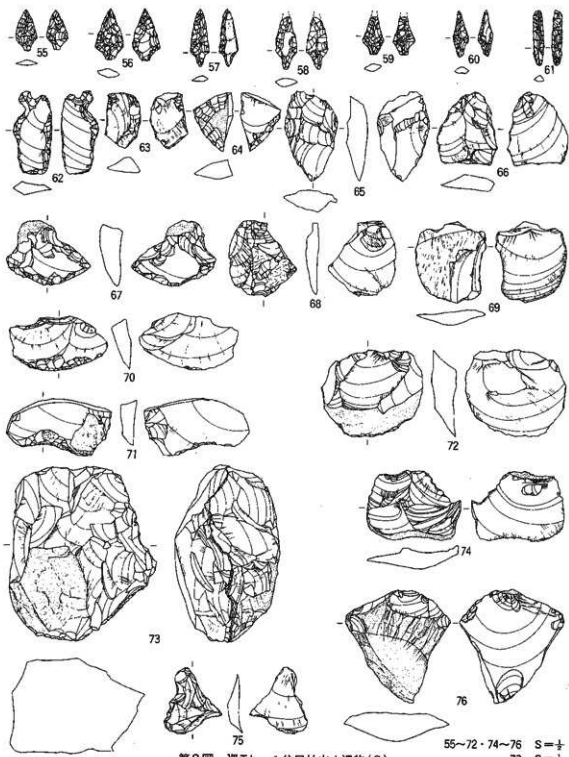


第6图 ⅩIt-1住居址出土遺物(4)



41~50・52~54 S =  $\frac{1}{4}$   
51 S =  $\frac{1}{2}$

第7図 XIIh-1住居址出土遺物(5)



第8图 刈Th-1住居址出土遺物(6)

## XII Th-2 住居址 (第9図・写真図版4・5)

位置 調査区東端部の緩斜面上に位置している。北東側でXII Th-1住居址と重複しており、新旧関係は本遺構がXII Th-1住居址に切られていることから(新)XII Th-1住居址→(旧)XII Th-2住居址となる。形態・規模 重複や南壁側の一部が掘掘り時における削平を受けているために詳細は不詳である。現存する東西辺から、長径4.9cm×短径4.5cmの長軸方向を西北に有す楕円形と推定される。

埋土 黒褐色シルト質土の単層で構成され、炭化物和焼土粒を多く含む全体に堅く締まっている。埋土上位には厚さ10cmに及ぶ焼土の堆積が認められるが、堆積状況等から遺構埋没後のものと思われる。壁 北壁と南壁の一部は擾乱による削平のため不詳であるが、現存する東壁40cm、西壁70cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がっている。

床 一部で曖昧なカ所も見られるが、ほぼ平坦で堅く締まっている。柱穴 大小7基の小穴が検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>は壁と炉の中間に円形状に配置されており、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は30cm前後の

P <sub>8</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	P <sub>8</sub>
口径cm	34×29	20×17	18×16	18×14	28×24	18×16	19×17	44×43
深さcm	33	29	10	10	9	13	10	32

深さがある。埋土の様相や配置から本遺構に伴う柱穴であろう。P<sub>8</sub>は西壁寄りに位置し、断面形はアラスコ状を呈している。底面は比較的平坦である。埋土の堆積状況は黒褐色シルト質土の単層であることから見て、本住居址に伴うピットかと思われる。遺物等は出土しておらず用途は不詳である。

炉 複式炉が遺構のほぼ中央部に位置している。ほぼ南北に長軸方向を有し、前庭部と燃焼部は石囲いされている。規模は前庭部が48cm×40cmの北側が開く方形状で、燃焼部は60cm×60cmのやや円形状を呈している。炉に使用した石は大小18個の垂角礫で、床面下3cm前後埋置している。前庭部は床面に比べ、10度前後傾斜したスロープ状となっている。前庭部と燃焼部は石(第11図52)1ヶで区切られており、燃焼部では石囲いの石が数ヶ欠落している。焼土の形成は3cmほどで全体に堅く締まっている。

遺物 (第9図1~7、第10図8~39、第11図40~52、第12図53~57・写真図版27~82~104、28~105~136、29~137・138)

土器 (1~22)は深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器の器種があり、大部分は破片で占められている。深鉢形土器(1~3・8~22)には精製土器と粗製土器があり、後者の出土量が多い。1は口縁部に小突起があり、口唇部に指頭痕が認められる。体部は沈線による入組文と斜縄文LRを施文している。2は口径20.4cm、器高19cm、底径7.3cmで、口縁部は内湾し体部は無文で、やや荒いミガキ調整を施している。3は底部破片でやや上げ底を呈し、体部

に斜縄文 LR を施文している。8 の口縁部破片は口唇部に刻目があり、入組文と斜縄文 RL を施文している。全体に胎土の焼成は良く堅緻である。9 は平行沈線文と磨消し縄文が施され、口縁部は外側に肥厚し、内面はミガキ調整されている。12 は小突起の内側にタテ方向に刻目があり、器面はタテとヨコ方向にハケメ状の施文をしている。胎土の焼成は良好で、器厚は 4 mm ほどである。16 は二段の小突起を有するもので、磨消し縄文が施されている。また、20 の小突起の口唇部には二条の刻目が施されている。14 には丹の付着が一部に見られる。粗製土器の地文は単節斜縄文 LR と RL があり、口唇部が丸味を持つ 15 や平坦な 10・11 などがある。4 は現存 1/4 程度の浅鉢形土器で、底部は平底を呈し、口縁部は外反している。胎土の焼成は良好で、内外面ともミガキ調整を施している。注口土器は 5・7 で、5 は注口部の破片である。7 は注口部の一部が欠損するほかはほぼ完形品である。底部は丸底を呈し、頸部に一条の浅い沈線が巡り、口縁部は外反している。全面に丁寧なミガキ調整を施している。6 は床上から出土の壺形土器の体部上半部破片である。有孔突起を有し、斜縄文 LR を施文している。胎土の焼成は良好である。

土製品は (19・23) の 2 点が、埋土中位～下位で出土している。19 はリング状土製品で、径 7.8cm の円形を呈している。高さは 2cm ほどで、側面は滑車状である。片面のみに径 2mm 前後の円形刺突文を二重に施している。焼成は堅緻で、一部を除きミガキを施している。23 は円盤状土製品で、鉢形土器と思われる体部破片を、楕円形状に人為的に打ち欠いて造っている。周縁部は全体に摩滅している。

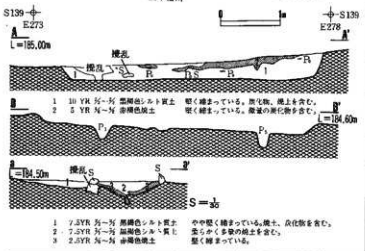
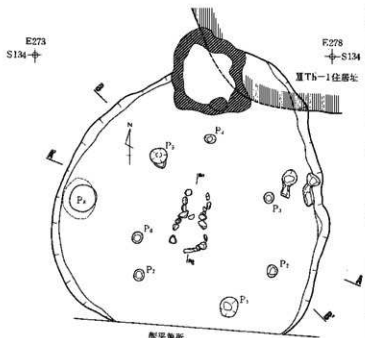
石器は剥片石器が 16 点、礫石器 17 点の計 33 点出土しているが、多くは埋土中位～下位からのものである。以下、剥片石器と礫石器の順に記述をする。

剥片石器の器種は石鏃 (24～26)、石匙 (27)、抉入石器 (32・34)、異形石器 (35)、不定形石器 (28～31・33・36～39) 等がある。24 は尖頭部が欠損した石鏃で、鏃身の側縁が外側に弧を描き、長めの茎部が平坦に造られるものである。25 は鏃身から鋭角な茎部を造り出している。26 は非対称で鏃身がやや厚手で、長めの茎部を造るものである。25・26 は形態的に尖頭部・基部も尖る尖基鏃に含められるものである。27 は横形石匙と思われるものの欠損品である。表面の周縁から丁寧な加工を施し裏面には一次加工面を大きく残す調整加工があり、尖頭刃状の端部を造り出している。刃部角は 45 度前後である。32・34 は抉入石器と分類したものである。32 は片面加工によって一側縁は凹刃状、他の側縁は直刃状を呈している。34 は一側縁に表裏加工による刃部をもち、平行する側縁に対をなす抉入部を造り出すものである。35 は床面出土のもので、両面加工調整により枝状の突出部を対称に造り出した異形石器である。枝状の先端部とその他には、使用痕跡を示す摩滅は認められない。幹状部と枝状突出部の断面形は菱形を呈す。石質は流紋岩質極細粒凝灰岩である。不定形石器とした 9 点の中には、搔削器類の欠損品と思

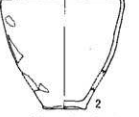
われるもの29・37、楔形を呈するもの30、柄状のつくり出しをもつもの39等がある。

礫石器の器種は磨製石斧(40)、打製石斧(41・42)、石獣状石器(43・44)、凹石(45)、磨石・敲石(46～49)、敲石(50～52)、石皿(53～56)、砥石(57)等である。40は長さ4.6cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmの小形磨製石斧である。基端部と側面には丁寧な面取りが施され、端部はやや直線的である。刃部は直線的で、使用時における刃こぼれと思われる剝離がある。石質は粘板岩ホルンフェルスである。41・42は刃部が欠損した打製石斧である。41は床上から出土のもので、基端部はやや丸味を呈している。刃部を欠くものの現存部位等から、短冊形と思われる。42の基部はやや荒い剝離調整が施されている。石質は41が粘板岩ホルンフェルス、42が両輝石安山岩である。43は長さ11.2cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmの石獣状石器である。基部は抉入があり、刃部はやや円を描いている。刃先は平坦で、側縁の一部は表裏から剝離調整加工を施している。石質は粗粒玄武岩である。44は長さ4.9cm、幅4.1cm、厚さ0.9cmで43と類似するものである。基部の抉入は43ほどではないものの剝離調整が施されている。石質は淡緑色凝灰質千枚岩である。45は凹石で、表裏の5カ所に凹面を有している。凹の深さは4mm～6mm程度である。また、側面は摩滅しており磨石の転用とも思われる。46～49は磨石・敲石の複数の機能を有するものである。円形ないし楕円形の46・49と三角柱状を呈する47・48の2種類がある。46は床上からの出土で、3面が特に使用され摩滅し、端部の片方に敲打痕跡が認められる。47・48はいずれも半分ほど欠損しており、3面が使用され摩滅している。また、47の端部には軽い敲打痕跡がある。49は表裏が良く摩滅し、3カ所に敲打痕跡が認められる。50は敲石で片方の端部のみが使用されている。51は長さ10.9cm、幅6.2cm、厚さ6.3cmで、両端部と側面の3カ所を敲面として使用している。端部に比べて側面の剝離が著しい。52は残存1/3程で、先端部に敲打痕がある。炉の石組に使用されており、欠損等による再利用であろう。53は石皿の一部破片で、表裏の2カ所が使用され摩滅している。54の石皿も破片のため全容は不詳である。1面のみの使用である。55は床面出土の石皿で、半分程欠損している。表裏の2面使用されているが、特に片方は使用が著しく凹んでいる。側縁には剝離調整加工等は施していない。56は1面使用のもので、一部に黒色のタール状の付着が認められる。石質は53・54が両輝石安山岩熔岩、55は両輝石安山岩、56は細砂質凝灰岩である。57の砥石は炉の石組に使用されていたもので、3面に使用痕跡がある。内2面の使用が著しい。石質は両輝石安山岩熔岩である。

本住居地の時期は、出土した遺物等から縄文時代中期末葉～後期初頭に位置づけられると思われる。



20.4・19.0・7.3 埋土



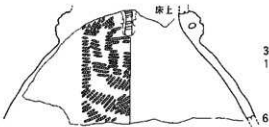
6.9 埋土・中～下



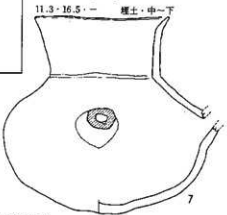
16.5・8.0・5.0 埋土・中



11.3・16.5・— 埋土・中～下

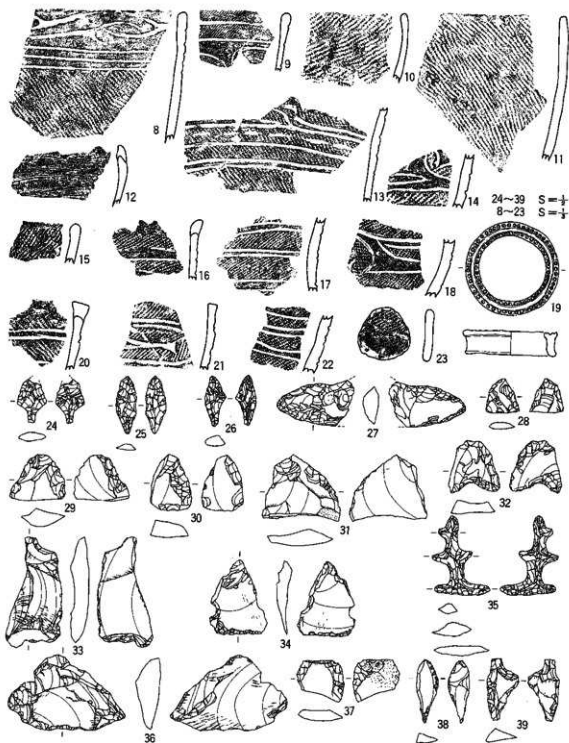


3~7 S=1/4  
1・2 S=1/4

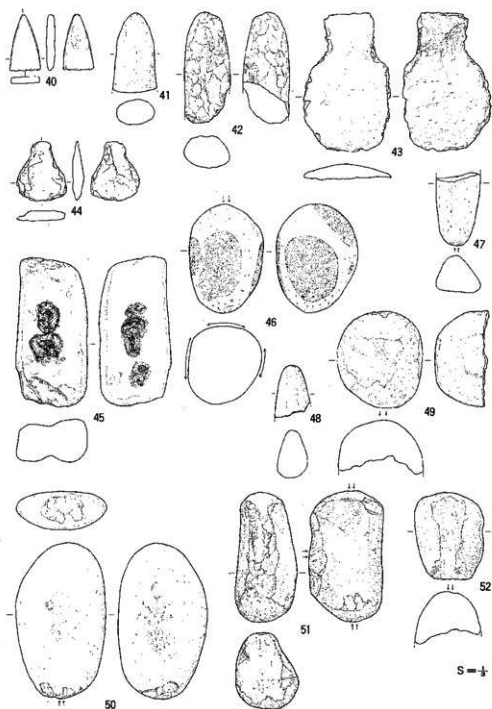


第9図 ⅡTh-2住居址・出土遺物(1)

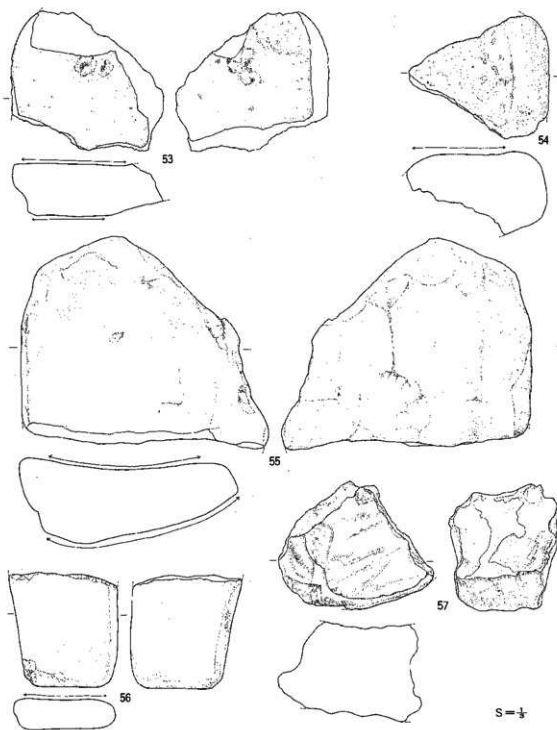




第10图 Xh-2住居址出土遺物(2)



第11图 Th-2住居址出土遺物(3)



第12図 XII Th-2住居址出土遺物(4)

## XII Tk 住居址 (第13図・写真図版 6)

**位置** 調査区東端部の南緩斜面上に位置している。**検出** XII Tk 焼土の精査中において、焼土形成下面に多量の炭と地床炉の一部が検出されたことにより、下に遺構が重複していることが判明したものである。新旧関係は焼土が住居址の上面に位置することから、(新) XII Tk 焼土→(旧) XII Tk 住居址となる。**形態・規模** 南壁と西壁の一部はトレンチ掘り等による削平を受けているために、詳細な形態と規模は不明である。現存する東辺と北辺から、長径3.9m×短径3.6m 前後の円形を呈すと推定される。

**埋土** 黒色と黒褐色シルト質土の2層に大別される。いずれも多量の炭化物をブロック状に混入し堅く締まっている。壁 壁はII～III層混合土中にあるために上場の輪郭が曖昧なヵ所もみられる。現在する壁高は東壁15cm、北壁24cmを割り、床面から120度～130度の勾配で外傾して立ち上がる。

**床** V層上面を床面とし、ほぼ平坦である。北西壁際には径30cm前後の範囲で堅い踏みしめヵ所が認められる。**柱穴** 大小合わせて小穴が9基検出したものの、柱穴としては埋土状況と

P <sub>00</sub>	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>
口径cm	38×35	38×30	20×19	16×15	16×14	20×20	19×16	28×26	29×26
深さcm	29	23	10	25	33	15	18	46	27

配置から P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub> が考えられる。また、P<sub>4</sub> と P<sub>9</sub> の埋土には炭化物が充満している。

**周溝** 検出されない。

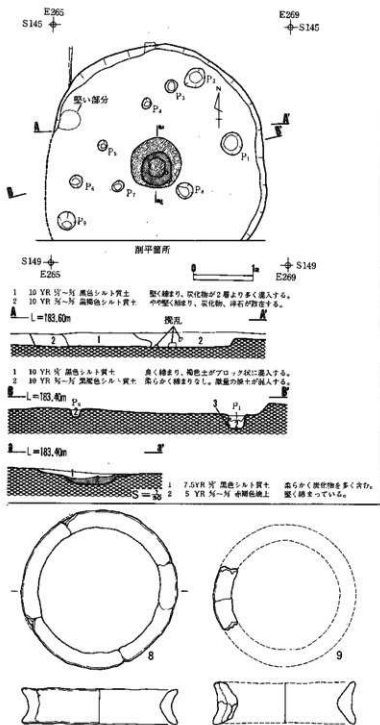
**炉** 地床炉が遺構のほぼ中央部に位置している。規模は長径56cm×短径50cmの円形を呈し、炉の外周には炭化物が散在している。焼土は層厚7cm前後でレンズ状に形成されている。

## 遺物 (第13図 1～9・写真図版29～139～147)

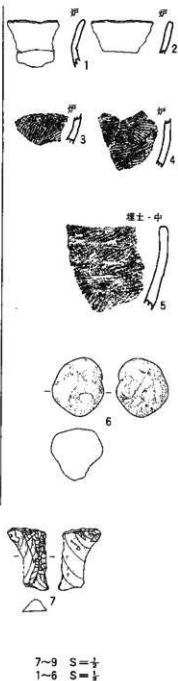
**土器** (1～5) 地床炉の上面から1～4が、埋土中位から5が出土している。1は小形壺の口縁部破片と思われるものである。口縁部は外傾し、頸部に1条の浅い沈線が巡り、口唇部が外削ぎされている。2は壺の口縁部破片で、火熱を受け一部赤褐色を呈している。口唇部は外削ぎされ、胎土の焼成は1よりも良好である。いずれも無文でミガキを施している。3と4は壺形土器の体部破片で、同一個体と思われる。無節の縄文 Lr を施文している。5は鉢形土器の口縁部破片で、器表には煤の付着と輪積痕跡が認められ、単節斜縄文 RL を施文している。

**石器** (6・7) 2点は埋土中位からの出土である。6は球形を呈する玉體の全面に敲打痕をもつもので、加工道具の一種と考えられる。重量は98gほどである。7は直刃状の撻削器類で、表面の一侧縁に刃部をつくっている。刃部角は45度前後で、石質は珪質泥岩である。

**リング状土製品** (8・9) 8は完形品で、直径8.8cm前後の円形を呈し、側面形態は滑車状である。高さは2cmを測る。9は破片で8と類似している。無文で胎土の焼成も良好である。



第13図 VII Tk住居址・出土遺物



XII S/住居址 (第14図・写真図版6)

位置 南東部緩斜面の中央北寄りに位置し、北には XII T/ 陥し穴状遺構がある。検出 III 層の中位において、焼土(地床炉)及びその周辺に広がる踏みしめ跡を検出し、住居址として登録したものである。形態・規模・壁不明である。床 III 層中位の構築である。炉の北側は粗掘の際に削平されたが、南側の状況から推測すると、南に緩い下り勾配を呈していたと思われる。

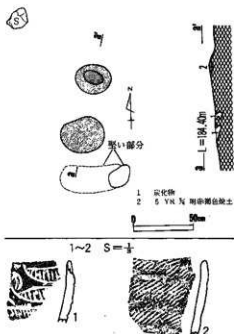
炭化物、焼土粒が散在するカ所の南側に、堅く締まった80cm×30cmの長楕円状の踏みしめ跡があり、特に東側の一部が強い締まりとなる。柱穴 周辺部を精査したが、検出されていない。

炉 地床炉である。焼土が20cm×10cmの楕円形状に広がり、焼土の周辺及び南側に焼土粒、炭化物が広がっている。焼土の形成は僅か数センチと薄く、色調は明赤褐色を呈しており柔らかい。

遺物 (第14図 I~2・写真図版29-148~149)

1・2は地床炉附近から出土した鉢形土器の口縁部片である。1は沈線により入組状の文様を構成し、区画されたカ所に縦位の連続刻目文を施すものである。2は無節斜縄文(Lr 横回転)が施文されるものである。1・2は、内面が横ナブされ、胎土に粗砂を多く含む焼成が良いなどの類似点をもつ。器厚は1が5mm位で赤褐色を、2は4mmで褐色を呈している。

本住居址は、出土遺物から縄文時代後期後葉に所属する可能性が強いと考えられる。



第14図 XII S/住居址・出土遺物

## XIII Sf 住居址 (第15図・写真図版7)

位置 南東部緩斜面の最南端に位置する。南には湿地帯が広がり対岸の9区まで続いている。東側6.0mにはXIII Sg 住居址がある。検出 III層の中位において、炭化物が多く混入する円形暗色部として検出された。形態・規模 平面形はほぼ円形を呈し、規模は径2.4mを測る。

埋土 埋土の主体をなすのは炭化物が混入する黒色シルト質土で、層厚は25cm~15cmである。下位には黒褐色シルト質土が壁寄りに堆積する。いずれも柔かく締まりはない。

壁 III層中~下位にあって締まりはない。60度~70度のやや緩い角度で立ち上がって外傾する。床 III層の下位にあり平坦であるが、締まりはない。柱穴 東壁際の床面下10cmで、P<sub>1</sub>(口径18cm×17cm、検出面からの深さ約28cm)が検出されているが、柱穴であるか不明である。

ピット 床面下約10cmで、貯蔵穴と思われるフラスコ状ピット P<sub>1</sub>と P<sub>2</sub>が検出されている。P<sub>1</sub>は平面形は円形を呈し、開口部径50cm・底部径60cmで壁は底部から奥に挟り込まれてオーバーハングする。検出面からの深さは30cmで、底面は平坦で締まっている。埋土は炭化物がわずかに混入する黒色砂質土の単層である。P<sub>2</sub>も平面形はほぼ円形で、開口部径65cm・底部径100cm、壁は70度位に内傾し立ち上がる。検出面からの深さは60cmで、底面は平坦で締まっている。埋土は炭化物の混入する黒色砂質シルトが主体をなすが、埋土中位に投げ込まれた焼土塊と黒褐色土がある。P<sub>1</sub>と P<sub>2</sub>のいずれからも遺物は出土せず、本住居址に伴うピットであるか、どうかは不明であるが、本住居址を切っていないので、住居址以前の構築と思われる。

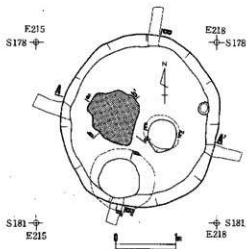
炉 地床炉が西壁寄りに1基ある。焼土が80cm×80cmの不整な台形状に広がり、一部攪乱を受け焼土塊が床面より盛り上がっている。焼成は良く、堅く締まっている。焼土の厚さは最大10cmを測る。

## 出土遺物 (第14図1~10・写真図版29-150~159)

3が地床炉上面から、他の遺物は埋土下位として一括出土したものである。1は、壺形土器の胴部で、頸部と胴上部に沈線を巡らし胴部には曲線沈線で無文帯と縄文帯を区画し、三叉文及び巴文を構成する。縄文帯には細い原体(LR)を用いた充填縄文が施される。器表に一部、丹塗りの痕跡が見られるが、焼成が脆く摩滅が激しい。器厚は4mm、色調は黄褐色である。

2と3は精製の鉢形土器で、2は口縁が直立し、3は体部が湾曲し膨らみ、口縁部が屈曲し外傾する器形を呈す。平行沈線で画した帯縄文(LR横回転)をもち、研磨帯には三叉文又は入組三叉文が施文される。器厚は4~5mmで、2が暗赤褐色、3は暗褐色である。1~3は晩期前葉の上器で、大洞B式に分類されるものである。

4・5は沈線によって入組文が施文されるもので、地文は4が斜縄文(RL横回転)、5は原体LRによる充填縄文が施される。共に焼成は良いが、4には石英砂、5には砂粒が多く含まれ、粗い感じのする土器である。器厚は前者が8mm、後者が5mmである。



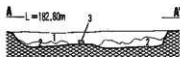
- 1 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 柔らかく締まりなし。炭化物を含む。
- 2 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 柔らかく締まりなし。
- 3 5 YR 暗赤褐色土 柔らかく締まりなし。



- 1 8.5YR 赤褐色土 堅く締まっている。
- 2 7.5YR 暗褐色砂質土 締まっている。炭土粒が混入する。
- 3 7.5YR 灰褐色砂質土 柔らかく、サクサクする。
- 4 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 堅く締まっている。



- 1 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 柔らかく、炭化粒が多く混入する。
- 2 7.5YR 暗褐色砂質シルト質土 締まっている。粘性あり。炭化粒混入する。
- 3 5 YR 暗赤褐色土 締まっている。
- 4 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 大変柔らかく締まりなし。下に浮石を多く含む。



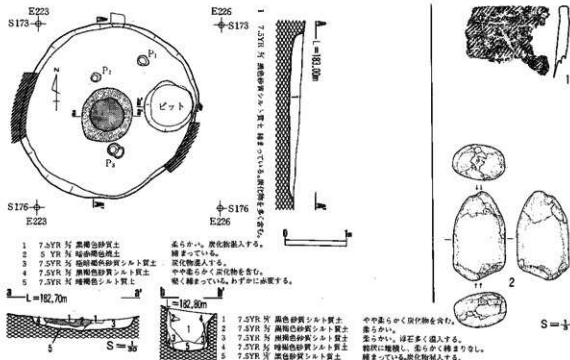
- 1 7.5YR 灰褐色砂質シルト質土 やや締まっている。炭化物がわずかに混入する。
- 2 7.5YR 暗褐色シルト質土 柔らかい。(V層土)



1~10 S=+

第15図 XIII S f住居址・出土遺物





第16図 XIII Sg住居址・出土遺物

6と7は鉢形土器で、6は無文帯に横位2条の沈線が、7には単節斜縄文(LR横回転)が施される。器厚は4mm、焼成は良好でない。

8~10は深鉢形土器の口縁部片で、器形が内湾するもの9、直立気味のもの8・10であり、口唇部が外削されるもの9・10がある。地文は8が無節斜縄文(Lr横回転)9・10が単節斜縄文(LR横回転)であり、器厚は6~7mmである。

出土遺物から、本住居址の所属する時期は縄文時代晩期初頭に位置づけられるであろう。

#### XIII Sg住居址(第16図・写真図版8)

位置 南東部緩斜面の最南端に位置する。南側に湿地帯が広がり、西側6.0mにはXIII Sf住居址がある。検出 IV層相当面において、円形暗色部として検出された。形態・規模 平面形はほぼ円形で、規模は径2.7mを測る。埋土 炭化物が多く混入する黒色シルト質土の単層で構成され、締まっている。層厚は10cm~18cmである。

壁 V a層中にある。西側及び東側の一部が粗掘の際に攪乱を受け、消失している。現存する壁高は北壁20cm、南壁10cmである。床 V b層上位の浮石が多く混入するシルト質土で、堅く締まっている。凹凸少なくほぼ平坦である。柱穴 小ピットが3基検出されている。P<sub>1</sub>(口径16cm×13cm、深さ10cm、以下同じ)、P<sub>2</sub>(12cm×10cm、40cm)、P<sub>3</sub>(25cm×18cm、42cm)であ

るが、柱穴であるかどうかは不明である。ピット 住居に伴う貯蔵穴と思われる円筒状のピットが東側に1基ある。開口部径75cm、底部径65cm、深さ65cmを測る。埋土は炭化物混入する黒色～黒褐色砂質シルトで構成される。埋土上位から石器（第16図2）が出土している。

炉 中央部に地床炉が1基ある。焼土は径50cmの円形に広がり、焼成はあまり良くなく暗褐色を呈し、焼土の厚さは約5cmを測る。焼土のまわりには、炭化物を含む暗褐色土が径90cmの範囲に広がっている。

#### 出土遺物（第16図1～2・写真図版29～160・161）

1は住居址内ピット埋土上位から、2は遺構埋土中位から出土している。1は粗製深鉢形の口縁部片で、やや内湾する器形を呈し口唇部が平坦につくられる。胎土に粗砂を多く含み、焼成が悪く地文の縄文が摩滅し網目が当然としないものである。器厚は6mm、色調は灰色である。2は磨製石斧転用の敲石である。上下両端部が使用され、使用箇所は幾つかの面によって構成され、各面には無数の打点をもつ。石質は細砂質凝灰岩で、計測値は長さ7.2cm・幅4.2cm・厚さ2.6cm・重量120gである。

本住居址からは、所属する時期を判定し得る遺物が出土しておらず時期は不明である。

## 2. 平安時代竪穴住居址

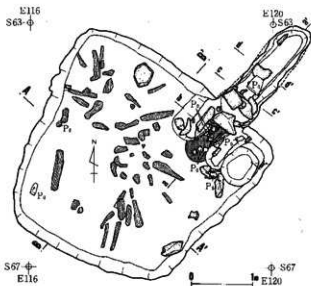
調査区北西部の段丘崖縁辺部で4棟検出されている。

### X P / 住居址（第17図・写真図版9）

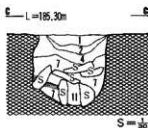
位置 6区のもっとも西側でII層中に検出された遺構である。遺構の南西側5m付近には高さ1m～2mの段丘崖があり、崖下には東流する沢がある。東側にはX Qi 住居址が検出されている。形態・規模 遺構は焼失家屋で、平面形は不整な台形状を呈している。北東壁にカマドが1基あり、主軸方向はN41°Eを示す。壁 各壁の長さとは北東壁3.5m・70cm、南東壁2.6m・30cm、南西壁2.5m・35cm、北西壁3.1m・40cmである。壁は床面から60～80度の角度で外傾して立ち上がる。

埋土 3層に大別され、上位は黒褐色土、壁上位から床面中央付近までは暗褐色土、壁際の低位は褐色土で構成される。埋土低位から床面直上には炭化材や焼土が多く、炭化材はケヤキと鑑定された。形状や寸法のわかる炭化材は見られない。

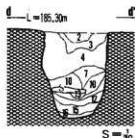
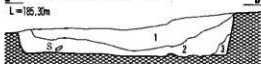
床 貼床でほぼ平坦で、やや締まっている。貼床の厚さは5cm～10cm、炭化物の混入する黒褐色土で構成される。柱穴や周溝は検出されていない。北西の壁際中央付近と南隅付近には粒径40cm位の亜角礫があり、カマドの傍には天井石として使用された長大な礫の折れたものが放置されている。また、壁際やカマド付近から土師器片が出土している。



- 17 10 YR 弱黄褐色土 表土に灰化物を少量含む。  
 18 10 YR 弱褐色土 やや強く締まっている。  
 19 10 YR 弱褐色土 強く締まっている。  
 20 5 YR 弱黄褐色土 やや強く締まり表土を含む。

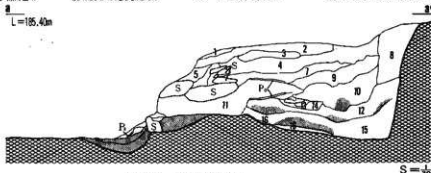


- 1 7.5YR 黄褐色粘土 強く締まりバミスを含む。  
 2 7.5YR 暗褐色砂質土 粘性は全く下部に灰化物を含む。  
 3 7.5YR 暗褐色砂質土 やわらかい。  
 4 7.5YR 黄褐色シルト質土 灰化部分



- 1 2.5YR 黄褐色火山灰土 きらさらしている。  
 2 10 YR 黄褐色土 やや締まっている。  
 3 7.5YR 黄褐色土 粘性がある。  
 4 10 YR 褐色土 火山灰とバミスを少量混入する。  
 5 7.5YR 褐色土 やや強く締まり、焼土を含む。  
 6 10 YR 暗褐色土 やや締まっている。  
 7 10 YR 黄褐色土 やわらかい。  
 8 10 YR 黄褐色土 表土と火山灰を少量含む。

- 9 10 YR 褐色粘土質土 強く締まっている。  
 10 10 YR におい黄褐色粘土 強く締まっている。  
 11 7.5YR 黄褐色土 やわらかく締土粒を混入する。  
 12 5 YR 暗赤褐色粘土 灰化物を少量含む。  
 13 10 YR 暗褐色土 火山灰をブロック状に含む。  
 14 10 YR 黄褐色土 やや締まっている。  
 15 5 YR 黄褐色土 やわらかく、表土と灰化物を含む。  
 16 5 YR 黄褐色土 締まりがあり、灰化物を含む。



第17図 X P / 住居址

カマド 北東壁の東寄りにあり、カマド傍には小ピットがある。カマドは掘り込み式の大きな煙道を持つ。煙道は崩落しているが、袖は袖石が傾きかけているだけで、ほぼ焼絶当時のまま保存されている。袖部は板状の礫を2ないしは3枚並べて10cm位埋め込んで立てて芯材とし、粘土とシルトを貼り付けて造られている。また壁際の両袖の上には長大な礫が渡してある。燃焼部中央には支脚に使用されたとと思われる角柱状の礫が置かれている。燃焼部の焼土は2層に分かれる。上位は締まりがなく濡った焼土、下位は締まっており混入物のない焼土である。

煙道は石組部分と甕の部分と粘土の部分に分かれる。石組部分は住居址の壁から50cm位までの間を占め、石組の主体となっているのは50cm×40cm×10cm位の盤状の天井石と、それを下で支える3つの垂角礫である。これらの礫の隙間を埋めるように板状の礫が置かれ、シルトが充填されている。この石組から15cm位奥には底を抜いた土師器の甕が口縁部をカマド焚口方向に向け、ほぼ水平に置かれている。甕の下部には板状の礫が置かれ、甕を固定している。甕から煙出し部分までは炭化物や焼土を含む粘土が堆積している。これは粘土で造られた煙道が崩落したものと思われる。煙道の勾配は石組部分から甕の部分まで急に上った後、ほぼ水平に続き煙出し部付近でやや上り勾配となり、煙出し部は直立する。粘土の上の埋土は主に黒～黒褐色土で構成され、灰黄色火山灰の小ブロックや橙色パミスが混入する。住居址の埋土にも壁際部分に灰黄色火山灰が最大厚5cm位で弓状に堆積している。石組内の埋土は焼土の粗粒の混じる黒褐色で締まりはない。甕内の埋土は炭化物のまじる黒褐色土で、石組部分と連続している。両者とも締まりはない。また、甕と粘土の煙道の下位には煙出し部に向かって下る煙道の掘り込みがある。甕の下位の埋土は締まっており、主に焼土や粘土で構成される。底面付近は締まりのない黒褐色土で、底面には煤状の炭化物の薄い層が認められる。

カマドの規模は右袖で長さ75cm・幅40cm、左袖で長さ75cm・幅45cm、両袖の間隔は30cm、煙道の掘り込みの長さ1.7m・幅35cm～40cm・深さ50cm～90cmである。燃焼部の焼土は80cm×40cm位の広がり、厚さは13cm位である。焼土は前述のように2層に分かれ、上層は5cm、下層は8cm位である。

ピット カマド横のピットは口径55cm×65cm、深さ30cmである。埋土は炭化物や焼土の混入する黒褐色土で構成され、少量の土師器片が出土している。

この住居址はカマドの燃焼部の焼土や煙道の構造が二重になっていることから、カマドの造り替えが行われているようである。

一期目は、煙出し部に向かって下り勾配を示す煙道の時期で、石組から奥は徐々に下がりが、煙出し部付近で急に立ち上がっていたようである。煙道は粘土で造られていたようで、礫はほとんど混入していない。天井部分だったと思われる粘土は焼けて崩落しており、厚さ10cm以上の焼土となる部分もある。

二期目は、一期目の焼道を埋めて、石組の端より少し高い位置に抜いた甕を置き、ほぼ水平に続き、煙出し部が直立する煙道の時期である。甕から煙出し部まではやはり粘土を主として使用し、礫が僅かに混入している。袖石や石組部分は造り替えたような形跡は明瞭でないので、煙道を主とした造り替えが行われたようである。また、貼床の時期との関連もあるので、住居址の建て替えに合わせたカマドの改築ということも考えられる。

**遺物** (第18図1～5・写真図版30—169～173)

床面直上やカマド焚口から土師器が得られている。

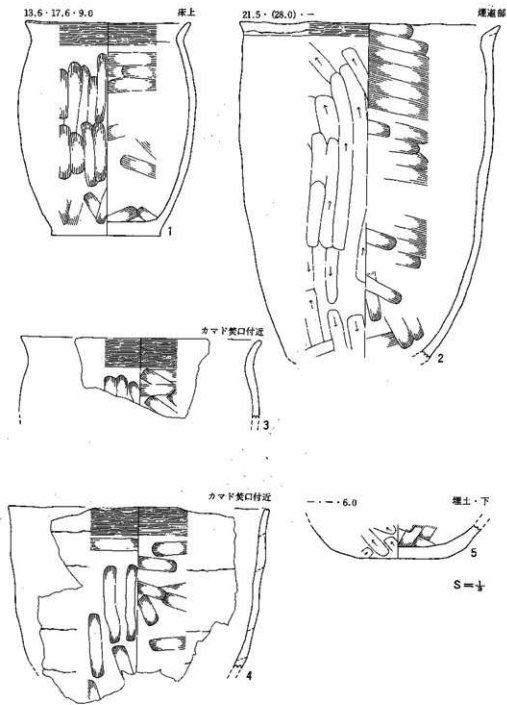
1は床面直上から出土した甕である。胴部中央が膨らんで頸部がやや窄まって、口縁部は短かく外反して広がる。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はナデである。法量は口縁部径13.6cm、底部径9.0cm、器高17.6cmである。胎土には細礫を含み、焼成はかなり堅緻である。2は煙道に使用されていた大形甕である。底部は欠損している。胴部の膨らみは小さく長胴形を呈し、口縁部は短かく外反する。器面調整は外面は口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、内面はナデである。口縁部外面には粘土紐の積み上げ痕が残る。法量は口縁部径21.5cm、器高28cm位である。胎土に細礫を含み、焼成はかなり堅緻である。

3はカマド焚口付近から出土した甕の口縁部付近の破片である。口縁部は短かく僅かに外反する。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はナデである。法量は口縁部径20cm位と思われる。胎土は粗砂を少量含み、焼成は堅緻である。

4、5は同一個体と思われる鉢形土器の破片である。カマド焚口付近から出土している。4は体部下位から口縁部までの破片、5は底部から体部下位にかけての破片である。器形は底部から徐々に広がって直線的に口縁部に続くとと思われる。器面調整は口縁部付近は内外ともにヨコナデ、体部外面は底部付近がケズリで他はナデ、体部内面はナデである。体部内面には粘土紐の積上痕が残る。法量は口縁部径27cm、底部径6cmで器高15cm位であろう。胎土に粒径2～8mmの小礫を多く含み、焼成は堅緻である。

**X Qi 住居址** (第19図・写真図版10・11)

**位置** 北西の平安時代住居址が集中する区域に位置する。南方10mには段丘崖が、西方5mにはX P/住居址がある。**検出** 灰白色浮石が混入する黒色土の方形プランとして検出された。**形態・規模** 遺構の東隅の遺跡分布調査時における試掘によってわずかに破壊されている。平面形は平行四辺形とも言える歪みをもつが、基本的には方形の範疇で理解される。住居址の主軸方向は南東(S39°E)であり、平面規模は4.15m×4mを測る。



第18図 XPI住居址出土遺物

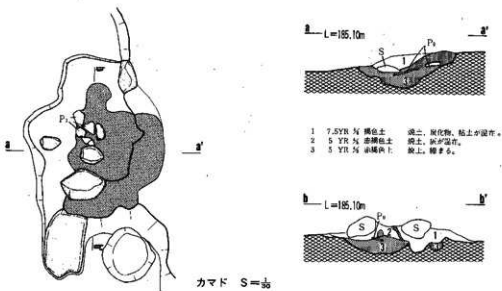
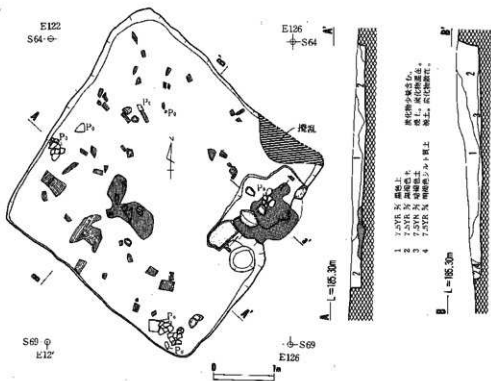
**埋土** 自然堆積で2層に分けられる。上位の層は粒径2mmのスコリアが混入する黒色土で埋土中央部にレンズ状に堆積し、層厚は10cm～15cmである。下位の層は炭化物が少量混入する黒褐色土で壁際に厚く堆積する。埋土下位から床面直上にかけて厚さ3cm～5cmの焼土があり、焼土の下からは炭化材が多く出土している。炭化材は針葉樹（現在の樹種では最も杉に似ている。）と鑑定された。壁 各壁の長さとは高さはそれぞれ、南東壁4.12m・13cm、南西壁3.9m・12cm、北西壁4.22m・19cm、北東壁4.13m・35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** 平坦であり、黒褐色土中であって全体に締まっている。周溝および柱穴は検出されていない。火災にともなったと考えられる炭化材が床面全体に分布し、その繊維方向は遺構の中心を向くものが多いが、細片であるため建築材としての形態は不明である。ピット カマド右袖わきのピットは、径45cm、深さ5cmを測り炭化物や焼土の混入する黒褐色土が埋積している。

**カマド** 南東壁の北寄りにあり、焚口部と袖部の一部を残すのみで、上半の大部分は攪乱されており、カマドの原形をほとんど止めていない。カマドの規模は、長さが現存部で0.8mあるが、幅は現存部から推定して約1.4mである。カマド付近には礫が不規則に残されており、袖部または天井部に使用されたものであろう。袖部は残存する部分から推定すると、長径20cm～30cmの礫を芯材に利用してその囲りに粘土やシルトを貼りつけて構築したようである。右袖近くには天井石として使用したとみられる長径55cmの平盤な安山岩の礫がある。焚口部から燃焼部にかけて78cm×110cmの範囲に焼土が広がり、その厚さは最大13cmに及ぶ。この焼土上面には土器片が散在していた。

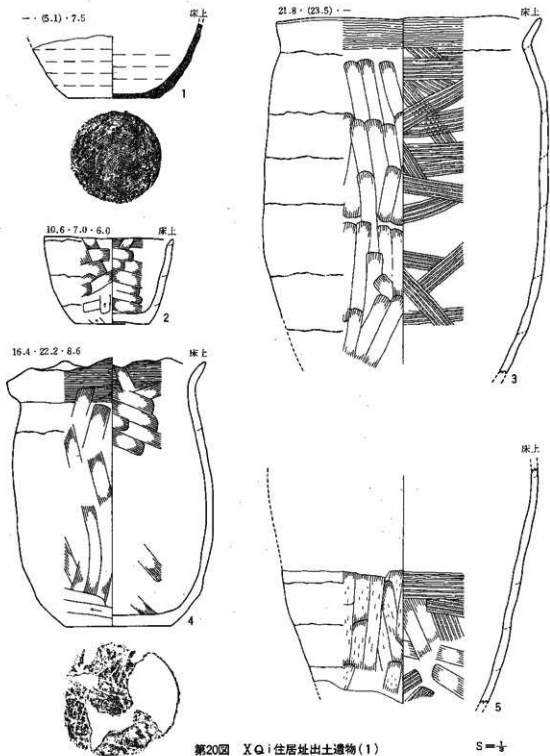
#### 遺物（第20・21図・写真図版31—181～186）

すべて床上またはカマド内から出土した。須恵器壺の底部付近1、土師器の小鉢2・壺3～13である。1は床面上、上向きに出土した。他に破片が出土していないことから再利用に供したものであろう。灰緑色を呈し外面にわずか黒斑がある。内外面ともクロコ形成の指の痕跡が明瞭であり、底部は回転糸切りである。胎土には砂から小礫まで混入している。2は器形が歪み、器表の凹凸が激しい粗雑な形成による小形の鉢である。外面はヘラナデ、内面はナデによって調整されている。口縁部内面にタール状の物質及びススが附着している。法量は、口縁部径10.6cm、底部径6.0cm、器高7.0cmである。胎土には多くの細礫が含まれている。壺は4を除き全様を呈するものはない。3・6はほぼ器形が判明するが、その他は口縁部片乃至は体部片で全様は不明である。4は床面出土の壺である。胴部下半にやや膨らみをもち頸部は窄まる。口縁部は外反するものの、非常に不整で凹凸があり波打っている。形成は粗雑である。器面調整は、内外面とも、口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデである。外面底部付近にはケズリ調整が僅かに施される。底面には木葉痕がある。外面にタール状の附着物がある。法量は、口縁部径16.4cm、底部径8.6cm、器高22.2cmである。胎土には小礫が多量に混入し、焼成は脆い。3は床



第19図 XQi住居址



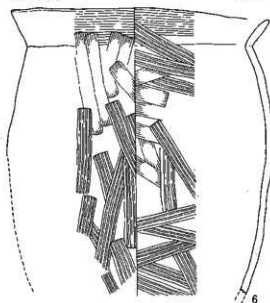


第20图 XQi住居址出土遺物(1)

S=1/4

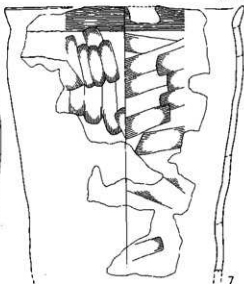
21.7・(21.0)・一

カマド



6

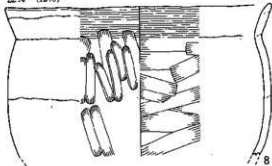
カマド



7

22.4・(12.5)・

カマド



8

カマド



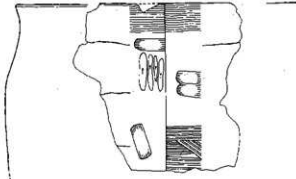
10

カマド



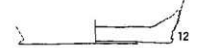
11

カマド



--- 13.0

カマド



12

--- 10.0

カマド



S=+

第21図 X Qi 住居址出土遺物(2)

面出土で、胴下部～底部が欠損している。器形的にあまり凹凸なく調整されているものの、粗雑な形成である。胴部は円筒状を呈し、頸部は緩く窄み口縁部は擴み出すように外反している。器面調整は、口縁部は内外面ヨコナデ、体部は外面はハケメである。口縁部径は21.8cmである。粘土の横上げの痕跡が体部上半で顕著に認められる。6はカマド内から出土した約1/2残存の甕で、器形は胴中央部がやや膨らみ、頸部が窄み、口縁部はやや強く外反し広がる。器面調整は、内外面とも口縁部ヨコナデ、体部はヘラナデ、ハケメである。内外面に黒斑がある。胎土には多量の細礫を含み、焼成は堅緻である。

#### X Qn 住居址 (第22図・写真図版11)

**位置** 北西部の平安時代住居址が集中する区域に位置する。南1mには段丘崖が、南東5mにはXI Qb住居址が隣接する。**形態・規模** 分布調査時における試掘によってカマドを含む東の部分と、西の部分が大きく破壊されている。平面形は現存部から推定して北東方向にやや長い3.7m×3.3mの長方形を呈する。住居址の主軸方向は南東(S43°E)である。

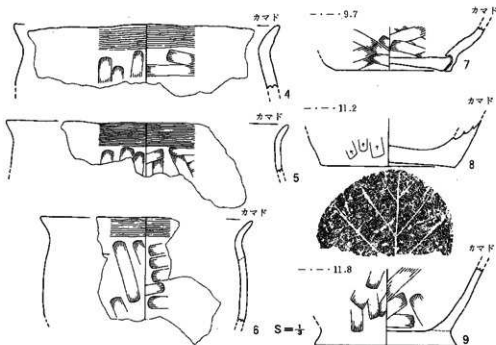
**埋土** 上位は黒色土、下位は黒褐色土であり、黒褐色土中には白色細粒浮石が全体に含まれ、さらには炭化粒が少量混入している。壁 測定可能な壁の長さおよび高さは、北東壁3m・50cm、南東壁3.5m・65cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床 白色細粒浮石を小ブロック状に混入する黒色土で全体的に締まっている。段丘崖に近いため南隅の床は柔かく、沈み込みがみられる。柱穴・周溝 検出されていない。

**カマド** 焚口部と燃焼部の下位部分と煙道部が残存するのみであり、全体像は明確に得ない。規模は現存部から推定して、袖幅が1.3m、煙道幅が42cm、煙道長が1.45m、煙出し部径37cmである。両袖は破壊された赤色変化した礫が残されており、袖の芯材として利用されていたものであろう。燃焼部の焼成による赤色変化は厚さ18cmに及ぶ。煙道部は地山を掘り込み緩かに上昇するように造られており、煙道途中に煙道壁を補強するように礫が立位に埋置されている。煙道部のa-a'の断面に示されているように、礫に対面する煙道壁には礫の抜き取りの痕跡があることから考えるならば、煙道部は礫の組み合わせによって構築されていたと推測することができる。その例として、至近にXI Qb住居址がある。

#### 遺物 (第22図1～3、第23図4～9・写真図版31-187～195)

すべてカマド及びその周辺から破片として出土したものである。1・2は同一個体と思われる甕で、全体の器形は円筒状に近いものであろうか。底部が小さく外に張り出し、胴部はほぼ直立し立ち上がり、短い口縁部がわずかに外反している。器面調整は、口縁部は内外ともヨコナデ、胴部は外面では縦位のヘラナデ、内面では横位のハケメとヘラナデである。胎土には小礫多く混入し、焼成はあまり良好ではない。底面に木葉痕がある。法量は口径19.4cm、底径12.0





第23図 XQn住居址出土遺物(2)

cmで、器高は20cm前後と思われる。

3は須恵器の甕の口縁片である。4～6は土師器の甕であり、4～6は口縁部破片であり全体の器形は不明である。7～9は底部片で8には木葉痕があり、7は湾曲する底面に意識的に砂粒を付着させた砂底のものである。

#### XI Qb 住居址 (第24図・写真図版12)

**位置** 北西部の平安時代住居址が集中する区域に位置する。北西5mにはXQn住居址があり、平安時代住居址のなかでは最も東側にある。南1mには段丘崖があって、崖下には沢が東流する。**検出** 白色細粒浮石が砂状に混入する黒色土の方形プランとして検出されている。

**検出時**には、煙山部の礎が露出していた。**形態・規模** 平面形は方形を呈し、住居址の主軸方向は南東—北西(S47°E)である。規模は3.25m×3.5mを測る。**埋土** 自然堆積で3層に分けられ、上位から、黒色土・白色細粒浮石が混入する黒褐色土・スコリアが混入する黒褐色土によって構成される。**壁** 各壁の長さとは高さは、北東壁3.3m・53cm、北西壁3.0m・42cm、南西壁3.15m・32cm、南東壁3.0m・42cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**床** 黒色土で締まっている。床面中央のカマド寄りには、およそ95cm×65cmの不整形に広が

る焼土がある。これは周辺に炭化材が伴うことから火災によるものとも考えられるが、明確にし得ない。南西の床面は段丘壁が近いのか、沈み込みがみられる。柱穴・周溝 検出されていない。ピット カマド左方に2基のピットがある。P<sub>1</sub>は開口部径30cm・深さ8cm、P<sub>2</sub>は開口部径60cm・深さ14cmで、共に浅皿状を呈す。埋土は炭化粒混入の黒褐色土である。

カマド 他の住居址のものに比較し多数の礫を利用して造られている。多くの礫は崩れているが原形を推定するに十分に足る状況である。規模は、袖幅1.36m・袖長85cm・煙道幅55cm・煙道長90cm・煙出し部径40cm×30cmである。袖部は粘性シルトを基部に盛り上げ、その上に芯材として礫を縦に埋置し、さらにそれを被覆するように粘性シルトを貼り付けて固着している。天井部は、これらの両袖の礫の間に長い扁平礫を橋渡しして構築したようである。煙道部は地山を掘り込み、その両壁に扁平礫を立位に設置しその上に扁平礫を横にわたして、粘性シルトで固着している。煙出し部は煙道部と同じように礫を利用しているようであるが、原形を止めていないため詳細は不明である。

#### 遺物 (第25図1～4・写真図版31～196～199)

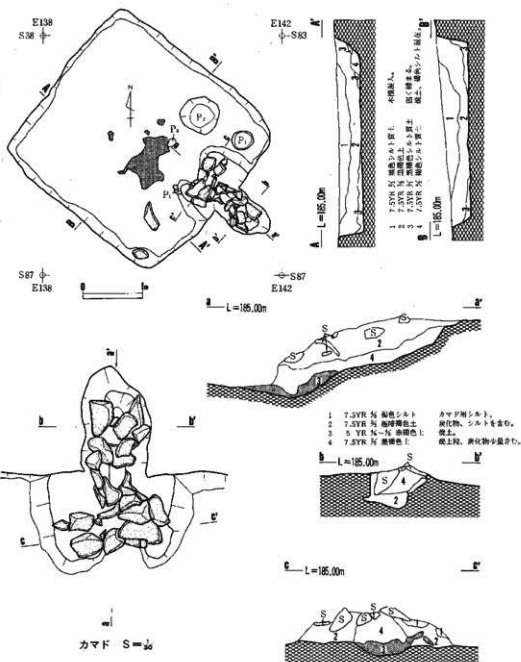
カマド及びその周辺から坏が2点、甕が1点、床面から石器が1個出土している。1・2はロクロ成形の坏で、1はほぼ復元でき、2は約半が復元できたものである。1は2に比較しやや小さめで、器壁の立ち上がりが緩いが、胎土中・焼成・色調などは酷似している。底部は共に回転糸切りの無調整である。法量は、1は口径13.6cm・器高4.7cm・底径6.1cm、2は口径14.0cm・器高5.3cm、底径6.2cmである。3は底部～口径部の約半が復元できた甕である。全体の器形は円筒状を感じさせる。器壁の立ち上がりは、底部から急角度で外傾し立ち、胴部では直立気味となる。頸部でくびれを呈し、口縁部は僅かに外反する器形である。器面調整は、口縁部は内外ともヨコナデ、胴部は外面は縦位のヘラナデ、内面は横位、斜位のヘラナデである。胎土に小礫を含み、焼成は良好である。法量は、口径19.2cm・器高28.8cm・底部9.0cmである。

4は、床面から出土した礫石器である。両輝石安山岩熔岩の一面に、最大長10cm×最大幅8cmの長方形の磨面があり、磨面は、縦方向に僅かに凹みを呈す。下部が不安定なので、石器の一部を埋置し、砥石などとして使用したものと思われる。

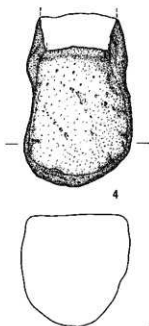
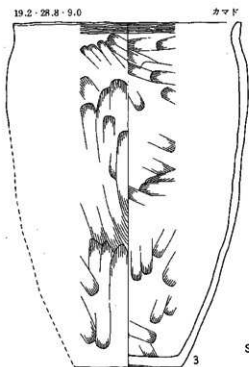
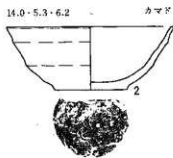
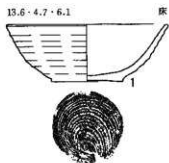
出土遺物から本住居址は、平安時代(中葉)に所属するものであろう。

### 3. 竪穴状遺構

南東部緩斜面の北東寄りに位置し、2棟検出されている。



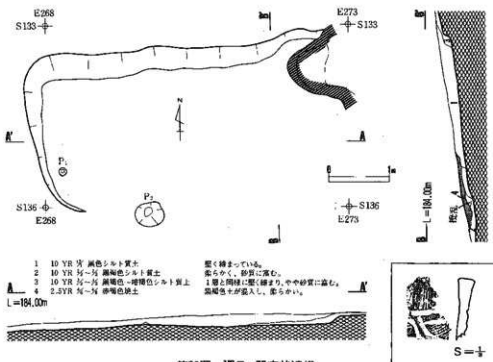
第24図 XI Qb住居址



S=1/2

第25図 XIQb住居址出土遺物





第26図 XII Tg 竪穴状遺構

## XII Tg 竪穴状遺構 (第26図・写真図版13)

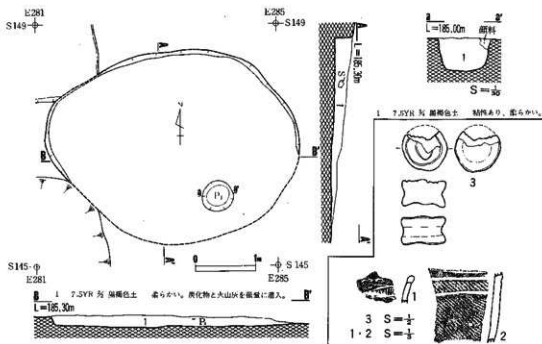
**位置** 調査区東端部の南斜面上に位置している。遺構の北側は道路に面し、東側約1mにXII Th-1・2住居址がある。検出 II層下位において、炭化物混じりの黒色～黒褐色土の落ちこみによって確認されたものである。形態・規模 東側は抜根による攪乱があり、南側は削平を受けており詳細な形態・規模は不明である。現存する長径は4.8m、短径2.6mで東西に長径を有す隅丸長方形形状を呈すと考えられる。

**埋土** 黒色シルト質土主体の4層に大別される。粒径1mm前後のパミスを混入し、堅く締まっている。壁 現存する北壁は25cm、西壁20cmを測り、床面から135度前後の傾斜で立ち上がっている。床 III層上位を床面とし、ほぼ平坦で堅く締まっている。

**柱穴** 小ピットP<sub>1</sub>(口径13cm×12cm、深さ7cm)・P<sub>2</sub>(口径46cm×38cm、深さ57cm)が検出されたものの埋土状況と位置的に柱穴とはならない。

**周溝・炉** いずれも検出されない。

**遺物** 埋土中から縄文土器片が若干出土しているものの、時期を決定する資料はなく時期は不明である。



第27図 XII U 竪穴状遺構

XII U 竪穴状遺構 (第27図・写真図版13)

**位置** 6区の遺構のなかでは最も北東寄りの緩斜面上に位置している。西側には XII Th 1、h-2 住居址がある。**検出** II層の途中で楕円形状の暗色部として検出されている。**形態・規模** 本遺構の南側は削平され消失しており、全体形は不明である。現存する壁から推測すると、平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は長径4.2mで、短径3.2m位と思われる。

**埋土** ブロック状に暗褐色土及び微量の炭化物が混入する黒褐色シルト質土の単層である。**壁** 壁高は、北壁で30cm・西壁で14cmを測る。北壁は直立気味に、西壁は70度位に外傾し立ち上がる。東～南側では数cmしか残存せず不明である。壁の硬軟については、やや堅いカ所もみられるものの脆く崩れやすい。**床** III層中に構築されており、平坦で強く締まっている。微量の炭化物が散在する。

**ピット** 南東寄りに小ピットがある。平面形は円形で、断面形は浅鉢状を呈す。底部は平坦で締まっている。開口部径50cm・底部径36cm・深さ28cmを測る。埋土は黒褐色の単層で、ブロック状に暗褐色土が混入する。埋土上位から赤色(5YR4/8)の顔料が少量出土している。

炉・周溝 床面に僅かな炭化物がみられるものの炉・焼土は検出されていない。また、周溝も検出されていない。

#### 出土遺物 (第27図1～3・写真図版29-163～165)

1～3埋土下部～床面の出土遺物である。1はミニチュア様の土器の口縁部片である。小突起をもち、横位の平行沈線間に連続する縦の刻目文が施されるもので、縄文後期末葉の第IV群に分類される土器である。焼成は良く、器厚3mm～4mm、色調は暗褐色である。2は深鉢形土器の体部片で、横位平行沈線文が施され地文は単節斜縄文(RL横回転)で、内面はナデ調整される。粗砂が多く、焼成が悪くザラザラした器面を呈す。器厚6mm、色調は黄褐色である。3は一部分が欠損した耳栓状の土製品である。断面がくびれ、小形の滑車状を呈する形状で、平らな表面に浅い二重の凹形沈線が施され、片面は施文なく凹みを呈す。計測値は、外径2.5cm・高さ1.4cmである。その他、埋土下位からは粗製土器が出土している。

本遺構の所属する時期は、出土遺物からほぼ縄文時代後期の後葉に位置づけられると思われる。

#### 4. 焼土遺構

焼土遺構は11基検出され、いずれも現地性のものである。調査区の東側に多く集中している。

##### XI Qh 焼土 (第28図・写真図版16)

調査区中央部北西寄りの段丘面上に位置し、東方約10mにX Ri 堅穴状遺構がある。規模は72cm×53cmで、不整形の広がり呈している。焼成による焼土の形成は4cmである。また、周辺には縄文時代前期に属する深鉢の口縁部破片が散乱していたものの、本遺構に伴うものかは不明である。

##### XII Se 焼土 (第28図・写真図版16)

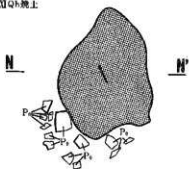
調査区の中央部に位置し、段丘崖から東方へ10cmの距離にある。本遺構の北側にはXII Se 1・2・4の3基のピットが隣接している。焼土は4ヵ所に散在しており、最大長は74cm・45cm・43cm・25cmを測る。焼成による焼土の形成は7cmほどである。

遺物は出土していない。

##### XII Tf 焼土 (第28図・写真図版14)

調査区東側の南緩斜面に位置し、北側は道路に面している。検出面はII層下部からIII層にかけてである。規模は55cm×51cmの不整五角形状を呈している。焼成による焼土の形成は良好で、

ⅡQh焼土



N L=185.40m N'



1 5 YR 系 赤褐色焼土 やや締まっている。粘りなし。

ⅡSe焼土



M L=184.30m M'

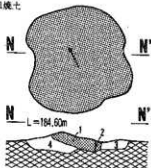


N L=184.30m N'



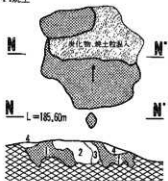
1 7.5YR 系 暗褐色焼土 締まっている。粘りなし。

ⅡRd焼土



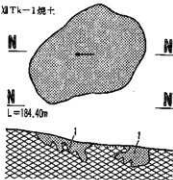
- 1 5 YR 系 暗赤褐色焼土 柔らかく、締まりなし。
- 2 5 YR 系 暗褐色焼土 柔らかく、締まりなし。
- 3 7.5YR 系 暗褐色焼土 やや堅く締まっている。粘土粒混入する。
- 4 7.5YR 系 暗褐色焼土 柔らかく、毛根混入する。

ⅡT1焼土



- 1 5 YR 系 暗赤褐色焼土 柔らかく、締まりなし。
- 2 5 YR 系 暗赤褐色焼土 柔らかく、締まりなし。炭化物が混入する。
- 3 5 YR 系 暗赤褐色焼土 炭化物を多く含む。
- 4 7.5YR 系 暗褐色焼土 柔らかく、炭化物がわずく混入する。

ⅡTk-1焼土



1 5 YR 系 暗赤褐色焼土 柔らかく締まりなし。粘りなし。



第28図 焼土遺構(1)

とくに北半部は多量の炭と炭化物の混入が認められ、層厚は13cm前後である。  
遺物は検出されていない。

#### XII Tf 焼土 (第28図・写真図版14)

調査区東側の南斜面上に位置し、北側は道路に面している。検出面はII層下部からIII層にかけてである。規模は55cm×51cmの不整五角形状を呈している。焼成による焼土の形成は良好で、とくに北半部は多量の炭と炭化物の混入が認められ、層厚は13cm前後である。

遺物は出土していない。

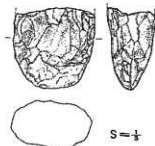
#### XII Th-1 焼土 (第28図・写真図版14)

調査区東側の南緩斜面に位置し、南側には XII Tk 住居址と XII Tf-3 焼土が隣接している。検出面はII層下部である。規模は67cm×40cmの不整楕円形状を呈し、層厚10cm前後の焼土が形成されている。周辺部からは縄文時代後期に属する土器破片とフレークが伴出したものの、本遺構に伴うものかは不明である。

#### XII Tk-2 焼土 (第29、30図・写真図版14、29-166)

調査区東側の XII Tk 住居址と重複して位置している。住居址との新旧関係は、本遺構が住居址の上面にあることから(新)焼土遺構→(旧) XII Tk 住居址となる。検出面はIII層下部である。規模は55cm×33cmの不整楕円形である。焼土はレンズ状に10cm前後形成されている。

遺物は打製石斧(第29図)破片が出土している。現存 $\frac{1}{2}$ 位の刃部で基部は欠損している。刃縁は敲打痕が認められ、刃面には使用擦痕が縦方向にみられる。現存部位から短冊形の形態を示すと考えられる。



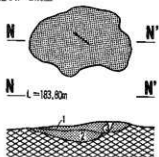
第29図 XII Tk-2  
焼土遺構出土遺物

#### XII Tf-1 焼土 (第30図・写真図版15)

調査区東側の南緩斜面上に位置し、II層下部からIII層にかけて検出されている。規模は60cm×56cmの西側が張り出す不整楕円長方形を呈している。焼成による焼土の形成は良好で、層厚は約5cmである。

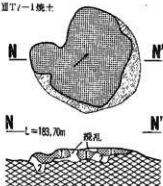
遺物は縄文の粗製土器破片が出土しているものの時期は不明である。

遺 Tk-2 焼土



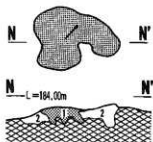
- 1 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 強く締まっている。炭化物が混入する。
- 2 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 凝成強く、堅く締まっている。
- 3 7.5YR 5/6 暗褐色砂質土 やや柔らかく、炭化物、焼土が混入する。

遺 T/-1 焼土



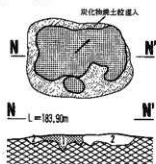
- 1 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 凝成強く、堅く締まっている。
- 2 7.5YR 5/6 暗褐色砂質土 やや締まっている。焼土が混入する。

遺 T/-2 焼土



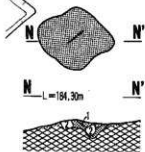
- 1 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 締まっている。
- 2 7.5YR 5/6 暗褐色砂質土 締まっていない。炭化物、焼土が混入する。
- 3 2と同じ

遺 T/-3 焼土



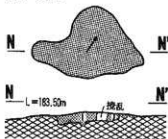
- 1 7.5YR 5/6 暗褐色焼土 締まっている。炭成は弱い。
- 2 7.5YR 5/6 暗褐色砂質土 強く締まっている。焼土が混入する。

遺 U/-1 焼土

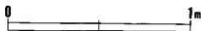


- 1 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 締まっている。炭成良好。
- 2 7.5YR 5/6 暗褐色砂質土 締まっている。焼土が混入する。

遺 U/-2 焼土



- 1 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土 柔らかく締まりなし。



第30図 焼土遺構(2)

## XII T/一2 焼土 (第30図・写真図版15)

調査区東側の南緩斜面上に位置し、XII T/一1・2 焼土と隣接している。検出面はⅢ層上部である。規模は42cm×35cmの張り出しのある不整形を呈している。焼成は中央部が著しく、層厚は7cmである。

遺物は出土していない。

## XII T/一3 焼土 (第30図・写真図版15)

XIITk 住居址の東方約1.5mの南緩斜面上に位置している。検出面はⅡ層下部からⅢ層にかけてである。規模は57cm×41cmの隅丸長方形を呈し、層厚は8cmである。焼成された外周側は堅く締まっている。

遺物は出土していない。

## XII Ui一1 焼土 (第30図・写真図版16)

調査区東端部沢寄りの南緩斜面上に位置し、南西約60cmの所にはXII T/陥し穴状遺構が隣接している。検出面はⅡ層中部から下部である。規模は30cm×28cmの菱形の広がり呈する。層厚8cmの焼土が形成されている。

遺物は出土していない。

## XII Ui一2 焼土 (第30図・写真図版15)

調査区東端部の南緩斜面上に位置している。検出面はⅢ層である。規模は61cm×40cmの不整形の広がり呈している。層厚約5cmの焼土が形成されている。

遺物は出土していない。

## 5. ビット

6区では、中央部～南東部の緩斜面上で13基検出されている。

### XI Rn ビット (第32図・写真図版16)

中央部付近に位置し、北西には XI Ri 住居址がある。III層の下位で検出されている。3分の1位は試掘により破損を受けているが、平面形はほぼ円形を呈していたと思われる。壁は60度位に外傾し立ち上がるが部分的に開口部よりも奥に挟り込まれている。底面は平坦で堅く締まっている。規模は開口部径1.15m、底部径1.10m、検出面からの深さは15cm位である。

埋土は炭化物や焼土粒及び粒径2mm～8mmの橙色パミスがまばらに混入する黒褐色土で構成され、やや締まっている。遺物は出土していない。

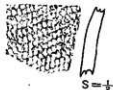
### XII Se-1 ビット (第32図・写真図版17)

南東部緩斜面の北西寄りに位置し、北西には XII Se-2、XII Se-4 ビットがある。南西には、比高2mの段丘崖がある。III層の下位で検出されている。平面形は円形を呈し、壁は下位3分の1ほどは、底部から内湾し立ち上がりオーバーハングし、その上部は70度位に外傾し立ち上がる。底部はほぼ平坦で締まっている。規模は開口部径1.20m、底部径80cm、検出面からの深さは1.15m位である。57年度に一部精査し、58年度に再精査し完掘した。遺物は出土していない。

### XII Se-2 ビット (第32図・写真図版17)

XII Se-1 ビットの北西1.5mに位置する。III層の下位で検出されている。平面形は円形を呈し、壁は70度～80度の角度で外傾し立ち上がる。底部は平坦でなく、北東側が一段と深く掘り込まれている。規模は開口部径1.30m、底部径80cm、検出面からの深さは70cm～80cmである。

埋土は、柔らかい黒色土・堅く締まる褐色土・粘性のある黒褐色土によって構成されている。遺物(第31図)は埋土中位から縄文時代前期の粗製土器体部破片が出土している。



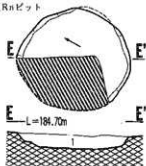
第31図 XII Se-2  
ビット出土遺物

### XII Se-3 ビット (第32図・写真図版17)

南東部緩斜面の北西寄りに位置する。北4mには XIII Se-1 ビットがある。V a層の上位で検出されている。平面形は北北東～南南西に長軸をもつ楕円形で、断面形は浅皿状を呈する。底部はやや凹凸があり、南側に緩い下勾配となる。規模は開口部1.25m×95cm、底部95cm×60cm、検出面からの深さは約30cmである。

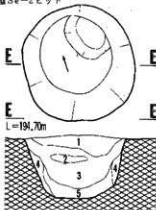


M Rn ビット



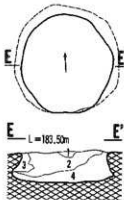
- 1 7.5YR 汚 黒褐色土 やや粘り多。炭化物、硝子粒多量ばらに混入する。

M Se-2 ビット



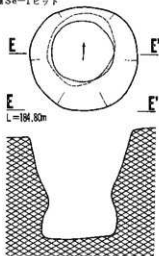
- 1 7.5YR 汚 黒色土 柔らかい。黒褐色土混入する。  
 2 7.5YR 汚 黒褐色土 柔らかい。黒土が多量に混入する。  
 3 7.5YR 汚 黒色土 柔らかく、粘りがある。  
 4 7.5YR 汚 黒褐色土 やや粘り多まっている。  
 5 7.5YR 汚 黒褐色土 柔らかく、粘りがある。

M Sj ビット

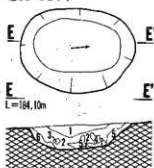


- 1 7.5YR 汚 黒褐色土  
 2 7.5YR 汚 黒褐色土 粘りなく。炭化物少量含む。  
 3 7.5YR 汚 黒褐色砂質土  
 4 7.5YR 汚 黒褐色土 炭化物少量含む。

M Se-1 ビット



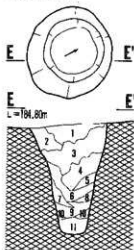
M Se-3 ビット



- 1 7.5YR 汚 黒色土  
 2 7.5YR 汚 黒色土  
 3 7.5YR 汚 黒褐色土  
 4 7.5YR 汚 黒色土  
 5 7.5YR 汚 黒褐色土  
 6 7.5YR 汚 黒褐色土  
 7 4と同じ

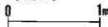
柔らかい。浮石混入する。  
 柔らかい。浮石、炭化物混入する。  
 柔らかい。  
 やや粘り多まっている。浮石混入する。  
 柔らかい。  
 柔らかい。ブロック状に黒色土混入する。  
 柔らかい。ブロック状に黒色土混入する。

M Se-4 ビット



- 1 7.5YR 汚 黒褐色砂質土  
 2 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 3 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 4 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 5 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 6 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 7 7.5YR 汚 黒褐色シルト質土  
 8 7.5YR 汚 黒褐色シルト質土  
 9 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト  
 10 7.5YR 汚 黒褐色シルト  
 11 7.5YR 汚 黒褐色砂質シルト

粘り多まっている。黒褐色浮石混入する。  
 やや柔らかい。ブロック状に黒色土混入する。  
 粘り多まっている。  
 粘り多まっている。  
 やや柔らかい。  
 柔らかい。黒色土と褐色土の混合上。  
 やや柔らかい。  
 柔らかい。黒土混入する。  
 柔らかい。黒土上わずかに混入する。  
 非常に柔らかい。  
 やや粘り多まっている。黒色土が混入する。  
 柔らかい。水分多い。



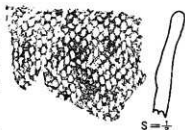
第32図 ビット(1)

埋土はパミスが混入する黒色土、暗～黒褐色土で構成され、柔らかい。

遺物は出土していない。

#### XII Se-4 ビット (第32図・写真図版17)

南東部緩斜面の北西端に位置し、南東には XII Se-1、XII Se-2 ビットがある。III層の下位で検出されている。平面形は円形を呈し、壁は底部から中央部まではほぼ直立し、中央部から開口部径へは60度～70度の角度で外傾し立ち上がる。全体の形状は、円筒形を呈する。規模は開口部径95m、底部径50cm、検出面からの深さは1.20mである。



第33図 XII Se-4  
ビット出土遺物

埋土は砂質土、砂質シルト、シルトなど壁の崩壊と思われる土質も含め、11層に分けられる。

遺物は埋土中から縄文時代前期の土器片が数点出土している。

#### XII Sj ビット (第32図・写真図版18)

6区の南東部緩斜面の西寄りに位置する。北西には XII Se-1 ビット、南には XII Sn-1 ビットがある。Va層上位で検出されており、V<sub>6</sub>層まで掘り込まれて構築されている。平面形は不整な円形を呈し、壁は底部付近が奥に抉り込まれ、オーバーハングしている。規模は開口部径1.0m～1.10m、底部径1.20cm、深さ30cm～35cmである。

埋土は主に黒褐色土からなり、混入物の違い等で4層に細分される。上位の第2層は炭化物や橙色浮石が少量混入する。下位の第4層には粒径1mm～2mmの橙色パミスと炭化物が少量混入する。遺物は出土していない。

#### XII Sn-1 ビット (第34図・写真図版18)

6区の南東部緩斜面の西寄りに位置している。北に XII Sj ビット、南に XII Sn-2 ビットがある。Va層上位で検出されており、V<sub>6</sub>層まで掘り込んで造られている。平面形は不整な円形を呈し、壁は底部に近づくほど奥に掘り込まれ、オーバーハングしている。底面の北東壁際には径40cm・深さ30cm位のビットが壁より奥に向かって掘り込まれている。規模は開口部径1.10m～1.20m、底部径1.30m、検出面からの深さは40cm位である。

埋土は粒径1cm～2cm位のパミスや炭化物、黄褐色土の小ブロックがまばらに混入する黒褐色土で構成される。遺物は出土していない。

## XII Sn-2 ビット (第34図・写真図版18)

XII Sn-1 ビットと XII Sn-3 ビットの間位置する。V a 層上位で検出されている。平面形は楕円形を呈し、壁は60度位の角度で外傾して立ち上がる。規模は開口部で長軸75cm・短軸65cm、底部で長軸65cm・短軸50cm、検出面からの深さは約10cmである。

埋土は粒径5mm位の橙色のパミスが少量混入する黒褐色土で構成されている。遺物は出土していない。

## XII Sn-3 ビット (第34図・写真図版18)

XII Sn-2 ビットの南に隣接している。V a 層上位で検出されている。平面形はほぼ円形を呈し、壁は緩く内湾して底部に続き、断面形は浅皿状を呈している。規模は開口部径100cm・底部径50cm、検出面からの深さは15cm位である。

埋土は粒径5mm位の橙色パミスを少量混入する黒褐色土で構成されている。遺物は出土していない。

## XII Sp ビット (第34図・写真図版19)

XII Sp 陥し穴状遺構の北側に位置し、V a 層上面で検出されている。平面形は楕円形で、断面形は不整な鍋底状を呈す。底面はほぼ平坦でやや締まっている。規模は開口部1.20m×90cm、底部径85cm×45cm、検出面からの深さは約40cmである。

埋土は2層に分かれ、上層はパミスやスコリアを少量含む黒褐色土、下層は明るい褐色土がまだら状に混入する暗褐色土である。遺物は出土していない。

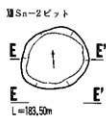
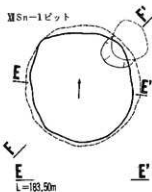
## XIII Sc ビット (第34図・写真図版19)

南東部緩斜面の南西寄りに位置する。南15mにはXIII Sg住居址がある。V a 層の上位で検出されている。平面形は北北西-南南東に長軸をもつ長楕円形で、短軸方向の断面形はU字状を呈する。規模は開口部2.05m×60cm、底部1.70m×30cm、検出面からの深さは25cmである。

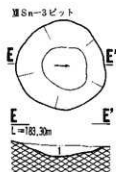
埋土は黒色砂質シルト・暗〜黒褐色シルト質土・褐色シルトの3層で構成されている。遺物は出土していない。

## XIII Sf ビット (第34図・写真図版19)

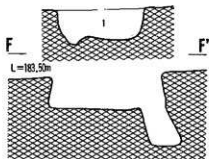
南東部緩斜面の南西寄りに位置し、南10mにはXIII Sf住居址がある。III層下位で検出されている。検出時にはビット周縁部に焼土がブロック状に散在していた。平面形は方形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部1.10m×1.05m、底部85cm×85cm、検出面からの深さは約10cm



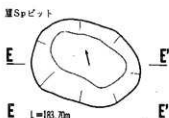
1 7.5YR 黄褐色土 粘性なし。



1 7.5YR 黄褐色土 粘性なし。

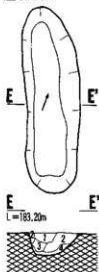


1 7.5YR 黄褐色土 堆積土まじりに混入する。炭化粒少量あり。



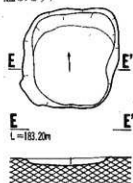
1 7.5YR 黒色土 炭化物少量あり。  
2 7.5YR 黄褐色土

ⅢSeピット



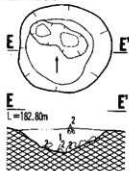
1 7.5YR 黒色砂質シルト 縞まっている。  
2 7.5YR 黄褐色シルト質土 縞まっている。  
3 7.5YR 黄褐色シルト質土 縞まっている。  
4 7.5YR 褐色シルト

ⅢSfピット



1 7.5YR 黒色土 縞りなく縞まらなし。炭化物が少量に混入する。

ⅢTaピット



1 7.5YR 黄-黒 黄褐色土 縞りなく縞まらなし。黄褐色土がブロック状に混入。  
2 10 YR 黄褐色シルト質土 縞りなく縞まらなし。



第34図 ピット(2)

である。

埋土は径2cm以下の炭化材を多量に含む黒色土の単層である。炭化材は粟と鑑定されている。遺物は出土していない。

#### XIII Ta ビット (第34図・写真図版19)

南東部緩斜面のほぼ中央に位置する。南西にはXIII Te-1 陥し穴状遺構がある。V a層の上位で検出されている。平面形は円形で、断面形は浅皿状を呈する。底部は平坦でなく、2か所に深さ10cm位の窪みがある。規模は開口部径1.0m、底部径70cm、検出面からの深さは25cm～35cmである。埋土は、バミスの混入する黒褐色土と、黄褐色シルト質土の2層で構成されている。遺物は出土していない。

### 6. 陥し穴状遺構

6区では、南東部の緩斜面を中心に14基検出されている。

#### XII Sk 陥し穴状遺構 (第35図・写真図版20)

南東部緩斜面のやや北西寄りに位置し、南西4mにはXII So 陥し穴状遺構がある。III層下位で検出されている。平面形は開口部が楕円形を、底部は溝状を呈し、北西-南東方向に長軸をもつ。断面形は短軸方向ではV字状を呈し、長軸方向では頸部から開口部へと外傾し開き、下部は両端に広がるフラスコ状を呈す。規模は開口部の長軸長2.1m・最大幅85cm、底部は長軸長2.5m・最大幅20cmである。底面はわずかに凹み、中央部での深さは1.3mである。埋土は自然堆積であり、壁際には壁の崩落した明褐色土が堆積し、中央部にはIII層起源の浮石混入する黒色～黒褐色土が堆積する。遺物は出土していない。

#### XII So 陥し穴状遺構 (第35図・写真図版20)

XII Sk 陥し穴状遺構の南西4mにあつて、長軸方向がほぼ平行するように位置する。III層の下位で検出されている。形態・規模は、XII Sk 陥し穴状遺構に酷似している。平面形は開口部が楕円形、底部は溝状を呈す。断面形は短軸方向ではV字状を、長軸方向では口広のフラスコ状を呈す。規模は開口部で長軸長2.1m・最大幅80cm、底部で長軸長2.4m・最大幅20cmである。底面は平坦であり、中央部の深さは1.3mである。埋土は自然堆積であり、黒色～黒褐色土と壁の崩落土である褐色土が交互に堆積する。遺物は出土していない。

#### XII Sp 陥し穴状遺構 (第36図・写真図版20)

南東部緩斜面のほぼ中央に位置し、北に XII Sp ビット、北東約10m には XII S/ 住居址がある。IV層の上位で検出されている。平面形は開口部、底部ともに楕円形状で、北西—南西方向に長軸をもつ。断面形は短軸方向ではV字状を、長軸方向では逆台形状を呈す。規模は開口部が長軸長1.95m・最大幅1.00m、底部は長軸長1.4m・最大幅40cmである。底面は傾斜下方に緩く傾き、中央部での深さは90cmを測る。埋土は上部に一部攪乱がみられるが、自然堆積であり、壁の崩落土である明褐色～褐色シルトとIII層起源の黒褐色シルト質土で構成される。遺物は出土していない。

#### XII Te 陥し穴状遺構 (第36図・写真図版20)

6区の陥し穴状遺構の中では最も北側に位置し、南4mには XII Ti 陥し穴状遺構がある。試掘ビットの底面(V<sub>6</sub>層上位)において検出されている。試掘ビットの断面観察からすると本遺構の掘り込み面はIII層の中位である。平面形は開口部が楕円形を、底部は溝状を呈し、長軸は北西—南東方向である。断面形は短軸方向ではV字状を、長軸方向では平行四辺形状を呈す。規模は開口部が長軸長2.2m・最大幅80cm、底部が長軸長2.3m・最大幅20cmを呈す。底面は平坦で、中央部の深さは1.0mを測る。埋土は自然堆積であり、下位には黒色土とV層～VI層土の混合同上、壁際には壁の崩落上の褐色土が、中央から上位には黒色土が堆積する。遺物は出土していない。

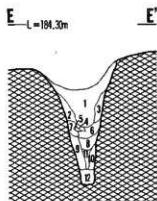
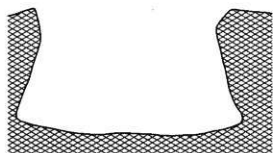
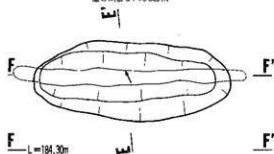
#### XII Ti 陥し穴状遺構 (第36図・写真図版20)

南東部緩斜面の中央北寄りに位置し、北側4mには XII Te 陥し穴状遺構がある。IV層の上位で検出されている。平面形は北北東—南南西方向に長い溝状を呈す。断面形は短軸方向では幅の狭いU字状を、長軸方向では底部がわずかに湾曲するもの長方形状を呈す。規模は開口部が長軸長3.4m・最大幅45cm、底部が長軸長3.5m・最大幅15cmである。底面は凹み中央部での深さは1.05mを測る。埋土は自然堆積であり、上位から黒色土、黒褐色、褐色土で構成される。遺物は出土していない。

#### XII T/ 陥し穴状遺構 (第37図・写真図版20)

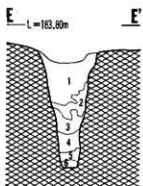
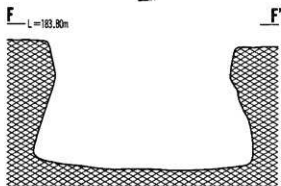
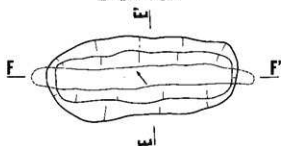
6区の陥し穴状遺構の中では最も東端に位置し、北西には XII Th-1, h-2 住居址がある。試掘ビットの底面(V<sub>6</sub>層上位)で検出されている。試掘ビットの中央にあるため掘り込み面は不明である。平面形は北東—南西方向に長い溝状を呈す。断面形は短軸方向ではU字状を長軸方向では細長い台形状を呈す。規模は開口部が長軸長3.7m・最大幅40cm、底部が長軸長4.0m・

遺SA陥し穴状遺構

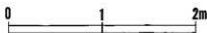


- |    |                    |                  |
|----|--------------------|------------------|
| 1  | 7.5YR 黄 黒色砂質シルト    | 締まっている。          |
| 2  | 7.5YR 黄 黒褐色砂質シルト   | 締まっている。浮石混入する。   |
| 3  | 7.5YR 黄 暗褐色砂質シルト   | 締まっている。浮石多く混入。   |
| 4  | 7.5YR 黄 暗褐色シルト     | 締まっている。Vb層上。     |
| 5  | 7.5YR 黄 黒色砂質シルト    | 締まっている。          |
| 6  | 7.5YR 黄 無褐色砂質シルト   | 浮れ多く混入する。        |
| 7  | 7.5YR 黄 褐色シルト質土    | Vb層上と黒褐色の混合土。    |
| 8  | 7.5YR 黄 暗褐色シルト質土   | 締まっている。          |
| 9  | 7.5YR 黄 褐色シルト質土    | 浮石、黒色土のブロック混入する。 |
| 10 | 7.5YR 黄 暗褐色シルト質土   | 柔らかい。            |
| 11 | 7.5YR 黄 暗褐色砂質シルト質土 | 水分多く柔らかい。        |
| 12 | 7.5YR 黄 無褐色シルト     | 水分多く柔らかい。粘性あり。   |

遺So陥し穴状遺構

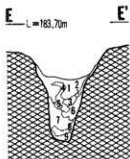
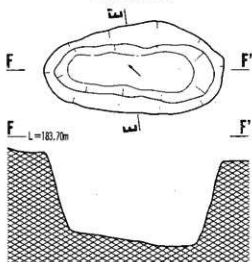


- |   |              |                     |
|---|--------------|---------------------|
| 1 | 7.5YR 黄 黒色土  | 柔らかい。浮石混入する。        |
| 2 | 7.5YR 黄 無褐色土 | 柔らかい。               |
| 3 | 7.5YR 黄 褐色土  | 柔らかい。無褐色土混入する。浮石混入。 |
| 4 | 7.5YR 黄 無褐色土 | 柔らかい。浮石混入する。        |
| 5 | 7.5YR 黄 褐色土  | 柔らかい。               |
| 6 | 7.5YR 黄 無褐色土 | 柔らかい。               |



第35図 陥し穴状遺構(1)

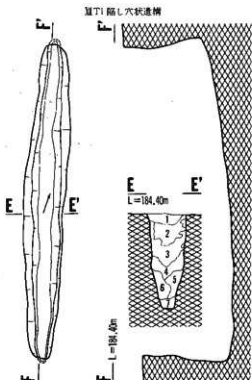
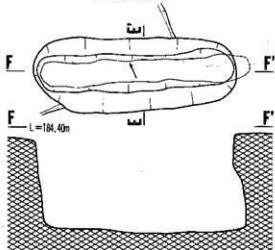
ⅡSp 陥し穴状遺構



- 1 7.5VR Ⅱ 黒色砂質シルト
- 2 7.5VR Ⅱ 暗褐色シルト質土
- 3 7.5VR Ⅱ 暗褐色シルト質土
- 4 7.5VR Ⅱ 黒褐色砂質土
- 5 7.5VR Ⅱ 黒褐色シルト
- 6 7.5VR Ⅱ 黒色砂質シルト
- 7 7.5VR Ⅱ 褐色シルト
- 8 7.5VR Ⅱ 黒褐色
- 9 7.5VR Ⅱ 黒褐色シルト

柔らかい。  
 締まっている。褐色浮石を穴も。  
 褐色に浸る。浮石混入する。  
 柔らかい。  
 柔らかく締まりなし。  
 浮石は稀々と含まれる。  
 Vb層上。  
 シルト質土。型く締まっている。  
 締まっている。

ⅡTe 陥し穴状遺構



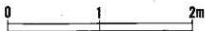
ⅡTI 陥し穴状遺構

- 1 7.5VN Ⅱ 褐色土
- 2 7.5VI Ⅱ 暗褐色土
- 3 7.5VR Ⅱ 黒褐色土
- 4 7.5VR Ⅱ 暗褐色土
- 5 7.5VR Ⅱ 褐色土
- 6 7.5VR Ⅱ 黒褐色土
- 7 7.5VR Ⅱ 暗褐色土
- 8 7.5VR Ⅱ 暗褐色土
- 9 7.5VR Ⅱ 黒褐色土
- 10 7.5VR Ⅱ 褐色土

柔らかい。黒褐色土のブロック混入する。  
 柔らかい。褐色土のブロック混入する。  
 柔らかい。褐色土のブロック混入する。  
 柔らかく締まりなし。部分的に褐色土混入する。  
 中や硬い。  
 柔らかい。褐色土混入する。  
 柔らかい。浮石多く混入する。  
 浮石多く混入する。  
 柔らかい。  
 柔らかい。

- 1 7.5VB Ⅱ 黒色土
- 2 7.5VR Ⅱ 褐色土
- 3 7.5VR Ⅱ 黒褐色土
- 4 7.5VR Ⅱ 暗褐色土
- 5 7.5VR Ⅱ 褐色土
- 6 7.5VR Ⅱ 褐色土
- 7 7.5VR Ⅱ 黒褐色土

柔らかい。炭化物混入する。  
 柔らかい。  
 柔らかい。褐色土がブロック状に混入する。  
 柔らかい。ブロック状に褐色土混入する。浮石混入する。  
 柔らかい。ブロック状に黒褐色土混入する。浮石混入する。  
 柔らかい。浮石混入する。  
 柔らかい。部分的に褐色土混入する。



第36図 陥し穴状遺構(2)



最大幅25cmである。中央部での深さは55cmを測る。埋土は黒色～黒褐色シルト質土で構成される。遺物は出土していない。

#### XII Tj 陥し穴状遺構 (第37図・写真図版20)

南東部緩斜面の北東寄りに位置する。東4mにXII Tk住居址がある。III層下位で検出されている。平面形は東北東～西南西方向に長い溝状を呈す。断面形は短軸方向ではV字状を呈し、長軸方向では丸底を呈する口径の長い変形のフラスコ型である。規模は開口部が長軸長2.7m・最大幅45cm、底部が長軸長3.5m・最大幅10cmである。底部は緩く凹み、中央部の深さは90cmを測る。埋土は自然堆積であり、黒色砂質シルト、黒褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルトで構成される。埋土中位に壁の崩落土が認められる。遺物は出土していない。

#### XII Tm 陥し穴状遺構 (第37図・写真図版21)

南東部緩斜面のほぼ中央に位置する。試掘ビットの底面(V a層上面)において検出されている。平面形は歪んだ楕円形を、底部は溝状を呈す。長軸は北西～南東方向である。断面形は短軸方向はV字状を、長軸方向では変形フラスコ型である。規模は開口部が長軸長1.9m・最大幅60cm、底部が2.2m・最大幅15cmである。底面はわずかに凹みを呈し、中央部の深さは1.1mを測る。埋土は自然堆積であり、黒色～暗褐色砂質シルトによって構成される。遺物は出土していない。

#### XII Tn 陥し穴状遺構 (第38図・写真図版21)

南東部緩斜面の中央やや東寄りに位置し。西15mにはXII Tm 陥し穴状遺構がある。III層下位～V a層上位で検出されている。平面形は北西～南東方向に長い溝状を呈し、断面形は短軸方向ではV字状を、長軸方向では丸底をした口径の広いフラスコ型を呈する。規模は開口部が長軸長2.5m・最大幅45m、底部が長軸長2.9m・最大幅10cmである。底面は凹み、中央部での深さは1.1mを測る。埋土は自然堆積で、上位はIII層土相当の黒色砂質土、下位は浮石を多く混入する黒褐色砂質シルトで構成される。遺物は出土していない。

#### XIII Sc-1 陥し穴状遺構 (第38図・写真図版21)

南東部緩斜面の中央付近に位置し、北東約10mにはXII Sp 陥し穴状遺構がある。本遺構とXII Sp 陥し穴状遺構は長軸方向がほぼ一致し、形態・規模が酷似している。III層下位で検出されている。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈し、断面形は短軸方向では下半はU字状を、上半は壺状を呈し、長軸方向では壁の崩落と思われる膨らみがあり、不整な逆台形を呈す。規

椀は開口部が長軸長1.8m・最大幅1.1m、底部が長軸長1.35m・最大幅40cmである。底面はほぼ平坦で、中央部の深さは1.1mを測る。埋土は自然堆積であり、上位には黒褐色砂質シルト、下位には浮石が多く混入する黒褐色～暗褐色シルト質土が堆積する。遺物は出土していない。

#### XIII Sc - 2 陥し穴状遺構 (第38図・写真図版21)

南東部緩斜面のやや南西寄りに位置する。南西15mにはXIII Sg住居址がある。III層下位で検出されている。前記のXIII Sc - 1 陥し穴状遺構とは長軸方向が異なるものの、形態・規模は酷似している。平面形は楕円形を呈し、断面形は短軸方向は上半は盃形状を、下半はU字状を呈し、長軸方向では開口部が広がるピカー型を呈す。規模は開口部が長軸長2.05m・最大幅1.2m、底部が長軸長1.3m・最大幅35cmである。底面はわずかに凹みをもち、中央部での深さは1.2mを測る。遺構検出時における長軸方向の誤認から、埋土断面図は不完全なものになったが、埋土上位～中位は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していない。

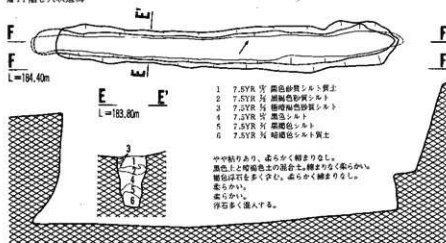
#### XIII Sf 陥し穴状遺構 (第39図・写真図版21)

陥し穴状遺構の中でも最も西側に位置し、南東15mにはXIII Sg住居址がある。V a層で検出されている。平面形は北西～南東方向に長軸をもち、開口部は小判形を、底部は幅広の溝状を呈す。断面形は短軸方向では上部が開く変形U字状を、長軸方向では長方形を呈す。規模は開口部が長軸長2.7m・最大幅80cm、底部が長軸長2.5m・最大幅30cmである。底面は平坦で、中央部の深さは1.0mを測る。埋土は自然堆積であり、上位は黒色～黒褐色砂質シルト、中位～下位は暗褐色～黒褐色シルト質土が堆積する。埋土の中位～下位に壁の崩落した褐色シルトが認められる。遺物は出土していない。

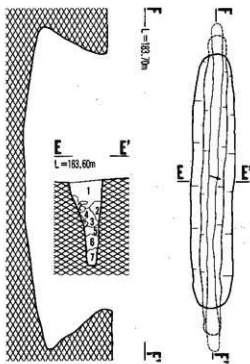
#### XIII Te - 1 陥し穴状遺構 (第39図・写真図版21)

南東部緩斜面の中央やや南寄りに位置し、南10mにはXIII Te - 2 陥し穴状遺構がある。V a層の上位で検出されている。平面形は北西～南東方向に長い溝状を呈し、横断面は幅の狭いV字状を、縦断面は緩やかな丸底をした口径の広いフラスコ型を呈す。規模は開口部が長さ2.4m・最大幅45cm、底部が長さ2.4m・最大幅10cmである。底面は凹を呈し、中央部の深さは90cmを測る。埋土は自然堆積であり、黒色土、暗褐色土、褐色土で構成され、いずれも柔らかいシルト質土である。遺物は出土していない。

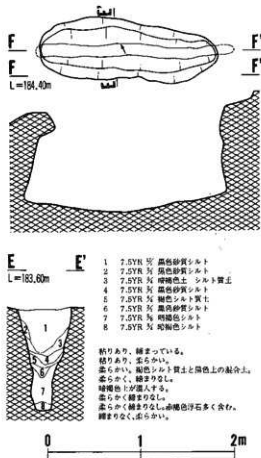
夏T/陥し穴状遺構



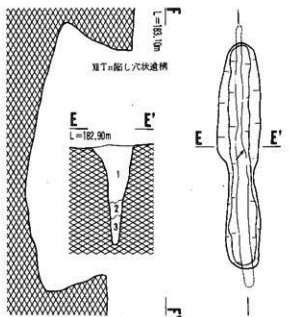
夏Tj/陥し穴状遺構



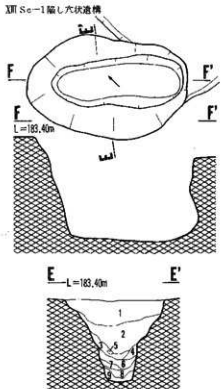
夏Tm/陥し穴状遺構



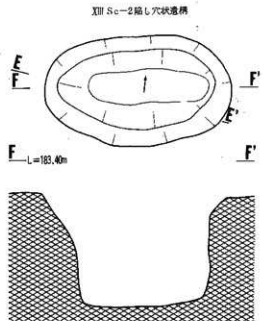
第37図 陥し穴状遺構(3)



- 1 7.5YR 5/ 黒色砂質土
  - 2 7.5YR 5/ におい赤色砂質シルト
  - 3 7.5YR 5/ 黒褐色シルト質土
- 下位は柔らかく、締まりなし。  
大穴成らぬ。黒色土と暗褐色土の混合土。  
溝中あり。



- 1 7.5YR 5/ 黒褐色砂質シルト
  - 2 7.5YR 5/ 黒褐色砂質シルト
  - 3 7.5YR 5/ 黒褐色砂質シルト
  - 4 7.5YR 5/ 暗褐色シルト質土
  - 5 10 YR 5/ 黄褐色シルト質土
  - 6 7.5YR 5/ 黄褐色シルト質土
  - 7 7.5YR 5/ 暗褐色シルト質土
  - 8 7.5YR 5/ 黒褐色シルト質土
  - 9 7.5YR 5/ 黒色シルト質土
- 締まっている。  
締まっている。黄褐色土を多く含む。  
やや柔らかく、黄褐色土を多く含む。  
締まっている。  
締まっている。浮石混入する。  
黄褐色土(地石)を多く含む。  
もろく柔らかい。砂質土多く含む。  
柔らかい。

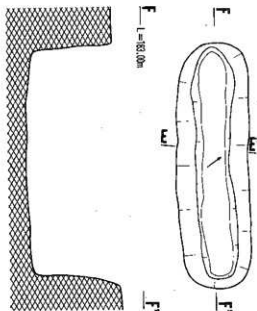


- 1 7.5YR 5/ 黒色土
  - 2 7.5YR 5/ 黒褐色土
  - 3 7.5YR 5/ 暗褐色土
  - 4 7.5YR 5/ 褐色土
- 柔らかく、粘りあり。  
浮石多く混入する。  
柔らかい。浮石混入する。  
やや堅く締まっている。



第38図 陥し穴状遺構(4)

XIII S1 陥し穴状遺構



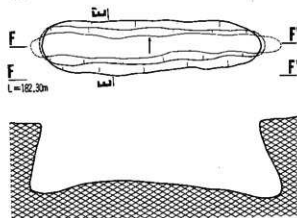
E E'  
L=183.00m



- 1 7.5YR 灰 黒色砂質シルト
- 2 7.5YR 灰 黒褐色砂質シルト
- 3 7.5YR 灰 黒褐色砂質シルト
- 4 7.5YR 灰 灰褐色砂質シルト
- 5 7.5YR 灰 暗褐色砂質シルト
- 6 7.5YR 灰 肥後シルト
- 7 7.5YR 灰 黒褐色砂質シルト
- 8 7.5YR 灰 暗褐色シルト
- 9 7.5YR 灰 黒褐色シルト質土

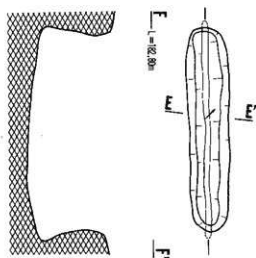
埋まっている。  
柔らかい。黄褐色土が多く流入(根及び砂)。  
底く埋まっている。  
底く埋まっている。浮石が多く含む。  
10%ほど土色土の混合土。柔らかい。  
10%ほど土色土の混合土。埋まっている。  
やや埋まっている。  
柔らかく、埋まりなし。  
柔らかい。

XIII Te-2 陥し穴状遺構



E E'  
L=182.30m

XIII Te-1 陥し穴状遺構



E E'  
L=182.80m



- 1 7.5YR 灰 褐色土
- 2 7.5YR 灰 暗褐色土
- 3 7.5YR 灰 黒色土
- 4 7.5YR 灰 暗褐色土
- 5 7.5YR 灰 褐色土
- 6 7.5YR 灰 黒色土

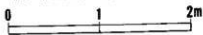
柔らかく、粘性あり。  
柔らかい。  
柔らかく粘性あり。ブロック状に黒褐色土が混入する。  
柔らかく粘性あり。ブロック状に黒褐色土が混入する。  
柔らかい。浮石が多く混入する。  
柔らかい。

E E'  
L=182.30m



- 1 7.5YR 灰 黒色土
- 2 7.5YR 灰 黒褐色土
- 3 7.5YR 灰 暗褐色土
- 4 7.5YR 灰 暗褐色土
- 5 7.5YR 灰 黒褐色土
- 6 7.5YR 灰 暗褐色土

柔らかい。ブロック状に黒褐色土混入する。浮石多く混入する。  
柔らかい。  
ブロック状に黒褐色土混入する。  
柔らかい。  
柔らかい。  
柔らかい。浮石多く混入する。



第39図 陥し穴状遺構(5)

### XIII Te-2 陥し穴状遺構 (第39図・写真図版21)

6区の陥し穴状遺構の中では最も南側に位置し、南側10mで湿地帯に面している。V a層の上位で検出されている。平面形は東西に長いやや幅の広い溝状を呈す。横断面はV字状を、縦断面は口径の広い上げ底状のフラスコ型を呈す。規模は開口部が長さ2.4m・最大幅55cm、底部が長さ75cm・最大幅20cmである。底面は膨らみ、中央部の深さは65cm、最大の深さは85cmを測る。埋土は自然堆積で、黒色～黒褐色上、暗褐色土、明褐色土で構成され、いずれも浮石粒が混入するシルト質土である。遺物は出土していない。

## 7. 埋設土器

南東部緩斜面の東側地域に位置し3基検出されている。

### XII Tg 埋設土器 (第40図・写真図版22、36-43)

北東寄りの XII Tg 区に位置し、XII Tg 整穴状遺構から西側へ約 5 m の距離にある。III層の上位で検出されている。土器は底部のみの残存で、掘り込みは確認されていない。土器は無文の深鉢で、やや上げ底状の造りを呈し、焼成良く色調は褐色～橙色を呈している。胎土に粗砂が多く混入するが、内外面が丁寧に調整されている。器形、胎土、焼成等から縄文時代後期に属するものと思われる。

### XII T/埋設土器 (第40図・写真図版22、36-44)

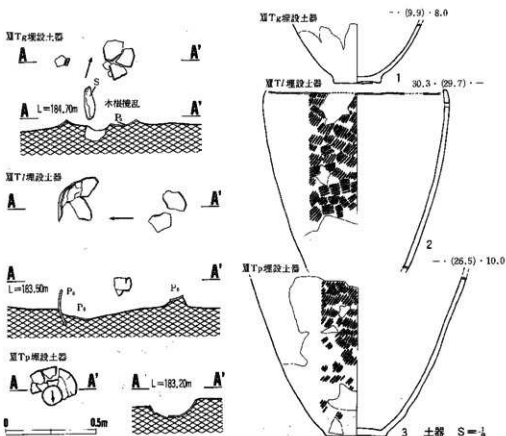
東寄りの XII T/区に位置し、東約 3 m には XII T/一 3 焼土がある。III層中位で検出されている。掘り込みの際に土器の上部を損壊しているが、残存部は口縁を上位にした正立の状況で出土している。掘り込みは認められていない。

土器は底部の欠損した深鉢形土器で、口径は約30cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。胎土に粗砂と小礫を多く含むが、焼成は良く堅緻である。器厚は8mm～10mmと厚手であり、色調は暗黄褐色を呈している。地文はLRの単節縄文が、横・斜回転により施文される。口縁附近に補修孔を1個もっている。胎土と焼成等から縄文後期に属するものと思われる。

### XII Tp 埋設土器 (第40図・写真図版22、36-45)

南東部の東側の XII Tp 区に位置し、III層中位で検出されている。掘り込みの際に一部を掘り過ぎ、底部のみ残存しているが、正立した状況で出土している。掘り込みは認められていない。

土器は深鉢の底部付近のもので、底部は平底であり、体部は緩い立ち上りを呈している。



第40図 埋設土器

胎土に砂粒が多く含まれ、上面は大変脆くなっている。内面には粗い調整がなされている。器厚は約8mmで色調はふい橙色を呈しており、地文は斜縄文(LR)が施文されている。胎土、焼成、器形等から縄文後期に属すると思われる。

### III. 遺構外出土遺物

6区からの遺構外出土遺物は、土器・土製品・石器・石製品からなる。

#### 1. 土器

出土した土器は、縄文時代早期～晩期の各時期のもの及び弥生土器、土師器、須恵器等である。量的に最も多いのは縄文時代後期のもの、次いで縄文時代前期のものである。土器の時期区分は他の区と同様であり、文様等の特徴により細分した。

##### 第I群土器（第41図1～2、第47図45～49・写真図版32・37）

縄文時代早期の土器を一括した。数量的に極めて少ない出土点数である。文様・施文方法などの差異で4類に細分した。

##### 1類 押型文が施文されるもの（第47図45・写真図版37～45）

同一個体の破片が、南東部のXIV T区のV a層から数点出土している。横位一糸の沈線を持ち、複合山形文が施文されるものである。内面は丁寧に調整が施されており、焼成は良く、器厚10mmである。色調は黄褐色である。

##### 2類 爪形文が施文されるもの（第41図1・写真図版32～1）

底部の欠損した尖底ミニチュア土器である。XII S区のIV～V a上位から出土している。砲弾の先端部のような尖った器形を呈し、口縁部は体部に比べやや薄手となる。口縁に横2列の連続爪形文を持ち、体部には細い沈線によって楕円文又は渦巻文が施される。口唇部には小さな連続刻みが、体部下半にも部分的に細かい連続刻文が施される。焼成は良く、器厚は6～5mm、色調は暗黄褐色である。

##### 3類 貝殻腹縁文が施文されるもの（第47図49・写真図版37～49）

49は横位の貝殻腹縁刺突文が施文される。焼成が良く、器表が褐色で内面は黒色を呈しナデ調整される。器厚は9mmである。

##### 4類 条痕文が施文されるもの（第47図46～48・写真図版37～46～48）

3点はいずれも横位に貝殻条痕文が施文される土器の体部片である。焼成は良く、内面が丁寧に調整される。47・48は色調が赤褐色で石英砂を多く含む。器厚は47が5mm位、46・48が7mm位である。

第41図2の尖底部は、本類に属する土器の底部と思われるもので、先端部が乳頭状を呈している。



## 第II群土器 (第41図4-6、第42図、第47図50-76、第48図・写真図版32・37・38)

本群は縄文時代前期のものを一括したものである。6区では、縄文後期に次いで出土量の多いものである。口縁部～底部まで復元されたものはないが、器形が分る程度に接合できたものが6点ある。文様、施文方法により下記の5類に細分した。

## 1類 原体側面圧痕が施文されるもの (第41図3、第42図7-9、第47図50-62・写真図版32 3・7、33-8・9、37-50-62)

多くは、XI Q～XI R 区のIII層中位～下位の出土である。器種は大形の深鉢、鉢、注口土器などがあり、原体側面圧痕と連続刻文の組合わせにより独特の文様を表出させている。文様の基調は3・7にみられるように、口縁に平行する2～3条の原体側面圧痕もち、同じ原体による渦巻状の圧痕が口縁部または体部にも施文され、渦巻文を連結する横位、斜位の側面圧痕が数条平行し施される。平行する側面圧痕の間には連続刻文が付加される。胎土には石英砂、植物繊維を多く含み、焼成が良い。器表には化粧粘土を用いるものがある。小形鉢と思われるものは器厚が7mm～8mmであるが、他は10mm～13mmと厚手のものが多い。

3は体部がほぼ直立し円筒状を呈し、口頸部で外反する器形で、口縁部の平面形は円形ではなく、正方形の各辺に膨らみをもたせた形状である。底部は欠損しているが丸底と思われる。口縁に4個の小突起をもち、その突起部上面に原体圧痕による渦巻文が施される。外削される口唇部に2条の原体圧痕が、その直下には連続刺突文がやや斜めに施される。体部には、原体圧痕による渦巻文が縦・横に規則正しく配列され、その間に斜位の原体圧痕及び連続刺突文が付加される。外面には煤が付着している。

7は注口土器である。注口部は楕円形状を呈し、口縁に直立するように上向きに付けられ、鉢巻状に原体圧痕が施される。口縁部は肥厚し、外削りされた口唇部にも原体圧痕が施される。文様構成は3とほぼ同じである。外面には僅か煤が付着している。50～52・57も類似した文様をもつもので、50・51は口縁部に連続刺突をもたず、渦巻文が口縁直下から展開される。

8・9は大形の深鉢形土器の破片である。8はほぼ直線的に立ち上がる形状を、9は体部に膨らみをもつもので、口縁部付近にのみ原体圧痕及び連続刺突が施文され、体部には横位の羽状縄文が展開される。羽状縄文の原体は末端部が細い紐で結ばれたものである。53・55・58～60もほぼ同じ文様構成の土器であり、9には口縁部文様帯を区画するように横位の粘土貼付をもつ。

54・56、61・62はそれぞれ同一個体と思われる土器の口縁部片である。54・56は外削りされた口唇部に円形刺突をもち、56には円形の粘土貼付突起があり、その突起部に体部施文と同じ原体側面圧痕の渦巻文が施される。61・62は口縁に平行し2段の連続刺突が施されるものである。

2類 羽状縄文が施文されるもの(第41図4~6、第42図10、第47図63~76・写真図版32—4~6、33—10、37—63~76)

A 口縁部に燃糸文が施文されるもの(5・63~66) 5は口径約23cmの深鉢形土器で、口縁に平行する燃糸文が施文されるものであり、体部には横位の羽状縄文が施文される。焼成が悪く、粗雑な感じのする土器であり、器表の剥落が激しい。63~66は精選された粘土を用いた焼成の良い土器で、63・65は同一個体と思われるもので、丸底を呈する土器であろう。器表には化粧粘土が用いられている。64・66には石英砂が多く混入し、外面には多量の煤が付着する。

B 燃糸文をもたないもの(4・6・10・67~76) 全面に横位羽状縄文が施文されるもので、大形の深鉢6、深鉢4、小形の鉢67などの中大小の差異が見られる。羽状縄文には、結束羽状と結束のないものがあり、結束のものには1類または上記のAにみられるような原体の末端部を細い紐で結んでいるものがある。4は丸底形の土器と思われるもので胎土には63・65と同様に精選された粘土を用い、化粧粘土が貼付けられる。6はXI Qh 焼土遺構の周辺から破片として出土したものである。外面に多くの煤が付着している。68は多くの植物繊維が混入するもので、口縁が薄手となり、70と同様羽状縄文の展開が逆転する。69~71は同一個体であろう。細かい植物繊維が混入し、焼成が堅緻である。71の表裏には補修孔のつくり出しの凹みをもつ。72は口唇部及び口縁内側に縄文が施文されるもの、73は口縁が擠み出されるように僅か外反するものである。

74~76は粘土積上げ部から破損したもので、74・75には化粧粘土の剥落部に、器表と同じ斜行縄文がみられるもの、76には、上面の胎土との接着効果を高めるためのものか、小豆粒大の粘土の連続状の貼付がみられる。

3類 燃糸文が体部に施文されるもの(第48図77~80・写真図版38—77~80)

燃糸文が横位に施文されるもの、縦に施文されるものがある。77は口縁がやや薄手となり、内湾気味のもの、78は口縁上部が外反するものである。77は粘土が柔らかいうちに施文され燃糸文が深く、78は逆に浅く押擦られている。79・80は底部近くの破片で、79は丸底と思われるもの、80は平底の土器である。77~79は胎土に植物繊維、石英砂を多く混入するが、80には繊維の混入はみられず、石英砂が僅か含まれる。

4類 ループ文が施文されるもの(第48図81・写真図版38—81)

1点の出土である。ループ文が2段に施文されるもので、胎土には植物繊維は混入されず、焼成は良い。

5類 斜行縄文が施文されるもの(第42図11、第48図83~110・写真図版33—11、38—83~110)

大槌町崎山弁天遺跡の第II群1類土器に比定されるものであろう。口唇部に指頭圧痕をもつもの(83~95)と、もたないものがあり、指頭圧痕には大小及び深浅の差異があり、指頭圧痕

をもたないものは口唇部のつくり出しに僅かな差異があり、内削されるもの97、平坦につくられるもの100、口縁が薄手となり口唇部幅の狭いもの98などがある。83～85などの整然と施文されているものは、2段燃り以外の他の燃り方又は組み方で施文された可能性のあるものである。

4・106～110は尖底土器と思われるものの底部附近の破片である。4は膨らみをもつ尖底部、106・107は乳頭状の尖底部である。108には補修孔がある。

#### 第IV群土器（第43図12～19・第49図111～140・第50図141～151・写真図版33・34・39・40）

本群土器は縄文時代後期に属するものを一括したものである。その殆どは調査区東側のX II T・X III T区からの出土である。文様等の特徴から以下の4類に細分した。

##### 1類 連鎖状文をもつもの（12）

1点の出土である。他の土器とは出土地点を異にし、調査区西側のX Q区からの山土である。U形突起口縁をもつ深鉢形土器の口縁部片である。山形突起及び口縁部の上面に粘土を輪状に貼付けて透かしをつくり出す。その輪状の上面から口縁部にかけての粘土隆体には、棒状工具で連鎖状文が施される。体部文様は曲線沈線文によって縄文帯と無文帯とが区画されるものと思われる。内面の調整は丁寧になされている。さらに、山形口縁内側には沈線による「S」字状の文様が描かれる。この土器の焼成は良い。胎土に粗砂が多く含まれる。器厚は6～7mmである。色調は明褐色である。

##### 2類 沈線文+瘤状突起をもつもの（111）

深鉢形土器の口縁部片である。この土器は本群3類、4類に先行する土器と思われる。

口縁は平縁で、口縁部はほぼ直立気味に立ち上がると思われる。口唇部は平坦につくられる。斜縄文（LR）を施した後、横位沈線及び入組状沈線文を施し沈線が交差するカ所には丸味をもつ瘤状突起を貼付ける。焼成は良く堅緻である。砂粒が多く含まれる。器厚は約7mmで、色調は灰黄褐色である。

##### 3類 平行沈線文+縦位連続刻目文をもつもの（112～136）

本類は第IV群土器のなかでは4類に次いで出土点数は多いが復元されたものはない。

器種は深鉢、鉢形土器である。平縁や波状口縁を呈すると思われる土器が数点あるが、多くは小山形口縁突起をもつ。山形突起頂部に押圧刻みが施されるもの、施されないものがあり出土数では前者の方が多い。全体の器形は不明であるが口縁部が内湾するもの（123・127・129）と緩く外傾し立ち上がるものがある。また体部で強く屈曲するもの（115・135・136）もある。口縁部～体部の文様は横位に展開する。文様の構成は、口縁部に1条～数条の横位沈線と縦位連続刻目文が施され、口縁上部または体部の文様帯にはほぼ平行する沈線により入組状文が描かれたものである。文様帯には縄文が充填されるもの（115～117・124・125）、地文を磨消した

後に連続刻目文を施すもの(128・129・136)、連続刻目文のみを施文するもの(113・114・118・119・121・126)、地文を磨消し帯縄文を表出するもの(123)などがある。口縁部の山形突起については、大小の突起を対にもつもの(112)、2個一対のもの(127・129)、頂部に十字の押圧刻みが施されるもの(121)、突起頂部に上方から円孔が穿かれるもの(122)など多種多様である。また、体部屈曲部に瘤状又は長方形の粘土貼付けするもの(115・135・136)がある。

112・115は同一個体の深鉢である。大小の山形突起には押圧刻みは施されていない。口縁部に上下2段の連続刻目文(右側から器表を鋭く刻み込むように施される)を、その両端部には平行沈線が施される。体部には連続刻目文で文様帯を区画して沈線入組文が描かれ、縄文(LR)が施される。この土器には粗砂や石英砂が多く含まれる。XII Th-1住居址出土の土器4と同様に質感がやや柔らかい感じのものである。112以外は沈線施文が先行するようである。114・117・126の口縁上部の刻目文と128・129・134の刻目文は押圧気味に施されている。128・129は同一個体と思われるもので地文(LR)をヘラ状工具でナデ調整した後に浅い沈線で刻目帯を区画する。

#### 4類 入組状沈線文、平行沈線文をもつもの(13~18・137~150)

IV群土器では最も出土点数が多い。一部復元できたのは6点で他は破片である。器種は深鉢、鉢形土器である。深鉢は台形山形状の口縁突起をもち突起頂部には棒状工具による浅い押圧が1~2施される。鉢には平縁のものもある。器形または口縁部の立ち上がりは、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がるもの(13・18)、体部上半から口縁部にかけて強く内湾するもの(15・17)、体部上半で屈曲し口縁が強く外傾するもの(14)、緩く多傾し立ち上がるもの(16)がある。文様は3類同様に横位に展開し、連続刻目文を別にすると沈線文は3類に酷似するもので、一部曲線を呈する2条の平行沈線により帯縄文を構成し、曲線部では入組状文を表出させる。磨消し手法は3類に比較すると多用され三角形の文様構成が明瞭である。

これらの文様は、沈線で区画され口縁部から体部上半に施文されるもの(13・15・18)、ほぼ全面に施文されるとされるもの(14・16)があり、前者は口縁部が内湾を呈し、後者は体部の屈曲部に帯状を呈する粘土貼付けや横位の沈刻(沈線状を呈する刻み)を施している。

13は8個の台形山形状突起をもち、突起間の口縁部は小波状を呈している。縄文(LR)施文後に浅めの沈線で文様を描き、その後磨消しを行うものである。焼成は良く堅緻である。胎土には砂粒が多い。外面に煤が付着しており、色調は暗褐色を呈している。14は一部分が復元されたもので本来の器形とはやや異なって図化された可能性もある。山形突起直下の菱形の刻み部にボタン状突起をもつ。地文はRL斜縄文で、器厚は約8mmである。16~18は大小の山形突起をもち沈線は浅く施される。外面には煤が付着している。18の三角形を呈するカ所は深く抉り込まれている。16の胎土には金雲母が多く含まれる。

137~149も上記同様に沈線文により入組状の文様が施文されるもの及び施文されると思われるものである。138は深めの沈線で施文され、口縁上部と体部には18と同様の挟り込みを施し入組三叉文状の文様をつくる。文様の施文方向を13・14等を左から右と考えると138は右から左への施文と言えるであろう。138・140は縄文(LR)は充墳縄文であり、140の突起頂部には深めの押圧刻みが施される。141は突起間が小波状を呈するもの、147は大小の山形突起の頂部が波状口縁状に押圧されるものである。139・143・144・146・150は鉢と思われるもので、143・144の口唇部には豆粒状の圧痕をもつ。150には補修孔がある。

19・151は4類の台形状突起に類似する口縁突起をもつこと、突起頂部に押圧や沈刻を施すこと、沈線及び磨消しが施されることなどから4類に属する可能性があると思われる。

19は小形の鉢である。復元された形態から推測すると方形を呈する口縁突起は1つまたは2つと思われる。器形は体部中央に最大径をもち、体部上半から口縁部にかけて僅か窄み口縁突起はやや外傾を呈している。体部上半には口縁に平行する浅い波状沈線で磨消し帯を区画する。口縁部の帯縄文は沈線施文後に施される。体部地文は斜縄文(LR)で、焼成は良く内面調整も丁寧になされている。器厚は約5mmである。

151も小形の鉢であり、肥厚する口縁突起の基部は括れを呈している。口縁部から突起上面に平行する2本の沈線が施され、沈線間は地文が磨消しされる。突起頂部には上方から口唇に平行する圧痕が付加される。地文はLR斜縄文である。

#### 第V群土器(第44図20~23・25・26、第50図152~179・写真協版34・40)

縄文時代晩期の土器群で、ほぼ復元できたものは台付鉢形土器2点であり、大半が破片である。殆どがXI Q~XIR区からの出土である。文様等の特徴により3類に分類した。

1類 三叉文、入組文、魚眼文が施文されるもの(第50図152~167・写真図版40-152~167) 晩期初頭の大洞B式に比定されるものを一括した。

A 三叉文、入組文が施文されるもの(152~162) 152は台形状の低い突起を、153は山形突起口縁をもち、突起真下に三叉文が施されるものである。152は口縁に平行する磨消し帯をもち、153は無文であり連鎖状の隆体をもつ。154~157は緩い小波状口縁の土器で、平行沈線の先端部が入組文状を呈す。160は刻みのある小突起口縁で、文様の構成が155に類似するものである。

158・159・161・162は三叉文をもつもので、159の突起には円形の刺突が施され、161は粘土の貼付けをもつ。

**B 魚眼文、玉抱え三叉文が施文されるもの (163~166)** 小形の浅鉢形土器の口縁部片である。沈線又は磨消しによって三叉文を施文し、その中心に魚眼状の、あるいは巴状の文様を配置されるものである。

167は本類に属する精製鉢形土器であろう。

**2類 羊歯状文が施文されるもの (第50図168~175・写真図版40—168~175)**

本類は縄文時代晩期前葉の大洞B—C式に比定されるものである。全て鉢形土器の破片であり、168は丸底を呈する浅鉢であろうか。平行沈線により口縁部文様帯を画し、羊歯状文を施文するものである。168は已状の文様のなごりを留めるもので、羊歯状文の初現期のものであろうか。

**3類 平行沈線、連続刻み、雲形文が施文されるもの (第44図20~23、第50図176~179・写真図版34—20~23、40—176~179)**

本類は大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>に比定されるものを一括した。鉢形、台付鉢形、壺形の土器がある。20~23・25・26はXIQ区II層から一括出土したものである。20・23は器形が酷似する台付鉢で、20は体部文様に雲形文をもち、口縁は連続小波状で、口縁直下に連続刺突文が施される。21は体部上端に平行沈線+刺突による幅の狭い文様をもち、口縁には2個一對の突起がある。20と同様、捻り瘤状の突起をもつ。外面には多量の煤が付着する。176~178はほぼ同様の口縁部文様帯をもつものである。21は小突起口縁部文様帯に平行沈線が施されるもの、22は無文の壺形土器で、頸部に平行沈線及び瘤状の突起をもつ。179は口縁が外反し、横位の刻みをもつ山形突起をもつものである。

**第VI群土器 (第44図24、第45図27~32、第46図33~42、第51図180~221、第52図220~230・写真図版34~36・41・42)**

本群は所属する時期の不明な縄文土器を一括したものである。器種としては、深鉢形、鉢形、小形鉢形、浅鉢形の土器があるが、量的には粗製深鉢が殆どを占める。

**(1) 深鉢形土器**

波状口縁のものはみられず、すべて平縁である。一部復元されたものの器形を大別すると、外傾し立ち上がるもの (27・29)、直立気味に立ち上がるもの (30)、体部上半で直立気味に立ち上がるもの (31・33)、内湾するもの (28・32・34) などがある。

口縁部片では、原体側面圧痕をもち外反するもの (180・181) があるが、他は上記に含まれる形状のものである。

## (2) 鉢形土器

小形のもの、浅鉢のものがある。口縁部の形状では平縁のもの、波状口縁のもの、小突起をもつものがある。24・35は平縁の小形鉢であり、24は緩く内湾気味を呈し地文として無節斜縄文(Lr)が施文されるもの、35は体部が外傾し広口状となるもので、体部と同じ縄文(LR)が底部の周辺にも施文される。36も小形であり小波状口縁をもつもので、体部上半で肥厚し僅か外反する形状である。無節縄文が施文される。42は無文の浅鉢である。182は強く内傾するもので口縁に平行した磨消し縄文帯をもつ。184~188は小突起、小波状口縁のもので184には指頭圧痕が施されている。

## (3) 壺形土器

38は僅か上げ底状を呈する小形のもので、体部には斜縄文(LR)が施される。40は球形状の無文のもので、頸部に1条の沈線をもち底部には網代痕がある。39も壺形と思われるものであるが、形状は不明である。

## (4) 底部

平底、上げ底状のもの、粘土の貼付で上げ底状につくるもの、高台付の底部がみられる。222~228は上げ底状のもので、底部周縁は筒み出すように盛りあげてつくり出され、228は粘土を輪状につくり、底部に貼付け上げ底状につくるものである。

## 第Ⅶ群土器(第52図231~244・写真図版42)

## 1類 変形工字文が施文されるもの(第52図232・233・写真図版42-232・233)

台付鉢形土器と思われるものの破片が2点出土している。沈線により変形工字文が施文され器面の内外は丁寧にミガキ調整される。

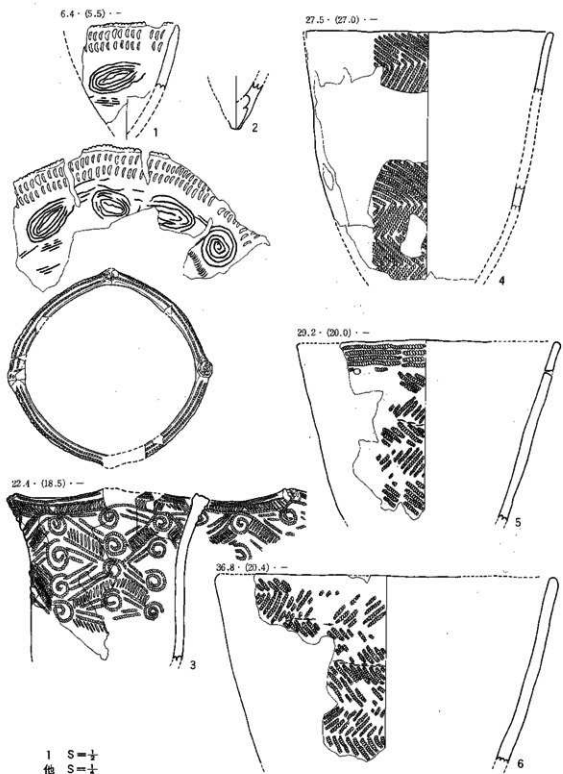
## 2類 沈線が施文されるもの(第52図231・234~243・写真図版42-231・234~243)

231は台付鉢形土器で体部の一部が復元されたものである。口縁に平行する沈線が口縁部に2条、体部に3条施され、その間をミガキ調整し、体部下半には単節縄文(LR)を施文する。口縁内側には沈線は施されていないが、234~237の口縁内側には、1条の沈線がある。242・243は平行沈線が施文される台付鉢の脚部である。外面は丁寧にナゲ調整される。

240・241も脚部で、沈線で幾何学的な文様を構成する。238・239はハート形の文様を描き出すもので、他の土器に比較し胎土が粗く、焼成や器面調整も悪く、縄文土器に属する可能性もある。

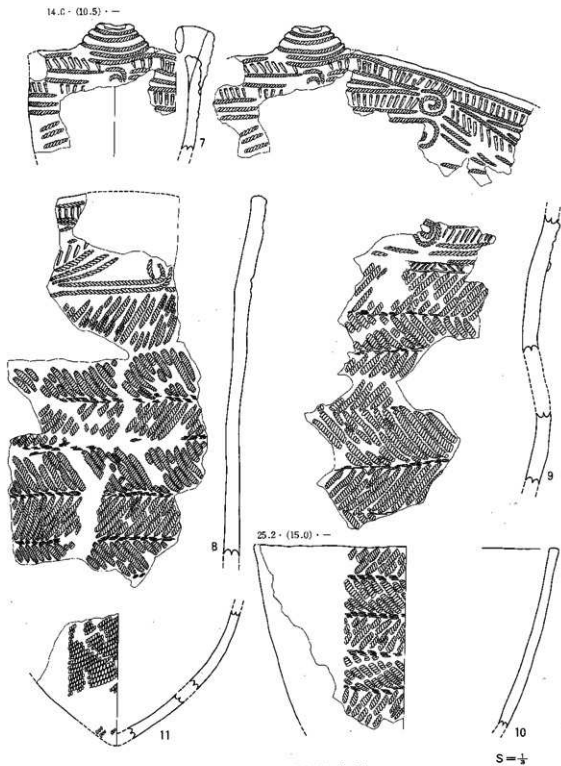
## 3類 燃糸文が施文されるもの(第52図244・写真図版42-244)

1点の出土である。口縁が肥厚する形状で、口唇部は平らにつくり出される。縦位に細かい燃糸文が施文され、口唇部にも同じ施文が斜めになされる。外面には煤が付着している。

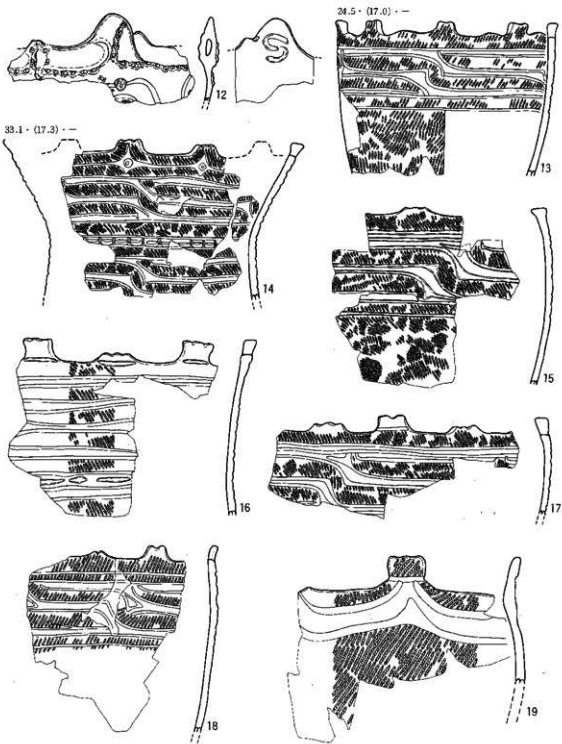


第41图 6区遺構外出土遺物(1)



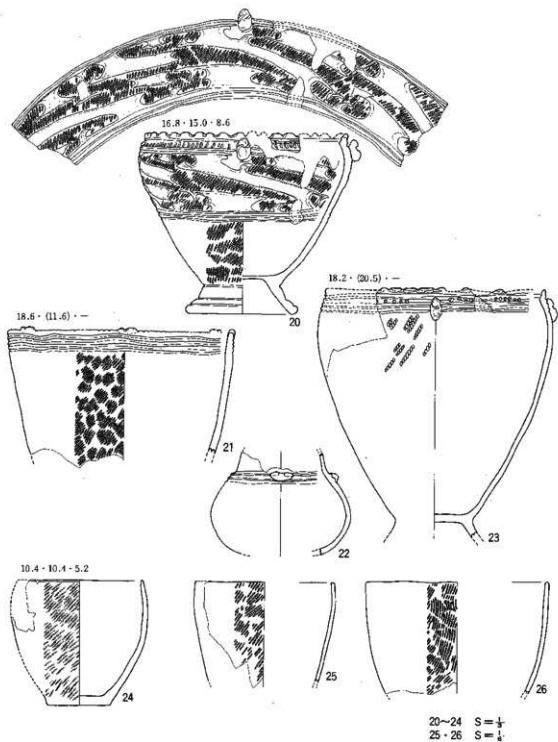


第42图 6区遺構外出土遺物(2)

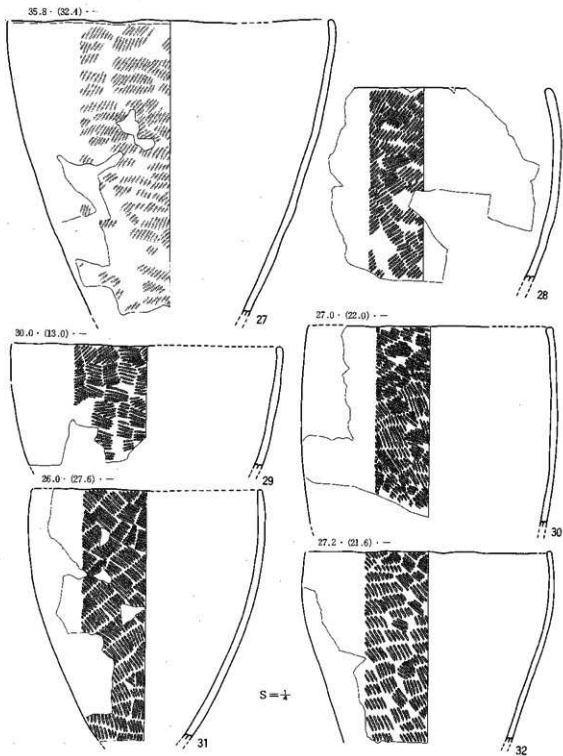


第43图 6区道槽外出土遗物(3)

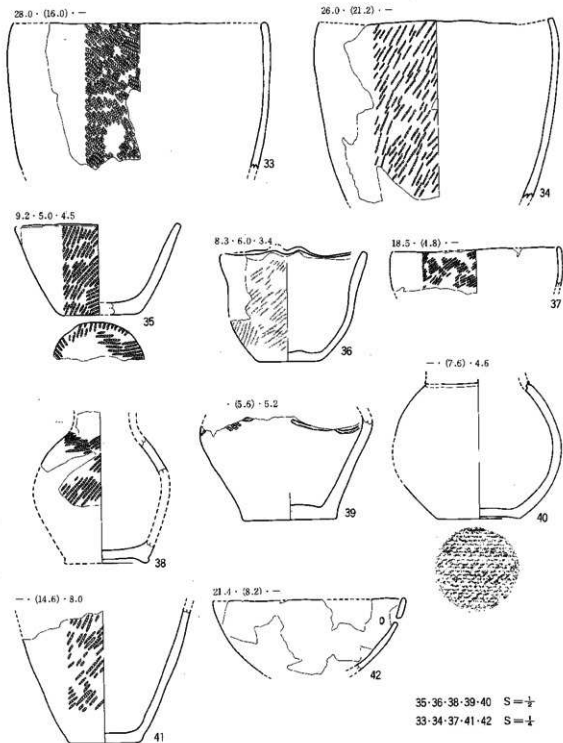
19 S=1/2  
12~18 S=1/4



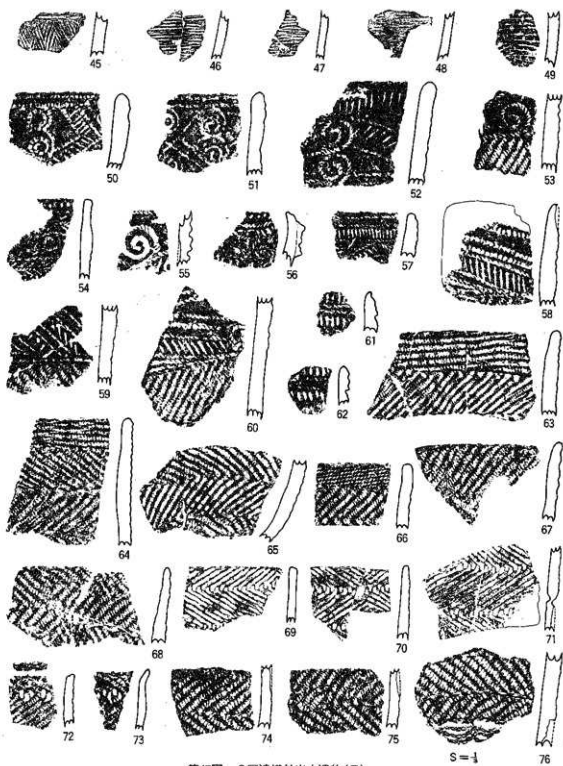
第44图 6区遺構外出土遺物(4)



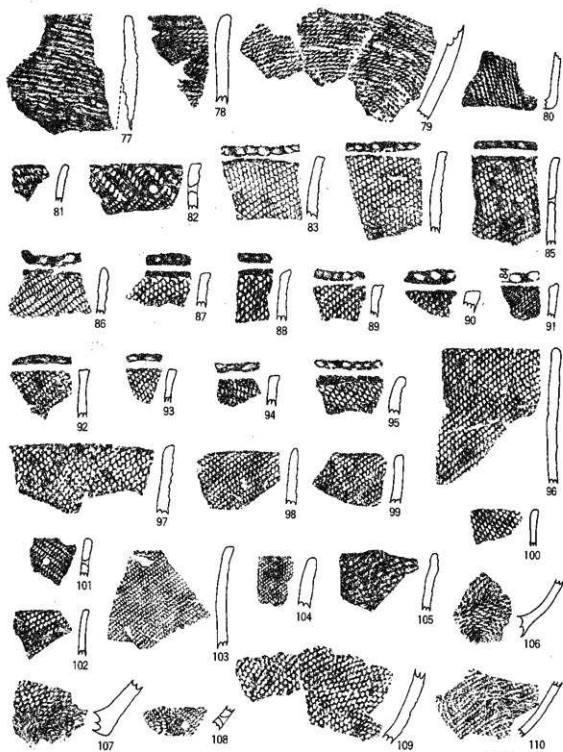
第45图 6区遺構外出土遺物(5)



第46图 6区遺構外出土遺物(6)

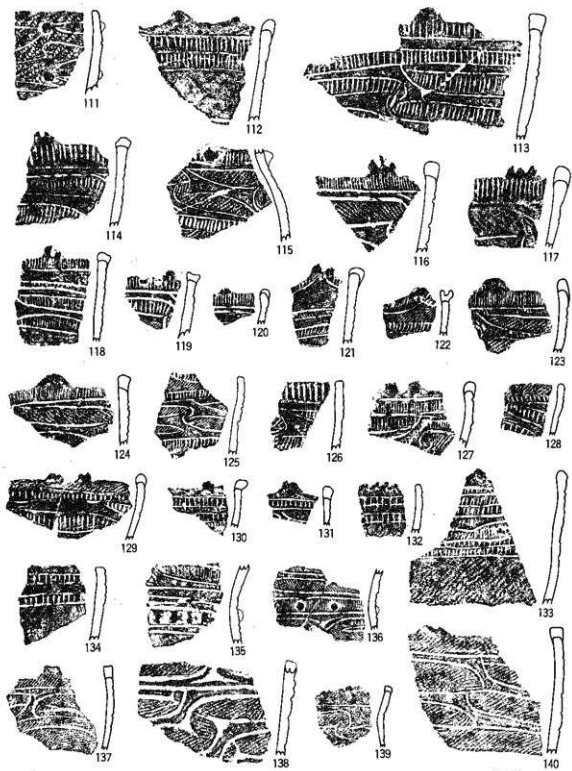


第47图 6区遺構外出土遺物(7)



第48图 6区遺構外出土遺物(8)

S=1/2



第49图 6区渣桥外出土遗物(9)

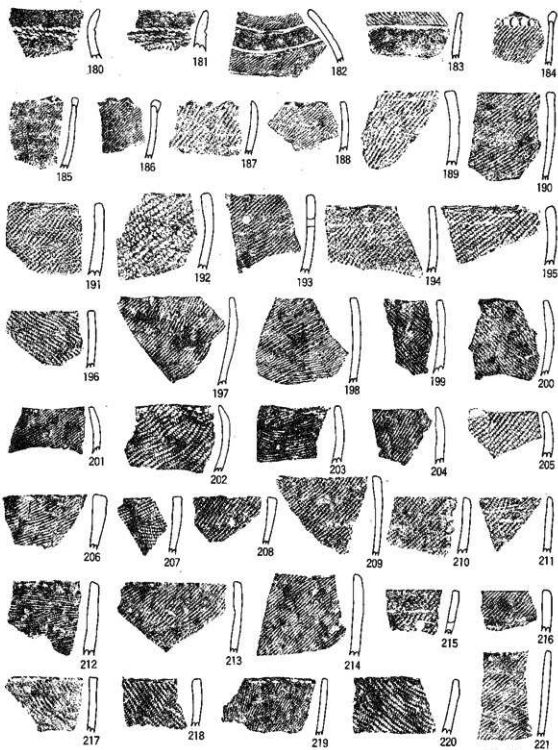
S = 1/2





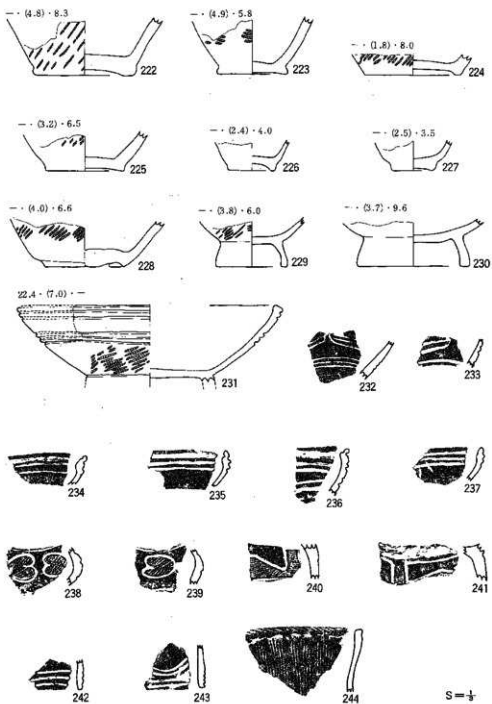
S=子

第50图 6区遺構外出土遺物(10)



第51图 6区遗物出土文物(11)

S = 1/4

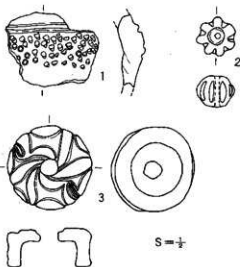


第52图 6区遺構外出土遺物(12)

S—↓

2. 土製品 (第53図 1~3・写真図版42—245~247)

遺構外から3点出土している。1は中空土偶の破片であろう。外面はナデ調整され、沈線及び円形刻突が施される。2は中心に径2.5mmの小孔をもつ装飾品である。外形は算盤玉のような形状で、周りの側面から刻みが施され上面観は花卉状を呈す。上部及び下部はやや窪んでいる。計測値は高さ1.7cm、外径2.3cmである。



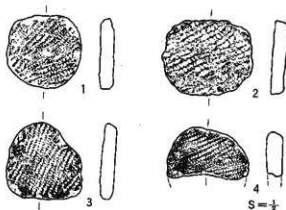
3は外径4.6cm・高さ2.2cmの耳飾りである。中央に約1.0cmの円孔があり、上面には点対称の浮彫り風の渦巻文が施文される。焼成が良く、色調は褐色であるが、中央の円孔の周辺

は使用による摩耗で暗褐色の光沢を呈している。丹塗りのものであったと思われる、丹の痕跡が僅かに見られる。

第53図 6区遺構外出土遺物(13)

3. 円盤状土製品 (第54図 1~4・写真図版42—248~251)

縄文土器片を人為的に打ち欠いて径4cm前後の円形状に仕上げている。形態は円形を基本としながらも2はやや楕円形、3は不整形を呈しており、一定の規則性はみうけられない。利用した土器の破片は体部の破片で、厚さは7mm~8mmである。



第54図 6区遺構外出土遺物(14)

3と4の周縁の一部には磨き痕が認められる。

No.	出土地点	計 測 値				焼成	胎 土	色	調	施 文	備 考	
		径φ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)							
1	XII Th-II下	4.0	4.1	0.7	15.6	良	細砂を含む	7.SY24/6褐色		L.R.横切面		
2	XII Th-II下	4.1	3.0	0.7	19.5	良	細砂を含む	7.SY27/4C.濃い褐色		L.R.横切面	浮彫文	
3	XII Th-II	4.2	4.2	0.8	17.8	良	好	細砂を含む	5.YR5/6褐色		L.R.横切面	
4	XII Th-II	3.7	4.5	0.8	11.6	良	好	細砂を含む	5.YR5/4C.濃い赤褐色		L.R.横切面	

## 4. 石器

6区の遺構外出土の石器等は、石鏃10点、石匙18点を含め剥片石器類が166点で、磨製石斧8点を含め礫石器類は70点である。以下器種毎に記述する。

## I 石鏃 (第55図1~10・写真図版4-1~10)

10点の出土であるが、形態・基部のつくり出しに各種の形状がみられる。

A 三角形を呈するもの(1~4) いわゆる三角鏃である。鏃身が2等辺三角形で平基なもの1~3、基部が内湾するもの4がある。1・3・4は鋭い尖頭をつくるが、1・4の加工調整が丁寧であるのに比べ、3は剝離加工が粗く片面中央部に一次加工面が残る。2は周縁から表裏に丁寧な加工調整を施されるが、尖頭のつくり出しが鈍いものである。

B 有基鏃のもの(5~7) 鏃身の形状は、側縁が内湾し錐状の尖頭をつくるもの5と、側縁が内湾せず三角状の尖頭のもの6・7である。基部のつくり出しは、5・6が突出した尖基をもつもの、7は僅か闊部に挟りを施し、短く突出した基部をつくるものである。

C 菱形を呈するもの(8) 他に比較し大形である。周縁から大きめな剝離加工を施し菱形状につくられるもので、表裏に一次加工面が残る0.8mmと肉厚である。重さは6.2gである。

D 五角形を呈するもの(9) 非対称な五角形状につくられるもので、剝離加工調整が中央部に達せず瘤状の厚みが残る。尖頭の両側縁は110度位に開いている。

E 挟入をもつもの(10) 8と同様やや大形である。鏃身側縁はわずかに外湾し、中央部の両縁及び下端に挟り込みを施し、翼状の基部をつくるものである。中央部挟入部から下部にかけタールが付着している。石質は玻璃質流紋岩で、重量は3.9gある。

## II 石匙 (第55図11~20、第56図21~28・写真図版43-11~28)

欠損品も含め菱形のもの8点、横形のもの10点の出土である。

A 縦形のもの(11~18) 刃部のつくりには、複刃状のもの、曲刃状のもの等があるが、便宜上つまみを中心として左右が対称であるものA<sub>1</sub>、非対称のものA<sub>2</sub>の2種に区分した。

A<sub>1</sub> ほぼ左右対称形に近いもの(11) 先端が欠損しており正確さを欠くがほぼ中心に摘みをもつものであろう。2側縁に表面から加工調整を施し刃部をつくるものである。摘みは表裏の加工調整によりつくられる。

A<sub>2</sub> 左右非対称形のもの(12~18) 曲刃状を呈する15・16を除き、他のものは複刃状のものである。15・16は片面加工により凹刃状(15)、凸刃状(16)につくり出す。複刃状のものは、尖る先端をつくるもの(14・18)、わずかに尖らせるもの(12・13)、尖端のつくりのないもの(17)である。刃部加工調整では、表面から施すもの(12・18)、表裏から施すもの(13・14・17)に大別される。12は向きあう2側縁を主な刃部とし、13・14・17はつまみ部を除く周縁を刃部とするものであろう。

**B 横形のもの (19~28)** 石器の置き方では縦形に属するもの (24・27・28) を含め10点である。つまみの位置によりB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>の2種に区分した。

**B<sub>1</sub> つまみを中央部につくるもの (19~22)** 4点である。形態が長方形のもの (19)、1端が尖り三角形のもの (20)、方形を呈するもの (21・22) がある。刃部加工は表面から施され、19・21はつまみの対辺に、20は尖頭をつくる2側縁に、22はつまみに対する1側縁につくられる。21・22はつまみのつくりが大柄で挟り込みをもたない。

**B<sub>2</sub> つまみが一方に片寄ってつくるもの (23~28)** 形態は刃部を横にした場合、つまみが一方の端に位置し、台形状又は木葉状 (27・28) を呈するものである。台形状のもの (23~26) は刃部がつまみに対し向きあう側縁に表面から加工調整されるもので、23・24は裏面からも調整がなされる。26は表面に自然面をもつ大形のもので43.8gと重量のあるもので、刃部の加工調整も大柄である。27・28は木葉状のもので、外湾する側縁に刃部をつくるものである。28は裏面の先端部にも調整を施し、鋭利な端部をつくり出している。

### III 石錐 (第56図29~37・写真図版43-29~37)

29・30は棒状錐、31~35は基部をもつものである。31・32は刃部断面が菱形を呈し、31の先端は鋭く尖っている。36・37は錐状の長めの刃部をつくらず、先端を尖らせるものである。

### IV 尖頭石器 (第57図38~40・写真図版44-38~40)

2側縁からの加工で、尖頭状の先端をつくり石鏃や搔削器類に分類されないものを一括した。38は周縁から加工が施され、平面形状が尖基錐状を呈すが、側面形状が大きく湾曲するものである。39は表裏加工により、楔状の先端をつくるもの。40は小剝片の先端に鋭い刃部をつくるものである。

### V 搔削器類 (第57図41~53・第58図54~56・写真図版44-41~65)

搔器、削器等を一括し搔削器類とした。鋭利な側縁に連続加工調整が施されるものも一部含まれる。刃部の形状等によりA~Eの5種に区分した。

**A 直刃状のもの (41~50)** 縦長状剝片の1側縁に刃部をつくるものと、三角形剝片の直線辺に刃部をつくるものがある。46・47・50は剝片に厚みがあり刃部角がやや大きめであり、47は60度以上の角度を呈す。

**B 横刃状のもの (51~53)** 横長剝片の打点の対辺に刃部をつくるものである。53は表面に大きく自然面が残るもので、一縁に調整加工し刃部をつくる。

**C 曲刃状のもの (54~58・60)** 刃部の形状が曲線状のものである。54は半月状を呈するもので表面に丁寧な加工を施すものである。56は欠損品である。58は一部打撃加工が施され鋸歯状の刃部を呈するものである。

**D 複刃状のもの (59・61・64)** 59は厚みのある縦長剝片の2側縁に表面加工を施し、直

刃状、曲刃状の2つの刃部をつくるもの、61は微細な加工を施し直交する2辺に刃部をつくるものであり、65は2側縁の表裏に微細加工を施し尖頭状を呈するものである。

E 尖頭刃状のもの(62・65) 側縁に刃部をもち、尖頭状の先端をつくるもので、62は小剥片のもの、65は横形剥片の一端に表裏加工を施すものである。

VI 石べら状石器(第59図66~75、第60図76~80・写真図版44-66~75、45-76~80)

表裏に加工調整が施されるものもあるが、主として片面加工によりつくられる。形状は、三角形又は縦長の五角形状のもの(66~70)、方形のもの(71~73)、長方形のもの(74~78)丸味をもち楕円形状のもの(79・80)に分けられる。楕円形状のもの及び73を除き、機能部位と思われる下辺は丁寧に加工が施されている。

VII 挟入石器(第60図81~88、第61図89~91・写真図版45~81~91)

側縁に剝離加工により挟入が施されるもので、打点の対辺の側縁中央に小さな挟入部をもつもの(81・82)、緩く内湾する挟入部をもつもの(83・84・86)、つまみ状のつくりを呈するもの(85)、2側縁に挟入部をもち2個一対状のつくりを呈するもの(87~91)がある。

VIII 不定形石器(第61図92~105、第62図、第63図、第64図、第65図154~164・写真図版45-92~119、46-120~164)

加工が局部的に施されるもの、使用痕をもつもの、小剥片のものなどを一括した。局部加工及び使用痕は、剥片の鋭利な側縁にもつものが大半で削器としての機能をもつものであろう。142~148は、前記の器種分類からは除外したが、周縁又は側縁から加工調整され形状を整えるもので、搔削器類の範疇に含まれるものであろう。

IX 石核石器(第65図165・166・写真図版46-165・166)

165は扁平な石核の1側面に打撃加工を施し大柄な刃部をつくるもの、166は周縁に打撃加工が施されるものである。

X 小形磨製石斧(第66図1・2・写真図版47-1・2)

長さが7cm、最大幅2cm以下のものを一括した。1は刃部が一部欠損するほかはほぼ完形品で、基部は端部で尖り面取りが施され、刃部は直刃状を呈している。中央部での断面形は長方形で、厚さ7mmほどである。2の刃部は欠損しているため形態は不詳である。基部は1と同様で、側面も丁寧に研磨し面取りが施されている。また使用擦痕がタテ方向とヨコ方向に認められる。石質は淡緑色凝灰質千枚岩で北上山地産のものである。

XI 磨製石斧(第66図3~8・写真図版47-3~8)

完形品と基部破片を含めて8点出土している。基部と刃部の形態からA類とB類とに大別さ

れる。

A 基端部は面取りが施され、側面の稜が明瞭で、刃部は蛤刃でやや弧をえがく円刃状を呈するもの。3は基端部がやや直線的で、刃部は良く研磨されている。側面の稜は刃部側が基部に比べて明瞭である。5は片面半分が剥落したもので、研磨は粗雑である。

B 基端部は面取りが施され、刃部は蛤刃で直刃状を呈するもの。4は基端部が丸みのあるもので、端部は敲打痕跡があり一部剝離されている。造りは粗雑で側面の稜も不明瞭である。

6～8の3点は基部の破片で、いずれも端部に敲打痕が認められる。6は丁寧に研磨され端部は尖っている。7と8は面取りが施され、7は端部がやや丸みを呈する。側面の稜は6と8は明瞭である。

#### XII 打製石斧 (第66図9～14・写真図版47-9～14)

破片を含めて6点出土している。9はほぼ完形品で長さ16.2cm、幅6cm、厚さ3.3cmである。他に比べて大きめで、基部の端部は尖り、刃部は円刃状を呈しており、全体丁寧な剝離調整を施している。基部の形態は端部が面取りが施され、10のように丸みを呈するものとやや直線的な11・12などがある。刃部は円刃状の14や直刃状に近い13の2種類がある。剝離調整は全体に丁寧に施している。

#### XIII 石嵌状石器 (第67図15～17・写真図版47-15～17)

形態は三味線に使用する撥に類似し、破片を含め3点出土している。15は基部の一部が欠損するものの長さ9.6cm、幅5.5cm、厚さ1.3cmである。刃部は直刃状を呈し、両側からV字状に剝離調整をし刃を造り出している。基部や刃部に比べて側縁部はやや粗雑な剝離調整を施している。16は刃部の一部が欠損しており、側縁の扶りの部分は摩減痕が認められる。長さ10.1cm、幅5.8cm、厚さ1cmである。17は刃部と思われる破片で、側縁は両面から剝離調整を施している。刃先の一部は剥落があるものの、良く使用されており摩減している。石質はいずれも北上山地産の輝緑凝灰質チャートである。

#### XIV 凹石 (第67図18・19・写真図版47-18・19)

2点の出土である。18は長さ16.8cm、幅10.3cm、厚さ7cmで表・裏・側面の3カ所に凹を有している。19は摩減をしており、表・裏に大小5カ所の凹があり、片方の端部に敲打痕が認められる。

#### XV 磨石類 (第67図20～25、第68図26～38、第69図39～45・写真図版47・48-20～45)



大小破片を含めて25点出土している。使用している面は1カ所と複数があり前者が多く、形状は盤状(円形・楕円形)、球形、方形、三角柱状、多角柱状等があり、三角柱状を呈するものが全体の約半数を占めている。

20は楕円形を呈し、表・裏が使用されている。21と22はやや円形で、側縁の1カ所に敲打痕が認められる。いずれも両面が使用されている。23~26は球形ないし楕円形状を呈するものである。23は全面が磨滅しつるつるしており、24は複数の使用痕と敲打痕がある。25は表・裏の2面使用である。26は半分欠損しているが側縁の1カ所が良く使用されている。27は方形のもので6面全面を使用している。28は側縁の3カ所を使用しており、特に1面は良く使用され平坦となっている。29と30は端部の片方を使用面としている。また30の端部には敲打痕が見られる。31は偏平な石の片方を使用面としている。32~45は三角柱状ないし多角柱状を呈するもので、特に稜部の一面を使用しているものが多い。32は稜部の3面を使用しており、1面は良く使用され平坦となっている。33は一部欠損しているが全面が使用されている。34は一部が欠損しているが3面の稜部は良く使用され平坦である。35と36は端部に敲打痕が認められる。37は3面の稜部と端部が使用されている。38と39は稜の1面のみが使用されている。40は5角形状を呈し全面が使用され、側縁の一部は平坦となっている。42・43・45は一部破片であるが1面使用のものである。44は一部欠損するが大角形状で、3面が良く使用されている。

#### XVI 半円扁状打製石器(第69図46・写真図版48-46)

46は長さ11cm、幅15.3cm、厚さ1.8cmで両面とも丁寧に磨かれており、片面はほぼ平坦である。側縁部は両面から剝離調整を施している。一部に黒色をしたクアール状の付着物が認められる。石質は奥羽山地産の輝石安山岩である。

#### XVII 敲石(第70図47~55・写真図版48-47~55)

敲石の単一機能ばかりでなく凹石・磨石等の機能を持ったものを一括している。47と48は両端部に敲打痕があり、磨石の転用である。49は磨痕と8カ所の敲打痕が認められる。50は一部欠損しているが側縁の1カ所を敲き面として使用している。51と52は磨石転用のもので、51は先端部と側縁の2カ所、52は両端部に敲打痕がある。53は磨製石斧の欠損したものの転用で、両端部を敲き面としている。54と55は敲石・凹石・磨石の3機能を備えたものである。54は長さ11.8cm、幅4.4cm、厚さ3.1cmで、断面形は三角形形状を呈している。両端部は敲き面、3面が磨面、1面を凹面と使用している。55は表・裏の4カ所に凹面、磨面は表・裏・側面の4カ所、敲打面は両端部にある。

#### XVIII 石刀 (第70図56・57・写真図版49—56・57)

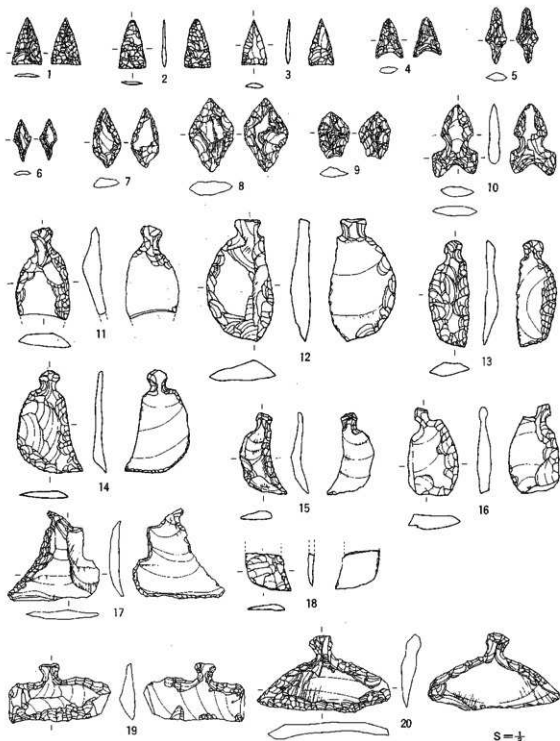
2点出土している。56は両端部が欠損しているが全面丁寧な研磨され、側縁は面取りが施されている。57は長さ48.8cm、幅3.8cm、厚さ2.5cmで、研磨され側縁は稜がとられている。石質は56が輝緑凝灰岩、57が淡緑色凝灰質千枚岩でいずれも北上山地である。

#### XIX 石皿 (第71図58～65、第72図66～70・写真図版49—58～70)

大小破片合わせて13点出土している。使用しているカ所は1面使用が8点、2面使用が5点である。一面使用は58・59・61・62・63・65・68・70である。59は板状を呈し、使用面が多少窪んでいる。61は破片であるが丁寧な造りで中央は窪む。62は側縁の一部に面取りが施され、中央部は良く使いこまれ薄くなっている。2面使用は60・64・66・67・69である。60は両面に敲打痕が明瞭に認められる。64は側縁も丁寧な剝離調整を施している。石質は両輝石安山岩、両輝石安山岩溶岩、角閃黒雲母花崗岩の3種類で占められている。

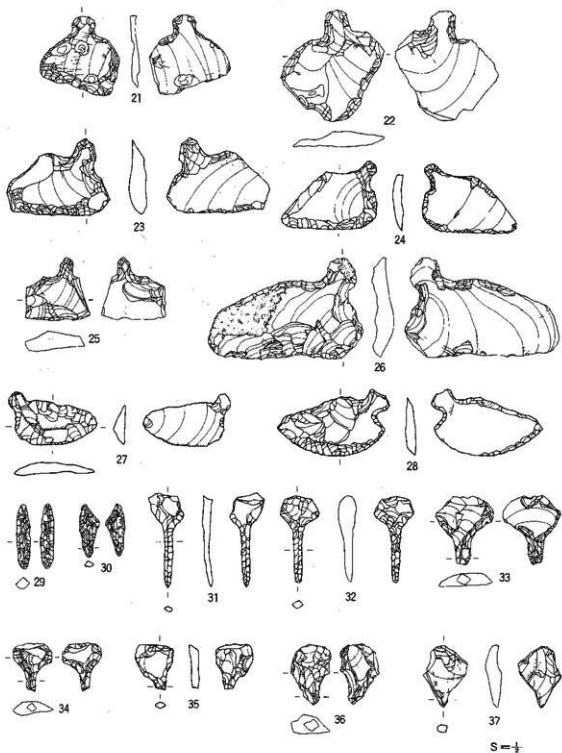
#### 4. 石製品 (第72図71・72・写真図版49—71・72)

71と72の2点出土している。71はつまみを有し、下端は半円状を呈している。長さ2.6cm、幅3.7cm、厚さ1.3cm、重さ6.4gを測り、石質は淡緑色凝灰岩である。材質はやわらかく剝離調整を施している。72は装飾品と考えられるもので、長さ2.6cm、幅2.2cm、厚さ1.1cmである。側縁はやや面取りが施され、直径5mmの小孔が両端から円錐状にあけられている。石質は白色細粒凝灰岩である。

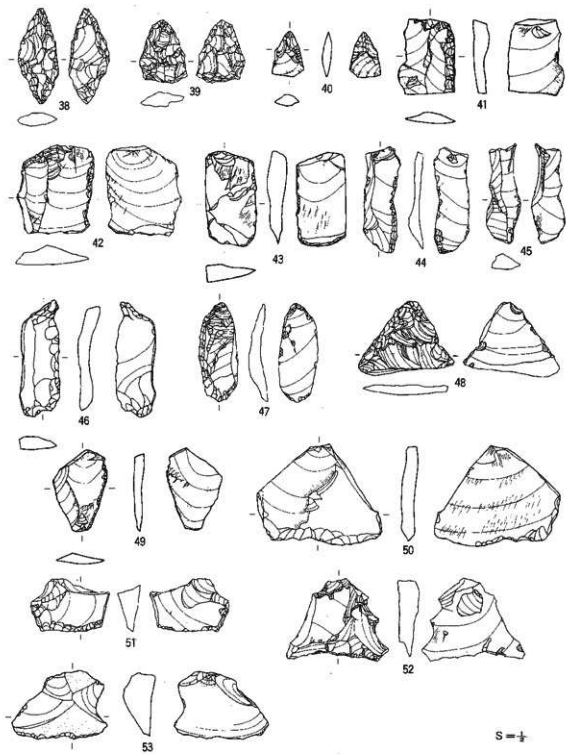


S=+

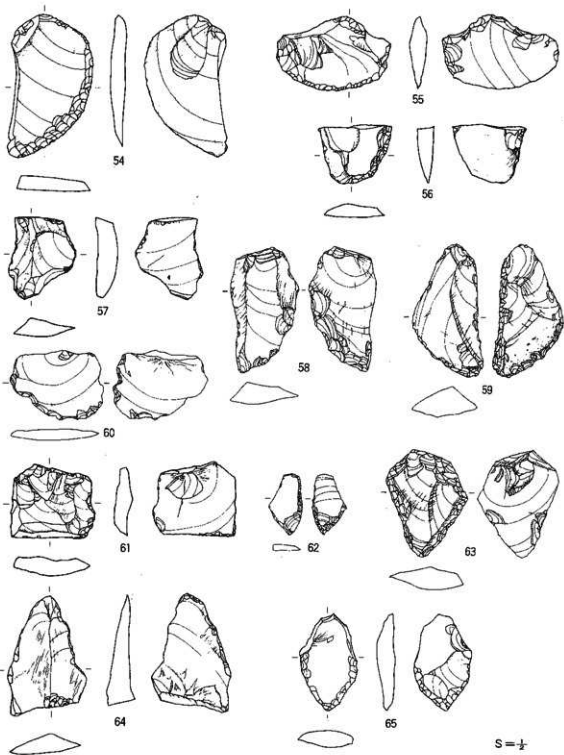
第55图 6区遺構外出土遺物(15)



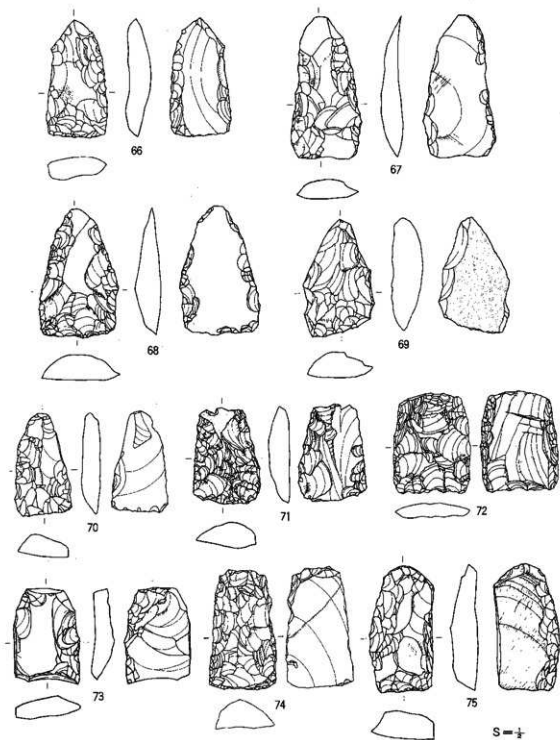
第56图 6区遺構外出土遺物(16)



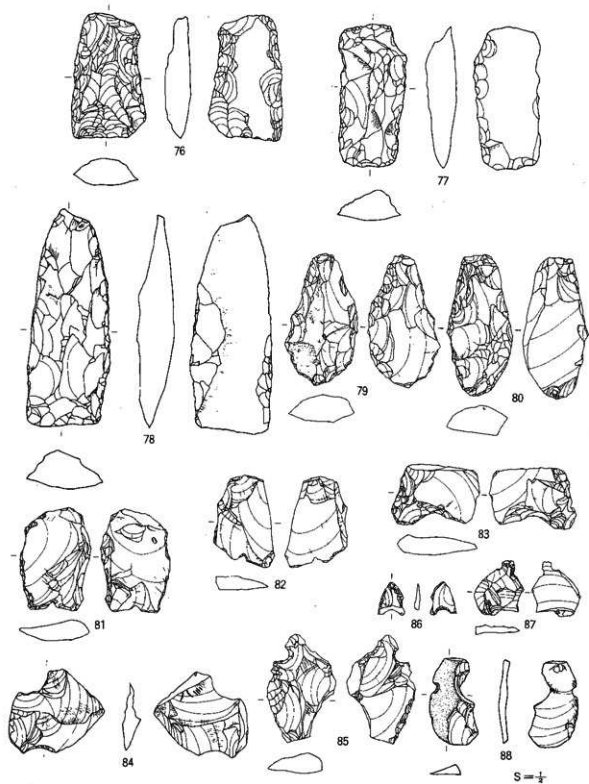
第57图 6区遺構外出土遺物(17)



第58图 6区遺構外出土遺物(18)

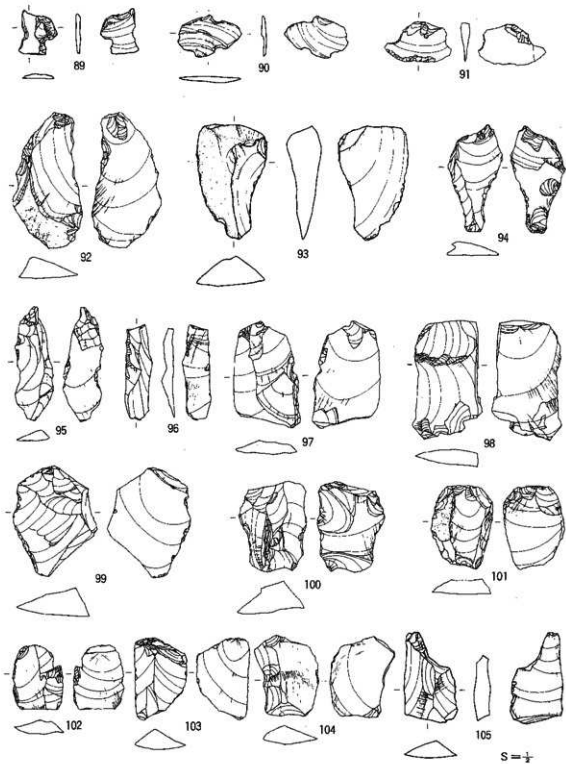


第59图 6区遺構外出土遺物(19)

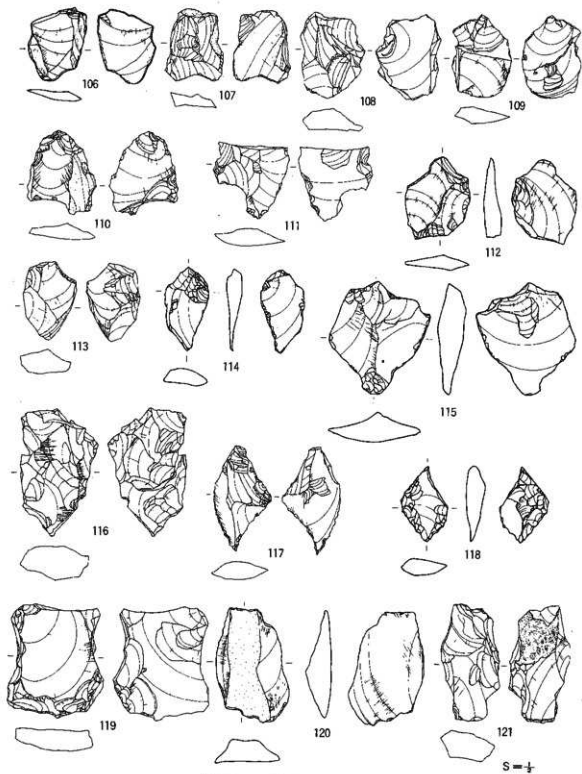


第60图 6区遺構外出土遺物(20)

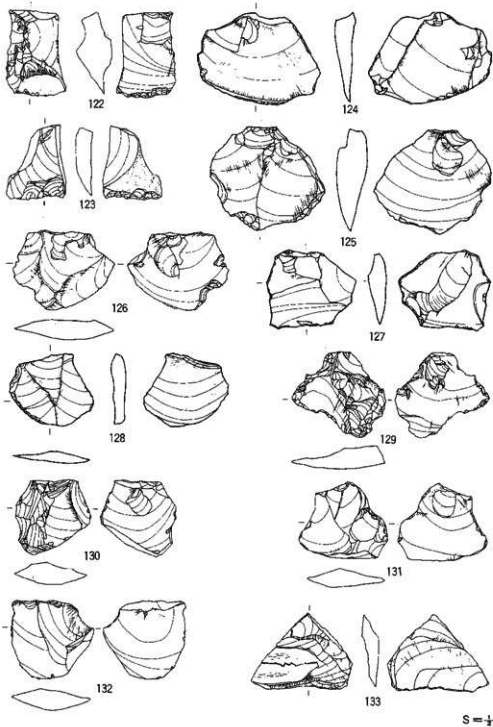




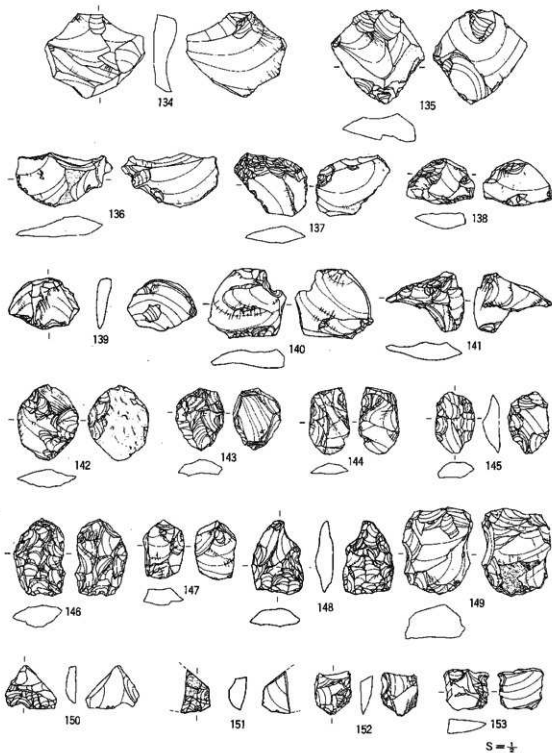
第61图 6区遗址外出土遗物(21)



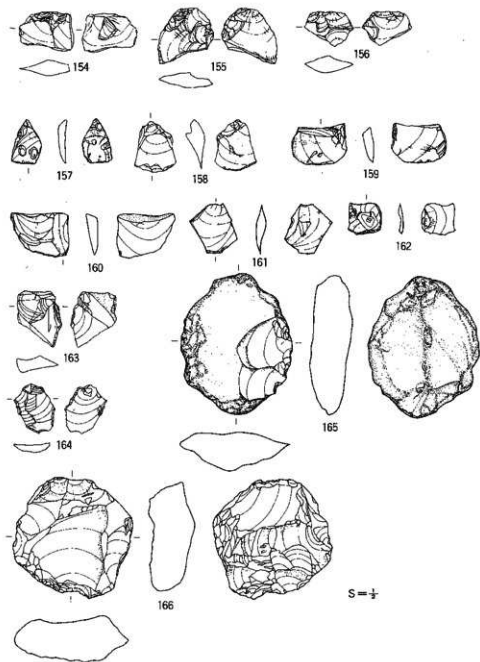
第62图 6区遺構外出土遺物(22)



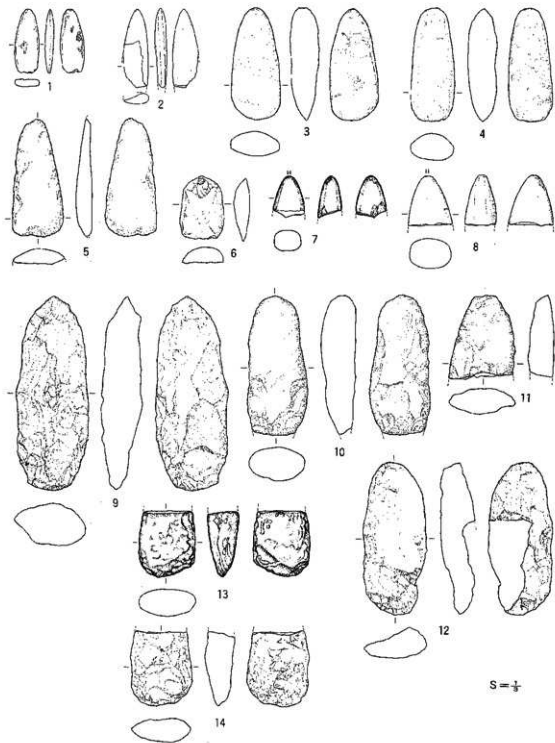
第63图 6区遗物外出土遗物(23)



第64图 6区遗址外出土遗物(24)

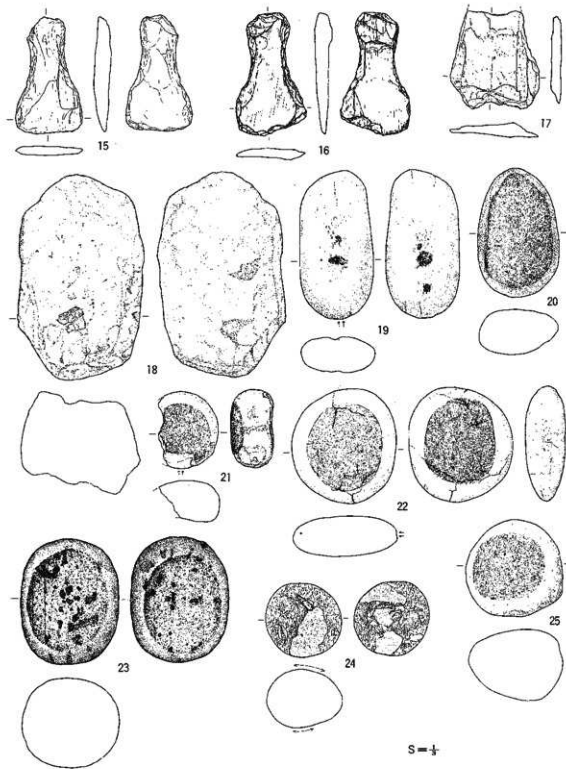


第65图 6区遺構外出土遺物(25)

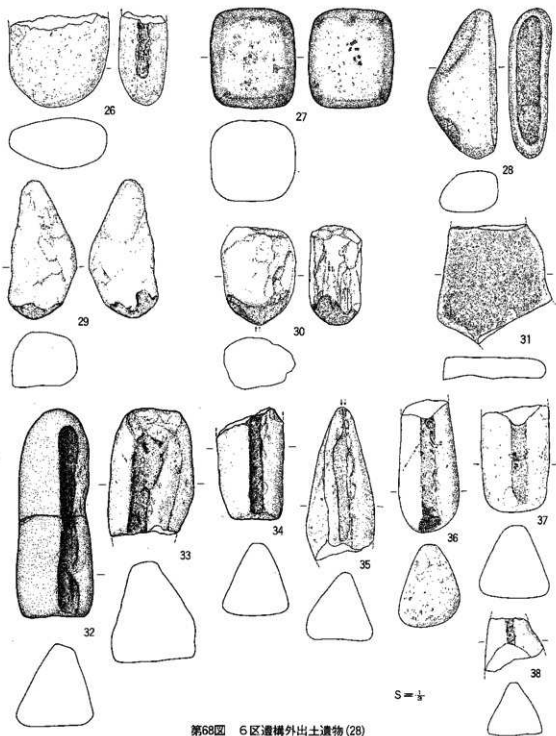


第66图 6区遗物出土文物(26)

6 区

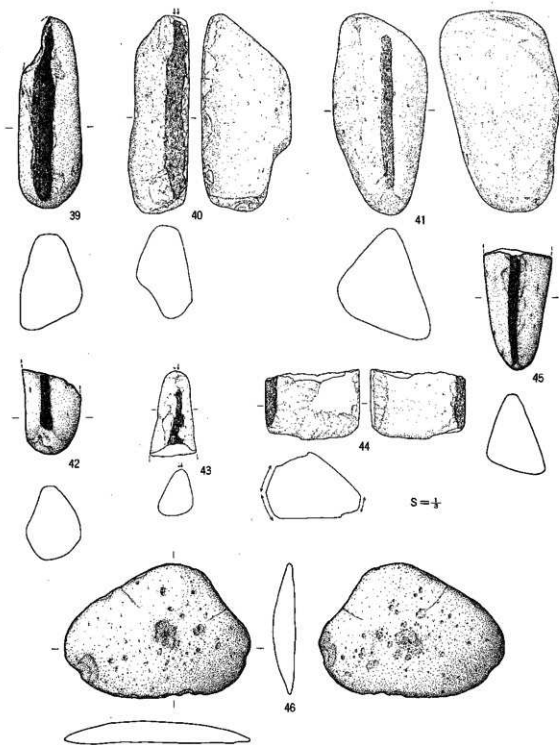


第67图 6区遺構外出土遺物(27)

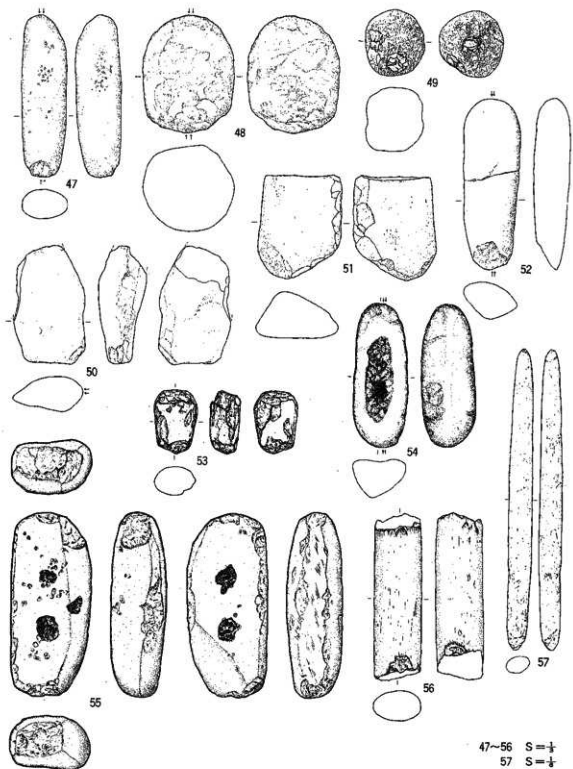


第68图 6区遺構外出土遺物(28)



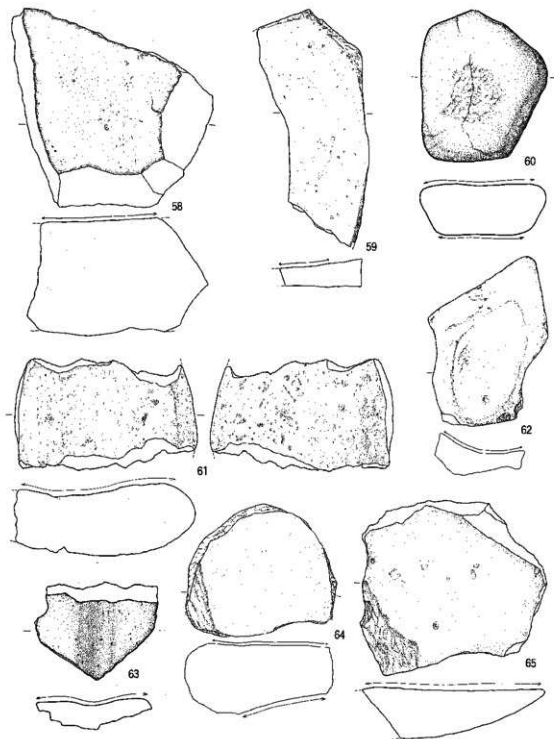


第69图 6区遺構外出土遺物(29)



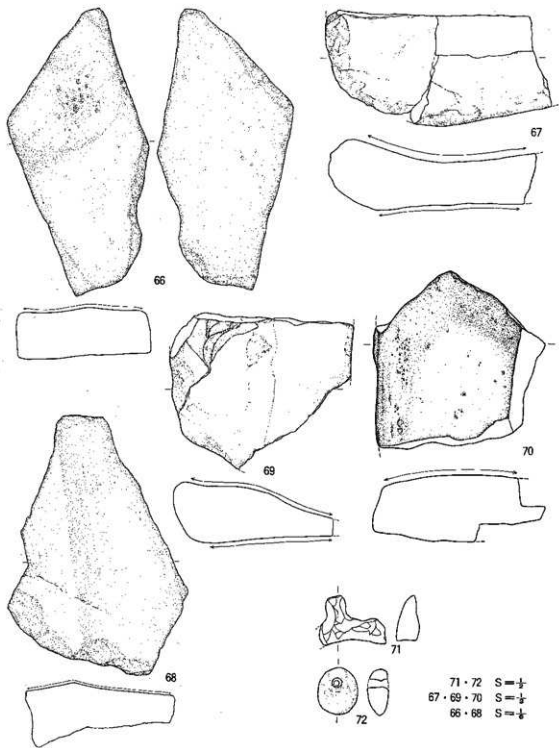
47~56 S=1/2  
57 S=1/4

第70图 6区遺構外出土遺物(30)



第71回 6区遺構外出土遺物(31)

58~63・65 S=1/4  
64 S=1/2



第72图 6区遺構外出土遺物(32)

## IV. ま と め

## 1. 遺構

6区で検出された遺構は、縄文時代竪穴住居址7棟、平安時代竪穴住居址4棟、竪穴状遺構2棟、焼土遺構11基、ピット13基、陥し穴状遺構14基、埋設土器3基である。

## (1) 縄文時代竪穴住居址

検出された住居址は7棟であり、地域的には中央部に位置し1棟、南東部に位置し6棟ある。時期別では、前期のもの1棟(XI Ri)、中期末～後期初頭のもの1棟(XII Th-2)、後期のもの3棟、(XII Th-1、XII Tk、XII Si) 晩期のもの1棟(XIII Si)である。

前期の住居址は初頭に位置づけられるもので中央部に位置しており、形態・規模は東西方向に長軸をもつ径約3m～2.5mと小形のもので、屋内炉はもたず柱穴も検出されていない。

中期末～後期初頭と推測されるものは、緩斜面の上部の北東寄りに位置してある。攪乱を受けており正確な形状は把握されないうが径約5.5m×4.8m規模の楕円形状と思われるものである。住居址のほぼ中央に複式炉をもち、柱穴状ピットが炉と壁の中間に円形状に配置し計7基あるが、その規模からは主柱穴2本柱の配置であった可能性が高い。

後期に属するものは中葉～末葉に位置づけられるもので、径約4.9m×4.5m規模の楕円形を呈するもの、径約4mの円形を呈するものであり住居址の中央に地床炉をもつ。柱穴配置は明確にされていない。もう1棟は地床炉及び床面のみを検出であり形態等は不明である。

晩期のものは初頭に位置づけられるもので、南東部の南端に位置している。径約3mの円形を呈する小形のものである。炉は西壁に片寄って地床炉をもち、焼土は大きく攪乱を受け盛り上がる状況を呈している。柱穴は検出されていない。床面下のピットは時期を異にするものであろう。

時期不明の1棟は、径約3.5mの円形で地床炉をもつものであり、出土している粗製土器から判断すると縄文時代後期に属する可能性が高い。

表1 縄文時代竪穴住居址一覧表

( ) の数字は推定値

No.	遺構名	図面番号	写真図版	平面形	規模 (m)		炉 址	柱穴状 ピット	時 期	附 属	備 考
					長 口 部	尺 面					
1	XI Ri住	2	3	楕円形	3.95×2.5	2.95×2.4	なし	2	縄文(前期?)		
2	XII Th-1住	3	3・4	楕円形	4.6×(3.9)	4.4×(3.7)	地床炉	18	縄文(後期中期)		
3	XII Th-2住	9	3	楕円形	4.6×(4.9)	4.3×(4.7)	複式炉	7	縄文(中期末～後期初頭)		ピット1基
4	XII Si/住	14	6	不明	—	—	配石炉	—	縄文(後期)		
5	XII Tk住	13	6	楕円形?	3.9×(4.1)	3.7×(4.0)	地床炉	9	縄文(後期)		
6	XIII Si/住	15	8	円形	2.9×2.6	2.5×2.3	地床炉	1	縄文(晩期前葉)		床面下ピット2基
7	XIII Si/住	16	7	円形	3.0×2.8	2.8×2.6	地床炉	3	縄文(不明)		ピット1基

## (2) 平安時代竪穴住居址

検出された住居址は4棟(表2参照)で、調査区北西部の段丘産縁辺部にX P/I住・X Qi住、X Qn住・X I Qb住の各2棟ずつ隣接して位置する。平面形態は方形を基調とするものと台形の2タイプに分けられる。規模(床面で計測)はX P/I住・X Qn住・X I Qb住の3棟が3.1m×3.0mの範囲にあり、X Qi住が他に比較して3.9m×3.9mと若干大きくなっている。

方形を呈するもの………X Qi住、X I Qb住

台形を呈するもの………X P/I住、X Qn住

焼失家屋と考えられるものはX P/I住とX Qi住の2棟で、埋土下位から床上にかけて焼土と炭化材が多く出土している。炭化材は構造材としての形状や寸法がわかるものはなかったが、樹種は鑑定の結果ケヤキと針葉樹のスギに類似するものとの所見であった。

カマドの設置場所は北東壁が1棟、南東壁に3棟である。各壁における設置位置は中央部がX I Qb住で、X Qi住とX Qn住の2棟はやや北寄りに位置している。カマド本体の構造は焚口

北東壁………X P/I住

南東壁………X Qi住・X Qn住・X I Qb住

部の側壁(袖部)と天井部に平盤な礫を据え、その上をシルトと粘土で被覆して構築している。煙道の構造は不明な1棟(X Qi住)を除いた3棟が掘り込み式で、上り勾配と下り勾配の2タイプに分かれる。X P/I住とX I Qb住の煙道は、側壁と天井部を平盤な角礫や亜角礫で組みその上をシルトないし粘土で被覆している。カマドに使用の礫は安山岩が大部分を占め、大きさは20cm~40cmで盤状のものである。カマドの造り変え(二期)があるのはX P/I住で、煙道を主として改築を行っている。

柱穴と周溝はいずれの住居址からも検出されなかった。ピットはカマドの左右いずれかに1基あるものが3棟あり、設置位置から貯蔵穴的な機能をはたすものであろう。

これら4棟の住居址は形態・規模、カマドの構造、占地等に強く斉一性が見られることからほぼ同時並行と考えられる。

表2 平安時代竪穴住居址・竪穴状遺構一覧表

( ) の数値は推定値

No	遺構名	加屋 番号	写真 部数	平面形	規模 (m)		カマド			柱穴	備考
					開口部	床面	位置	方向	支脚		
1	X P/I 住	17	9	台形	3.6×3.4	3.2×3.2	北東壁東寄り	N41E	角柱状の礫	なし	焼失家屋。掘り込み式煙道
2	X Qi 住	19	10・11	ほぼ正方形	4.1×4.9	3.9×3.9	南東壁北寄り	S49E	不明	なし	焼失家屋
3	X Qn 住	23	11	方形	3.5×3.3	3.1×3.0	南東壁中央寄り	S45E	不明	なし	掘り込み式煙道
4	X I Qb 住	24	12	方形	3.4×3.3	3.1×3.0	南東壁中央	S47E	不明	なし	ピット2基、掘り込み式煙道
1	X I 形式坑	26	13	長方形?	—	(4.0×3.0)	—	—	—	—	不明
2	X II 形式坑	27	13	楕円形	4.2×(3.5)	4.1×(2.0)	—	—	—	—	不明(後期?)ピット1基

## (3) 竪穴状遺構

南東緩斜面の北東寄りに位置し2棟検出されている。2棟とも南側が削平され不明な点もあるが、形態・規模は約4.2m×3.2mの楕円形のもの(XII Ue)と現存長4.8m×2.6mの長方形のもの(XII Tg)である。床面はほぼ平坦であり、XII Ueでは小ピットが検出されている。XII Ueの埋土下位から床面にかけて、縄文時代後期後葉の土器及び粗製土器、耳栓が出土しており、ほぼ同時期に所属する遺構と思われる。XII Tgは時期を判定し得る遺物が出土せず、時期は不明である。

## (4) 焼土遺構

中央附近に位置し3基、南東部緩斜面の東側に8基の計11基検出されている。これらはすべて、現地性の焼土である。XI Qh 焼土遺構周辺から、縄文時代前期初頭に位置づけられる長七谷地Ⅲ群土器に比定される深鉢形土器の破片が出土している。他の遺構からは、時期が判定できる遺物は出土していない。

## (5) ピット

13基検出されている。いずれも南東部緩斜面に位置し、住居地の位置する地域からやや隔てた西～北西寄りに占地する傾向がみられる。

形態別には、下記のA～Eの5種類に区分できる。

- A 平面形が円形～楕円形で、断面形が皿状～鍋底状のもの…7基
- B 平面形が円形で、断面形が台形状のもので、フラスコ型を呈するもの…2基
- C 円筒状のもの…2基
- D 平面形が長楕円形で、短径方向の断面形がU字状のもの…1基
- E 平面形が方形で、断面形が浅皿状のもの…1基

B型のフラスコ形の1基には、底面に壁際から斜めに副穴をもつものがある。このような例として、二戸市上里遺跡があり、最近の調査例としては、安代町水神遺跡、軽米町大日向Ⅱ遺跡などがある。

規模については、開口部がD型の長楕円形のもので1.8m×0.45m、他のものは径70cm～1.3mと小さく、検出面からの深さも円筒状のものが1m前後とやや深い、他は10cm～40cmと浅いものである。埋土については、人為的な埋め戻しは見当らず自然堆積である。出土遺物は、2基の埋土中から縄文前期の土器片が数点出土したのみで、他に出土遺物はない。形態・規模から推定し、B型のものは貯蔵穴、C型のもの、一部抉り込みがみられるものもあるが、陥し穴としての機能が考えられる。

## (6) 陥し穴状遺構

6区で検出された陥し穴状遺構は全部で14基ある。「陥し穴状遺構」としたものは従来言われてきた「Tピット」又は「溝状ピット」と呼称された平面形が小判形あるいは、楕円形等で短軸断面形では「V」字状、「U」字状等を呈するピットを一括して陥し穴状遺構とした。

検出された14基は、いずれも6区の南側へ舌状に張り出す緩斜面にある。開口部長軸方向が南北方向のもの2基、東西方向のもの2基で、他は北西-南東方向のもので等高線に対し30°~50°の傾きをもつ。配置状況から2基が平行するものとして、XII SkとXII So、XIII SpとXIII Sc-1の2組があり、ほぼ同様の規模と形態をもつ。壁の崩落等のため本来の形状と異なる計測であると思われるが概して、開口部は長軸長1.8m×3.7m・短軸長45cm~1.2mを、底部は長軸長1.3m~4.0m・短軸長10cm~50cmを測る。深さは70cm~1.3mの範囲である。これら14基を形態分類すると、A~Dの4種類に区分される。

- A 平面形は開口部・底部ともに楕円形~長楕円形を呈し、長軸断面形が逆台形~長方形を呈するもの…3基
- B 平面形は開口部が小判形~長楕円形で、底部は幅のやや広い溝状のもので長軸断面形が長方形のもの2基、上げ底のフラスコ状のもの1基、がある。
- C 平面形は開口部が楕円形、底部が溝状を呈し、長軸断面形は、両端に挟り込みをもちフラスコ形を呈するもの…3基
- D 平面形は開口部・底部とも溝状で、長軸断面形はC型と類似したフラスコ形を呈するもの…5基

長軸長の規模でみると、A型・C型に小形のものが多く、D型はやや大型となる。又短軸断面形をみると、C型・D型はV字状を呈し、A型・B型は開口部の広いV字状もしくはロート状を呈する。なお、A~D型の、開口部及び底部の幅に対する長軸長の比率を求めると右表のようになる。出土遺物は、1基埋土上位から搔削器類が1点出土したのみで、他に遺物がなく、これらの遺構の形態の違い及び規模の大小が、構築の時期による差異なのかその他の要因によるものか不明である。

長軸長（長径）対幅（短幅）の比

型	A	B	C	D
計測部位				
開口部	2	3	2.5~3	5~9
底部	3.5	10	10~20	15~30



( ) は推定値

表3 ビット一覽表

No	遺構名	平面形	断面形	規模 (単位m)			型	備考
				開口部	底部	深さ		
1	XI Rn	円形	血状	1.15×(1.1)	1.1×(1.0)	0.15	A	
2	XII Se-1	円形	不整円筒状	1.2×1.2	0.8×0.7	1.15	C	
3	XII Se-2	円形	平底錐形	1.3×1.2	0.85×0.7	0.75	A	埋土中より縄文前期土器片出土
4	XII Se-3	楕円形	竊底状	1.25×0.95	0.95×0.6	0.3	A	
5	XII Se-4	円形	円筒状	1.0×0.9	0.5×0.5	1.2	C	埋土中より縄文前期土器片出土
6	XII Sj	円形	台形状	1.05×1.0	1.2×1.2	0.35	B	
7	XII Sn-1	円形	長方形	1.2×1.1	1.3×1.25	0.4	B	底部に削穴あり
8	XII Sn-2	円形	血状	0.75×0.65	0.65×0.5	0.1	A	
9	XII Sn-3	円形	血状	1.0×0.95	0.55×0.5	0.15	A	
10	XII Sp	楕円形	竊底状	1.2×0.9	0.8×0.4	0.4	A	
11	XIII Sc	楕横円形	U字状	2.05×0.6	1.8×0.45	0.25	D	
12	XIII Sf	方形	血状	1.1×1.1	0.85×0.85	0.1	E	焼土ビット
13	XIII Ta	円形	竊底状	1.0×0.95	0.75×0.7	0.3	A	

表4 陥し穴状遺構一覽表

No	遺構名	規模 (単位 m)		長軸方向 (真北からの偏角)	断面形状	型	備考
		開口部	底部				
1	XII Sk	2.1×0.85	2.5×0.2	1.3	N64°W	C	出土遺物なし
2	XII So	2.1×0.8	2.4×0.2	1.3	N52°W	C	〃
3	XII Sp	1.95×1.0	1.4×0.4	0.9	N43°W	A	〃
4	XII Te	2.2×0.8	2.3×0.2	1.0	N67°W	B	〃
5	XII Ti	3.4×0.45	3.5×0.15	1.05	N17°W	D	〃
6	XII Tj	3.7×0.4	4.0×0.25	0.55	N55°E	D	〃
7	XII Tj	2.7×0.45	3.5×0.1	0.9	N72°E	D	〃
8	XII Tm	1.9×0.6	2.15×0.15	1.1	N60°W	C	〃
9	XII Tn	2.5×0.45	2.9×0.1	1.1	N40°W	D	〃
10	XIII Sc-1	1.8×1.1	1.95×0.35	0.9	N47°W	A	遺物出土点不明
11	XIII Sc-2	2.05×1.2	1.3×0.35	1.2	N83°E	A	出土遺物なし
12	XIII Sf	2.7×0.8	2.5×0.3	1.0	N53°W	B	〃
13	XIII Te-1	2.25×0.45	2.4×0.1	0.9	N48°W	D	〃
14	XIII Te-2	2.4×0.55	2.75×0.2	0.65	N 0°W	B	〃

## 2. 遺物

### (1)土器

6区の遺構内外出土の土器は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器である。これらについて、概略を以下に記述する。

#### 縄文土器

縄文土器では、早期・前期・後期・晩期のものが出土している。これらの土器の分類と、比定又は併行する土器型式等についてまとめると、以下のとおりである。

第I群1類の土器（押型文）は、縄文時代早期中葉に位置づけられるもので、一戸町平船Ⅲ遺跡の第I群1類Aに併行するものであろう。

第II群土器については、1類（原体側面江波の渦巻文）は縄文時代前期初頭の花積下層式に2類のうち丸底を呈する羽状縄文土器等は、花積下層式とほぼ併行時期にある長七谷地Ⅲ群土器に比定されよう。3類は大樋町崎山弁天遺跡第II群4類に併行する一群土器で、縄文時代前期初頭に位置づけられるものであろう。

第IV群土器は縄文時代後期の土器であり、3類・4類は宮戸Ⅲb式・新地4式等に比定されるものであろう。

第V群土器は縄文時代晩期の土器で、1類は大洞B式、2類は大洞B-C式、3類は大洞C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>式に比定されるであろう。

#### 弥生土器

第VII群土器は弥生時代土器で、1類は弥生時代初期に位置づけられる谷起島式に比定される。

#### 土師器

遺構外出土のものはなく、全て遺構内出土のものである。器種は甕、坏、鉢である。

甕 ロクロ使用のものはない。推定値も含め、口径は14cm～25cmのもので、21cm前後のものが多い。器面調整は、口縁部の内外はヨコナデ、体部は外面が縦位のヘラナデ、内面が横位のヘラナデ、ハケメが主であるが、一部外面に縦位のヘラケズリ、ハケメが施されるものがある。砂底の底部が3点出土している。

坏 2点の出土で、ロクロ成形のものである。底部は回転糸切り無調整であり、内面には内黒、ヘラミガキ等の処理を施していないものである。

鉢 1点の出土で、ロクロ不使用の輪積み成形のものである。内外面はヘラナデ調整されている。

### 須恵器

遺構内から 環、壺の破片が出土している。環はロクロ成形の底部回転糸切り無調整のものである。

### (2) 土製品

遺構内と遺構外からリング状土製品 3 点、耳杖状土製品 1 点、算盤状土製品 1 点、耳飾り 1 点、中空土偶破片 1 点、種類の不明なものが 1 点出土している。本調査区では装飾的な土製品が多く、半数は遺構内からのものである。リング状土製品はいずれも住居址からの出土のもので、円形で側面は滑車状を呈している。無文と片面だけに二重の円形刺突文を施したものの 2 種類がある。直径は 7.8cm~9.0cm の範疇にあり、高さはいずれも 2cm 前後を測る。耳杖状土製品は小形の滑車状で、片面のみ二重の円形状の沈線文が巡っている。算盤状土製品は中心に小孔があり、側面は花卉状の刻みを施している。耳飾りは中央に 1cm の円孔を有し、点对称の渦巻文が浮彫り風に施文され、焼成も良好で、丹塗りの痕跡が僅かに認められる。中空土偶破片の部位は不詳であるが、沈線と円形刺突を施している。

### (3) 石器

6 区から出土した石器等は別表のとおりで、遺構内から出土したものは 85 点、遺構外から出土したものは 238 点、計 323 点である。遺構内から出土したものは、縄文時代住居址ではその大半は埋土中からではあるが、不定形石器、石鏃、石皿、磨石が多く、出土点数の半分を占める。平安時代住居址からは、XI Qb 住の床面から石皿 1 点だけの出土である。遺構外出土のものでは、不定形石器、磨石が多く、次いで搔削器類、石匙が多い。

これらの石器は、出土した土器同様に各時期のものが含まれるものであろうが、全体の組成をみると、石鏃 6.5%、石匙 7.1%、搔削器類 9.3%、石べら状石器 4.6%、不定形石器 27.9%、石斧 6.2%、磨石 10.2%、敲石 4.6%、凹石 3.1%、石皿 6.8% である。

石器の素材は、他の区と同様に、奥羽山地及び岩手火山とその周辺部を供給地とするものが多い。石質でみると、剥片石器では硬質泥岩、珪質泥岩系のもものが 75% を占め、礫石器では、両輝石安山岩、両輝石安山岩溶岩が 54% を占めている。北上山地古生層のものは、剥片石器 12 点と極く少ないが、礫石器ではその 3割が北上山地のもので、特に石斧、敲石に多く用いられている。特異なものとしては、XII Th-1 住の床面から蜂巣状の石器が、XII Th-2 住の埋土から異形石器が出土している。

表5 石器一覧表(1)

( )は積層数

No	図層番号	石高番号	器種	出土地点	計測値				石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
1	2-4	23-4	石匙	XI Ri 住地土(下)	2.7	1.5	0.4	1.0	珪質緑泥質灰岩	奥羽山地・中新統	
2	#-5	#-5	#	#	(2.0)	1.6	0.3	0.9	硬質砂岩	# #	
3	8-55	26-60	#	XII Th-1 住地土(中-下)	2.2	1.2	0.3	0.5	珪質泥岩	宇石西部 #	
4	#-56	#-61	#	#	2.8	1.5	0.4	1.5	凝灰質硬質泥岩	# #	基部にアスファルト
5	#-57	#-62	#	#	3.1	1.1	0.3	0.8	珪質泥岩	# #	
6	#-58	#-63	#	#	(2.9)	1.2	0.5	1.1	凝灰質砂岩	# #	
7	#-59	#-64	#	#	(2.1)	1.2	0.4	0.8	玉髄	産地不詳	基部にアスファルト
8	#-60	#-65	#	#	2.7	0.9	0.3	0.6	凝灰質珪質泥岩	宇石西部・中新統	
9	10-14	28-105	#	XII Th-2 住地土(中-下)	(2.4)	1.6	0.3	1.0	珪質砂岩	# #	
10	#-25	#-106	#	#	3.2	1.1	0.3	1.0	凝灰質珪質泥岩	# #	基部にアスファルト
11	#-26	#-107	#	#	2.8	1.1	0.6	1.3	凝灰質硬質凝灰岩	宇石西部 #	
12	55-1	43-1	#	XI Ri-器種	2.6	1.7	0.3	0.9	硬質砂岩	宇石西部 #	
13	#-2	#-2	#	XI Qd-B	2.7	1.5	0.2	0.9	粘板岩	北上山地・古生界	
14	#-3	#-3	#	XII R3-器種	2.6	1.4	0.3	1.1	硬質砂岩	奥羽山地・中新統	
15	#-4	#-4	#	XII Tp-II	2.1	1.5	0.4	0.8	硬質砂岩	宇石西部 #	
16	#-5	#-5	#	XII Y-I(Y)	3.1	1.2	0.5	1.2	玉髄	産地不詳	
17	#-6	#-6	#	XII Th-II(Y)	2.3	1.6	0.3	0.5	凝灰質珪質泥岩	宇石西部・中新統	
18	#-7	#-7	#	XII Th-II	3.3	1.6	0.6	2.7	玉髄	産地不詳	
19	#-8	#-8	#	XII Ts-II(Y)	4.1	2.5	0.8	6.2	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
20	#-9	#-9	#	XII Tp-II	2.6	1.8	0.6	2.3	珪質砂岩	# #	
21	#-10	#-10	#	XII Um-II-III	4.0	2.6	0.6	3.9	硬質泥岩	宇石西部 #	挿入部・基部にタール
22	2-2	23-2	石匙	XI Ri 住地土(下)	5.6	3.0	0.5	7.9	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	扇形
23	#-3	23-3	#	#	(3.9)	2.1	0.4	4.3	粘板岩	北上山地・古生界	#
24	8-62	26-67	#	XII Th-1 住地土(下)	4.5	2.1	0.7	4.6	凝灰質珪質泥岩	宇石西部・中新統	#
25	#-67	26-69	#	#	3.3	4.6	1.6	16.5	玉髄	産地不詳	扇形
26	10-27	28-108	石匙	XII Th-2 住地土(中-下)	(2.5)	(4.2)	0.9	7.4	珪質泥岩	宇石西部・中新統	扇形

表6 石器一覧表(2)

( ) 収蔵庫

No.	図録番号	写真番号	群 種	出土 地 点	計 測 値				石 質	産 地	備 考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
27	55-11	43-11	石造	XII Sa-III	5.0	3.0	1.0	12.4	硬質褐色	奥羽山地・中新統	板形
28	5-12	5-12	石	XII S/-組	6.7	3.7	1.0	23.8	石	石	石
29	5-13	5-13	石	XII Sa-III	6.0	2.4	0.9	10.5	チャート質褐色	北上山地・古生界	石
30	5-14	5-14	石	XII Sb-III	5.7	3.6	0.6	9.9	硬質褐色	奥羽山地・中新統	石
31	5-15	5-15	石	XII Sa-III	4.7	2.2	0.5	4.3	硬質細粒硬質	奥羽山地	石
32	5-16	5-16	石	XII Tj-粗磨	4.9	2.8	0.8	11.7	硬質褐色	磐石西部	石
33	5-17	5-17	石	XII Sp-III	5.0	5.1	0.8	12.3	硬質褐色	石	石
34	5-18	5-18	石	XI R-III	2.0	2.4	0.5	2.3	硬質細粒硬質	奥羽山地・中新統	石
35	5-19	5-19	石	XII T-粗磨	3.2	5.7	0.9	13.8	硬質褐色	磐石西部・中新統	板形
36	5-20	5-20	石	XII Yp-II	4.3	7.5	0.8	19.6	硬質細粒硬質	磐石盆地西南域・中新統	石
37	56-21	5-21	石	XII Ue-II(下)	6.3	4.4	0.5	8.2	硬質褐色	磐石西部・中新統	石
38	5-22	5-22	石	XII Tb-II(下)	6.0	5.8	1.1	21.8	硬質細粒硬質	石	石
39	5-23	5-23	石	XII Tb-粗磨	4.2	5.7	1.1	23.7	硬質褐色	石	石
40	5-24	5-24	石	XI Tp-粗磨	3.8	5.3	0.6	13.6	玉髓	産地不詳	石
41	5-25	5-25	石	XII U-粗磨	4.9	2.8	0.8	9.5	石	石	石
42	5-26	5-26	石	XII Tc-II(下)	5.5	8.5	1.5	43.8	硬質褐色	磐石西部・中新統	石
43	5-27	5-27	石	XII S-III	3.0	4.8	0.7	7.5	硬質褐色	奥羽山地	石
44	5-28	5-28	石	XII Tb~/I-粗磨	3.7	6.2	0.8	13.8	硬質褐色	磐石西部	石
45	5-61	20-66	石造	XII Tb-1 生理土(中-下)	3.0	0.6	0.4	0.7	泥状土質細粒硬質	磐石西部	石
46	56-29	43-29	石	XII Yg-II(下)	3.6	0.7	0.7	1.5	玉髓	産地不詳	石
47	5-30	5-30	石	XII Um-II-粗磨	2.9	1.1	0.7	1.6	硬質褐色	磐石西部・中新統	石
48	5-31	5-31	石	XI Pp-II	5.3	2.0	0.7	3.3	硬質褐色	奥羽山地	石
49	5-32	5-32	石	XII Sc-1	4.8	2.2	0.9	5.3	玉髓	産地不詳	石
50	5-33	5-33	石	XIII S-II-III	3.8	3.2	0.9	7.9	硬質細粒硬質	磐石西部・中新統	石
51	56-34	43-34	石	XII Tp-II	2.6	2.1	0.8	2.9	硬質細粒硬質	石	石
52	5-35	5-35	石	XII Tp-粗磨	2.5	2.2	0.8	3.8	硬質褐色	石	石
53	5-36	5-36	石	XII Tc-粗(上)	3.3	2.1	0.9	6.3	石	石	石

表7 石器一覧表(3)

( ) 埋蔵品

No	図版番号	寄託番号	器種	出土地点	計測値				石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
54	36-37	43-37	石錐	X Q-II	3.4	2.5	0.6	5.2	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
55	37-38	44-38	火礫石器	XII Tp-III(中)	5.3	2.2	0.7	9.0	凝灰質珪質泥岩	宇石西部	
56	39-39	39-39	石	XIII S-類錐	3.5	2.7	0.9	7.6	硬質泥岩	宇石西部	
57	39-40	39-40	石	XII Sa-III	2.5	1.7	0.6	1.9	チャート質粘板岩	北上山地・古生界	
58	39-64	26-70	燧石群	XII Th-I(埋蔵土(F))	2.9	2.1	0.9	5.4	硬質泥岩	宇石西部・中新統	直刃状
59	39-65	39-71	石		4.7	3.7	1.2	13.3	凝灰質珪質泥岩	宇石西部	尖頭刀状
60	39-70	39-75	石		2.8	5.2	1.1	13.1	硬質泥岩	宇石西部	曲刃状
61	39-71	39-76	石		2.4	5.5	1.2	17.2	石	宇石西部	曲刃状
62	13-7	29-146	石	XII Tk 埋蔵土(埋)	3.3	2.1	1.0	5.4	粘質泥岩	宇石西部	直刃状
63	37-41	44-41	石	XII Rc-III(F)	4.1	3.2	0.9	11.4	チャート質粘板岩	北上山地・古生界	
64	39-42	39-42	石	XII Yg-II(F)	5.0	4.2	1.1	26.3	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
65	39-43	39-43	石	XII T/-類錐	5.3	2.8	1.1	18.1	粘質泥岩	宇石西部	
66	39-44	39-44	石	XII Um-III	5.8	2.1	0.7	5.8	凝灰質珪質泥岩	宇石西部	
67	39-45	39-45	石	XII Tk-II(F)	5.5	1.8	0.8	7.7	石	宇石西部	
68	39-46	39-46	石		6.4	2.2	0.9	15.7	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	
69	39-47	39-47	石	XII T/-II	5.4	2.1	1.0	11.4	硬質泥岩	宇石西部	
70	39-48	39-48	石	XII T/-II	4.1	5.3	0.6	15.3	凝灰質珪質泥岩	宇石西部	
71	39-49	39-49	石	XII Rd-II-III	4.5	3.0	0.6	6.4	凝灰質硬質泥岩	宇石西部	
72	39-50	39-50	石	X Q-類錐	5.6	6.8	1.0	36.0	粘板岩	北上山地・古生界	横刃状
73	39-51	39-51	石	XII Tp-II	2.9	4.4	1.2	13.7	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
74	39-52	39-52	石	XII T-類錐	4.5	5.6	1.0	18.6	玉髓	産地不詳	
75	39-53	39-53	石	XII Tp-類錐	3.9	5.3	1.4	18.8	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
76	39-54	39-54	石	XII Sk-III(F)	7.2	7.8	1.2	35.6	凝灰質硬質泥岩	奥羽山地・中新統	曲刃状
77	39-55	39-55	石	XII Tp-類錐	4.1	6.2	1.2	28.0	粘質泥岩	宇石西部	
78	39-56	39-56	石	XII Th ~ I-類錐	3.2	4.0	0.9	12.7	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
79	39-57	39-57	石	XII T/-類錐	4.5	3.7	0.9	15.7	粘質泥岩	宇石西部	
80	39-58	39-58	石	XIII Sb-III	6.8	3.7	1.4	28.6	凝灰質硬質泥岩	宇石西部	直刃状

表8 石器一覧表(4)

( ) は現存品

No.	図録番号	写真番号	図 類	出土地点	計 測 値				石 質	産 地	備 考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
81	58-59	44-59	鎌形石器	XII Cn-II-田	7.3	3.9	1.5	33.4	凝灰質燧石片	早石西部・中新統	鎌刃状
82	#-60	#-60	#	XII Th-II	3.8	5.1	1.2	19.8	燧石片	# #	#
83	#-61	#-61	#	XII De-I-割 差	4.1	4.6	1.0	22.3	燧石片	# #	#
84	#-62	#-62	#	XII Se-III	3.3	1.8	0.4	2.2	燧石片	# #	#
85	#-63	#-63	#	XII Th-II(F)	5.8	4.5	1.2	26.0	#	# #	#
86	#-64	#-64	#	XII Ty-割差	0.5	4.4	1.3	26.5	#	# #	#
87	#-65	#-65	#	XII Tp-割差	5.3	3.2	0.9	14.5	燧石片	# #	#
88	59-66	#-66	打バタ状 石	XII Sf-III	6.5	3.6	1.5	37.5	黒炭地燧石片	黒石山地・中新統	
89	#-67	#-67	#	XII Sp-割(F)	7.9	3.7	1.2	35.5	砂岩質ホルンフェルス	北上山地・古生界	
90	#-68	#-68	#	XII Rd-III	7.1	4.4	1.4	43.0	燧石片	黒石山地・中新統	
91	#-69	#-69	#	XII Ro-III	6.6	4.0	1.7	36.7	燧石片燧石片	# #	
92	#-70	#-70	#	XII S-III	5.6	3.1	1.2	23.4	凝灰質燧石片	# #	
93	#-71	#-71	#	XII Rd-III	5.5	3.7	1.8	28.6	砂岩片	北上山地・古生界	
94	#-72	#-72	#	XII Sk-IV	5.5	4.3	1.9	32.3	燧石片	早石西部・中新統	
95	#-73	#-73	#	XII Si-III	5.1	3.8	1.2	25.9	燧石片燧石片	黒石山地	#
96	#-74	#-74	#	XII Sp-III	6.6	3.7	1.7	44.3	凝灰質燧石片	早石西部	#
97	#-75	#-75	#	XII Sa-III	7.0	3.5	1.5	45.8	凝灰質燧石片	黒石山地・中新統	
98	60-76	45-76	#	XII Sp-III(F)	6.8	4.0	1.6	44.7	凝灰質燧石片	早石西部	#
99	#-77	#-77	#	XII Sf-III(F)	7.7	3.7	1.8	46.2	砂岩質ホルンフェルス	北上山地・古生界	
100	#-78	#-78	#	XII Sp-III(F)	11.7	4.4	2.1	95.9	#	# #	
101	60-79	#-79	#	XII Ty-II	7.1	3.9	1.6	37.9	燧石片	早石西部・中新統	
102	#-80	#-80	#	XIII Sc-IV	7.6	3.5	1.6	45.5	#	# #	
103	10-31	28-113	挿入石器	XII Th-2住埋 土(中 下)	2.5	2.9	0.8	6.1	凝灰質燧石片	# #	
104	#-84	#-115	#	#	4.1	3.1	0.6	6.6	#	# #	
105	60-81	45-81	#	XII Tg-II(F)	5.6	3.8	1.0	24.1	燧石片	# #	
106	#-82	#-82	#	XII Ty-割差	4.9	3.3	0.9	12.0	凝灰質燧石片	# #	
107	#-83	#-83	#	XII Th-I-割 差	3.2	4.4	1.0	16.8	凝灰質燧石片	# #	

表9 石器一覧表(5)

( ) は現存品

No.	図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値				石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
108	60-84	45-84	狭入石器	XII T <sub>p</sub> -一穂	4.6	5.1	1.0	18.6	凝灰質燧石	摩石西部・中新統	
109	8-85	8-85	?	XII T/-II	5.9	3.6	1.2	19.8	?	?	
110	8-86	8-86	?	XII T-一穂	1.8	1.5	0.3	0.8	?	?	
111	8-87	8-87	?	XI K <sub>1</sub> -一穂	3.0	2.7	0.5	3.2	凝灰質燧石	摩石西部	?
112	8-88	8-88	?	XI K <sub>1</sub> -一穂	4.7	2.7	0.6	5.8	?	?	
113	61-89	8-89	?	XI Q <sub>6</sub> -一穂	2.5	2.0	0.3	1.6	凝灰燧石	摩石西部	?
114	8-90	8-90	?	XI K <sub>1</sub> -一穂	2.3	3.5	0.3	2.0	凝灰質燧石	?	
115	8-91	26-91	?	XII T/-II	2.2	3.7	0.5	2.7	燧石	?	
116	8-93	8-93	不定形石器	XII T <sub>b</sub> -1 住地 土(中-下)	3.1	1.9	0.9	5.2	凝灰質燧石	?	
117	8-95	8-72	?	?	3.9	3.3	0.9	11.3	燧石	?	
118	8-98	8-73	?	?	4.2	3.8	0.7	11.3	燧石	?	
119	8-99	8-74	?	?	4.4	3.9	0.8	12.0	凝灰質燧石	?	
120	8-72	8-77	?	?	4.7	5.6	1.4	35.6	燧石	?	
121	8-74	8-79	?	?	3.7	5.1	0.9	29.4	燧石	?	
122	8-75	8-80	?	?	3.6	2.9	0.9	5.1	?	?	
123	8-76	8-81	ブレード	?	6.1	5.7	1.6	51.8	燧石	?	
124	10-28	28-109	不定形石器	XII T <sub>b</sub> -2 住地 土(中-下)	1.9	1.8	0.4	1.3	?	?	
125	8-29	28-110	?	?	2.5	3.0	1.0	6.0	燧石	?	
126	10-30	28-111	?	?	3.1	2.3	0.9	6.5	凝灰質燧石	?	
127	8-31	8-132	?	?	3.3	4.3	0.9	11.2	燧石	?	
128	8-33	8-113	?	?	6.1	3.0	1.0	14.1	燧石	?	
129	8-36	8-117	?	?	4.1	6.4	1.4	24.2	凝灰質燧石	?	
130	8-37	8-118	?	?	2.2	2.5	0.8	3.5	玉	産地不詳	
131	8-38	8-119	?	?	3.5	1.2	0.6	1.5	凝灰質燧石	摩石西部・中新統	
132	8-39	8-120	?	?	5.4	1.7	0.7	2.9	凝灰質燧石	?	
133	61-92	45-92	?	XII T <sub>a</sub> -1	7.4	3.8	1.2	30.4	燧石	?	
134	8-93	8-93	?	XII T/-一穂	6.2	3.9	1.8	23.8	凝灰質燧石	?	



表10 石器一覧表(6)

( ) は保存品

No	図版番号	写真番号	材質	出土地点	計 測 値				石 質	産 地	備 考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
135	61-94	45-94	不定形石器	XII Tk-一(上)	5.9	3.0	0.7	8.6	凝灰質硬質泥岩	宇石西部・中新統	
136	#-95	#-95	#	XI Ro-一類	6.2	2.1	0.8	6.9	凝灰質硬質泥岩	# #	
137	#-96	#-96	#	XII Tg-II	5.2	1.5	0.6	4.1	硬質泥岩	# #	
138	#-97	#-97	#	XII Tg-II(F)	5.8	3.7	0.8	19.9	硬質泥岩	# #	
139	#-98	#-98	#	XIII Sh-出	7.7	4.6	1.1	28.2	硬質泥岩	# #	
140	#-99	#-99	#	XII Th-II(F)	6.8	4.4	1.5	24.3	凝灰岩質硬質泥岩	宇石西部	#
141	#-100	#-100	#	XII Tj-II	4.9	3.7	1.9	22.7	#	# #	
142	#-101	#-101	#	XII Tk-II-出	4.5	3.4	0.9	17.7	硬質泥岩	宇石西部	#
143	#-102	#-102	#	XII Tg-h-II (F)	3.5	2.7	1.0	8.3	凝灰質硬質泥岩	# #	
144	#-103	#-103	#	XII Tj-II(C)	4.5	2.9	1.2	11.1	硬質泥岩	# #	
145	#-104	#-104	#	XIII Tj-II	4.4	3.5	1.3	16.8	#	# #	
146	# 105	#-105	#	XII Sa-一類	5.0	2.9	1.0	10.6	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	
147	62-106	#-106	#	XII Rd-一類	3.3	4.0	0.6	7.3	凝灰岩質硬質泥岩	宇石西部	#
148	#-107	#-107	#	XII Th-II(F)	3.9	3.2	0.7	9.9	凝灰質硬質泥岩	宇石西部	#
149	#-108	#-108	#	XI R-一類	4.7	5.5	1.2	18.0	硬質泥岩	# #	
150	#-109	#-109	#	XII Tp-II	4.3	3.3	1.1	13.4	凝灰岩質硬質泥岩	宇石西部	#
151	#-110	#-110	#	XII Tk-出	4.6	3.8	0.9	13.8	凝灰質硬質泥岩	宇石西部・中新統	
152	# 111	#-111	#	XI Rh-II	4.2	4.2	0.9	12.5	#	# #	
153	#-112	#-112	#	XII Rd-一類	4.4	3.4	1.0	11.2	チャート質硬質泥岩	北上山地・古生界	
154	#-113	#-113	#	XII Tp-II	4.3	2.9	1.4	14.5	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
155	#-114	#-114	#	XIII Cd-一類	4.6	2.4	0.8	7.6	#	# #	
156	#-115	#-115	#	XII Tj-一類	6.2	5.5	1.7	37.5	硬質泥岩	# #	
157	#-116	#-116	#	XII Tp-II(中)	7.0	4.4	2.2	58.8	硬質泥岩	# #	
158	#-117	#-117	#	XIII Ue-II(F)	5.8	3.2	1.0	13.3	凝灰質硬質泥岩	# #	
159	#-118	#-118	#	XII Tj-一類	4.2	2.6	1.1	9.6	硬質泥岩	# #	
160	#-119	#-119	#	XII Tg-II	6.2	5.2	1.1	42.5	#	# #	
161	#-120	46-120	#	XI Rn II	6.3	3.7	1.4	27.2	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	

表11 石器一覽表(7)

( ) 以現存

No	図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値				石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
152	62-121	46-121	不定形石器	XII Tp-II	6.4	3.3	1.6	39.5	珉質泥岩	宇石西部・中新統	
153	63-122	#-122	#	XII T-一節	4.7	3.3	2.0	23.9	#	# #	
154	#-123	#-123	#	XII Tm-一節	3.9	3.3	0.9	13.8	硬質泥岩	# #	
155	#-124	#-124	#	XII T-一節	5.1	6.8	1.0	28.2	#	# #	
156	#-125	#-125	#	XI Ra-III	5.7	6.4	1.5	38.3	チャート質砂岩	北上山地・古生帯	
157	#-126	#-126	#	XII T-一節	4.3	5.6	1.3	27.4	硬質泥岩	宇石西部・中新統	
158	#-127	#-127	#	XI Qa-III	4.3	4.9	1.2	21.6	硬質泥岩	奥羽山地・中新統	
159	#-128	#-128	#	XI Ra-III	4.0	4.6	0.7	11.0	凝灰質珉質泥岩	宇石西部 #	
170	#-129	#-129	#	XII Ue-II(下)	4.7	5.2	1.2	22.8	玉髓	産地不詳	
171	#-130	#-130	#	XIII T-一節	4.2	4.1	1.2	19.3	鉄石英	岩手火山周辺・第四系	
172	#-131	#-131	#	XII T(-一節上)	4.2	4.9	1.2	19.5	凝灰質硬質泥岩	宇石西部・中新統	
173	#-132	#-132	#	XII Te-p I	4.3	4.6	1.2	20.3	硬質泥岩	# #	
174	#-133	#-133	#	XII Um-II	4.2	5.5	1.1	29.1	#	# #	
175	64-134	#-134	#	XII Tp-II	4.7	5.7	1.3	25.8	珉質泥岩	# #	
176	64-135	46-135	#	XII Tg-II(下)	5.3	5.3	1.3	30.9	珉質泥岩	宇石西部・中新統	
177	#-136	#-136	#	XII Th-II(下)	3.0	5.4	1.2	15.7	凝灰質硬質泥岩	# #	
178	#-137	#-137	#	XII Tf-一節(中)	3.5	4.0	1.2	13.9	凝灰質硬質泥岩	宇石西部 #	
179	#-138	#-138	#	XII Tp-II~III	2.5	3.9	1.1	9.0	玉髓	産地不詳	
180	#-139	#-139	#	XII Tp-一節	2.9	4.0	0.6	7.7	#	#	
181	#-140	#-140	#	XII Ue-一節	4.4	4.3	0.6	18.7	凝灰質珉質泥岩	宇石西部・中新統	
182	#-141	#-141	#	XI Se-II	4.5	3.4	1.2	32.9	硬質泥岩	# #	
183	#-142	#-142	#	XII Ue~I 節	4.2	3.4	1.1	14.2	珉質泥岩	# #	
184	#-143	#-143	#	XII Um-II~III	3.5	2.7	0.9	8.0	凝灰質硬質泥岩	# #	
185	#-144	#-144	#	XII Ue-II(下)	3.7	2.3	0.9	8.1	凝灰質硬質泥岩	宇石西部 #	
186	#-145	#-145	#	XII Um-II~III	3.4	2.2	0.8	6.8	凝灰質硬質泥岩	宇石西部 #	
187	#-146	#-146	#	XII Sp-IV	4.4	3.0	1.2	14.0	硬質泥岩	# #	
188	#-147	#-147	#	XI Ri-II	2.4	3.3	1.0	8.0	珉質泥岩	# #	

表12 石器一覧表(8)

( ) は現存品

No	図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値			石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)			
189	64-148	46-148	不定形石器	XIII D-II	4.2	3.0	1.0	10.7	硬質泥岩	宇石西郡・中新統
190	6-149	6-149	〃	XII Tp-II	4.9	4.0	1.9	43.6	珪質泥岩	〃 〃
191	6-150	6-150	〃	XI R-粗面	2.4	2.9	0.7	4.4	硬質泥岩	〃 〃
192	6-151	6-151	〃	XII Sc-II	2.4	1.7	1.3	4.9	〃	〃 〃
193	6-152	6-152	〃	XII Tg-II(下)	2.4	2.1	0.7	3.5	凝灰質硬質泥岩	〃 〃
194	6-153	6-153	〃	XII T/-II	2.3	2.6	0.7	5.5	硬質泥岩	〃 〃
195	65-154	6-154	〃	XI R-II	2.4	3.1	0.9	7.1	〃	〃 〃
196	6-155	6-155	〃	XI Qb-II	3.7	2.7	1.0	8.0	硬質泥岩	美羽山地・中新統
197	6-156	6-156	〃	XII Sc-II	2.0	2.6	1.0	4.2	凝灰質硬質泥岩	宇石西郡 〃
198	6-157	6-157	〃	XII Tj-粗面	2.5	1.7	0.4	1.7	硬質泥岩	〃 〃
199	6-158	6-158	〃	XII Th-II	2.9	2.3	1.1	4.3	凝灰質硬質泥岩	〃 〃
200	6-159	6-159	〃	XII T-粗面	2.2	3.1	0.6	4.7	〃	〃 〃
201	6-160	6-160	〃	XII Tg-I	2.5	3.3	0.8	6.2	硬質泥岩	〃 〃
202	6-161	6-161	〃	XI Qb-II	2.8	2.6	0.5	2.8	〃	〃 〃
203	6-162	6-162	〃	XII U-粗面	1.8	1.9	0.4	1.3	珪質泥岩	〃 〃
204	6-163	6-163	〃	XII Ue-粗(上)	3.1	2.5	1.0	6.0	凝灰質硬質泥岩	〃 〃
205	6-164	6-164	〃	XII T/-粗(下)	2.8	2.3	0.4	2.1	硬質泥岩	〃 〃
206	8-73	26-76	石核石器	XII Th-1 位埋 二(中-下)	9.3	8.0	5.3	510	燧石英	岩手火山周辺・第四系
207	65-165	46-165	〃	XII Sk-粗	7.8	6.2	2.4	129	硬質泥岩	美羽山地・中新統
208	6-166	6-166	〃	XI Q-粗面	7.0	6.3	2.9	125	粗面凝灰岩	〃 〃
209	10-35	28-116	異形石器	XII Th-2 位埋 三(中-下)	4.3	3.1	0.8	2.9	凝灰質硬質泥岩	宇石西郡 〃
210	6-35	25-40	磨製石器	XII Th-1 位埋 三(中-下)	(6.3)	3.6	2.7	93	青礫石安山岩	岩手火山周辺・第四系
211	11-40	28-121	〃	XII Th-2 埋土 (中-下)	4.6	2.6	0.7	12.6	磨製珪質ホルンフェルス	北上山地・古生界
212	66-1	47-1	小形磨製石器	XII Tp-II	5.3	2.0	0.7	11.5	淡緑色凝灰質千枚岩	〃 〃
213	6-2	6-2	〃	XII Tp-II	(6.6)	2.1	1.0	19.1	〃	〃 〃
214	6-3	6-3	磨製石器	XII Tg-II	9.4	4.1	2.4	130	淡緑色凝灰岩	〃 〃
215	6-4	6-4	〃	XII Tg-II(下)	9.5	3.6	2.4	123	磨製玄武岩	宇石西郡・中新統

表13 石器一覧表(9)

( ) は現存数

No.	図版番号	写真番号	器 種	出土地点	計 測 値			石 質	産 地	備 考	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
216	66-5	47-5	磨製石斧	XIII Sa-III	(9.8)	4.3	(1.4)	70	粉板岩ホルンフェルス	北上山地・古生界	
217	8-6	8-6	石斧	XIII T-粉板	(3.3)	3.6	1.3	36.2	淡緑色凝灰質千枚岩	# #	
218	8-7	8-7	磨製石斧	XIII Sa-II	(3.5)	(2.7)	1.9	23.9	粉板玄武岩	磐石西部部・中新統	
219	8-8	8-8	#	XII T8-II(F)	(4.2)	(3.7)	2.6	49.2	#	# #	
220	11-41	28-122	打製石斧	XII T8-2 住床土	(6.6)	3.7	2.1	80	粉板岩ホルンフェルス	北上山地・古生界	
221	8-42	8-123	#	#	(9.3)	3.9	2.6	125	閃輝石安山岩	磐手火山周辺・第四系	
222	8-44	8-125	山礫状石斧	#	4.9	4.1	0.9	18.7	淡緑色凝灰質千枚岩	北上山地・古生界	
223	圖版32	29-166	打製石斧	XII T8-2 焼土	(6.6)	(6.7)	4.7	205	粉板岩ホルンフェルス	# #	
224	66-9	47-9	#	XII T8-k-II	16.2	6.0	3.3	490	淡緑色凝灰岩	# #	
225	8-10	8-10	#	XII T1-II-III	(11.7)	5.0	2.8	253	#	# #	
226	8-11	8-11	#	XII T8-II	(6.8)	5.5	2.2	118	#	# #	
227	8-12	8-12	石斧	XII T1-II-III	12.8	5.2	2.9	260	閃輝石安山岩	磐手火山周辺・第四系	
228	8-13	8-13	#	XII T8-i-1 細板	(5.3)	4.8	2.6	92	粉板岩ホルンフェルス	北上山地・古生界	
229	8-14	8-14	打製石斧	XII T8-III(上)	(6.1)	5.1	2.3	125	淡緑色凝灰岩	# #	
230	11-43	28-124	石礫状石斧	XII T8-2 住床土(中-下)	11.3	7.3	1.2	125	粉板玄武岩	磐石西部部・中新統	
231	67-15	47-15	#	XIII Sa-II-III	9.6	5.5	1.3	79	凝灰質千枚岩	北上山地・古生界	
232	8-16	8-16	#	XII T1-粗板	19.1	5.8	1.0	80	#	# #	
233	8-17	8-17	#	XII T8-III	(8.0)	7.3	0.8	85	#	# #	
234	7-41	25-46	磨石	XII T8-1 住床土(中-下)	(11.2)	5.5	4.8	400	閃輝石安山岩	磐手火山周辺・第四系	
235	7-42	25-47	#	XII T8-1 住床土(上)	8.8	(8.2)	3.7	260	淡緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
236	8-43	8-48	#	# 床土	12.2	12.4	7.6	1,105	閃輝石安山岩	磐手火山・第四系	
237	11-46	28-127	#	XII T8-2 住床土	9.1	6.2	6.6	480	閃輝石安山岩	磐手火山周辺・第四系	
238	8-47	8-128	#	#	(5.9)	3.7	3.0	80	#	# #	
239	8-48	8-129	#	#	(4.3)	(2.9)	4.5	60	#	# #	
240	67-20	47-20	#	XII T8-II(F)	10.6	6.7	3.8	378	閃輝石安山岩	真別山地・中新統	
241	8-67	8-21	#	XII T8-III(上)	6.4	(4.9)	3.3	142	#	# #	
242	8-22	8-22	#	XII T8-II(F)	9.4	8.5	3.3	385	#	# #	兼用磨石

表14 石器一覧表 (10)

( ) は現在値

No	図版番号	写真番号	器種	出土地点	計 測 値				石 質	産 地	備 考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
243	67-23	47-23	磨石	XII T- 丸盤	10.3	8.0	7.2	916	角閃黒雲母花崗岩	北上山地・古生界	
244	6-24	6-24	6	XII Tg-1面(上)	5.1	6.2	4.7	240	粘板岩	6 古生界	
245	6-25	6-25	6	XII Tg-1面(上)	8.0	6.0	3.9	548	輝石安山岩	奥羽山地・中新統	
246	68-26	6-26	6	XIII Sa-11-皿	(7.7)	8.2	4.1	365	粗粒玄武岩	磐石西側部 6	
247	6-27	6-27	6	XII Tg-1面盤	8.3	7.1	6.7	763	輝石安山岩	奥羽山地 6	
248	6-28	6-28	6	XII Tg-11	12.4	6.7	3.3	315	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
249	6-29	6-29	6	XII Tg-1面(上)	11.5	5.4	4.5	496	チャート質緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
250	6-30	48-30	6	XII Tg-1面(上)	8.0	6.2	4.2	320	粘板岩キルンブルス	6 6	
251	6-31	6-31	6	XII Tg-1皿	(9.8)	8.4	1.8	240	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
252	6-32	6-32	6	XI Sa-1皿	17.3	6.2	6.8	980	凝灰質砂岩	奥羽山地・中新統	
253	6-33	6-33	6	XII Sa-1皿	(19.5)	7.0	8.3	910	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
254	6-34	6-34	6	XI Sa-1皿	(9.3)	5.5	6.0	413	凝灰質砂岩	奥羽山地・中新統	
255	6-35	6-35	6	XIII Sa-1皿	12.1	5.7	5.5	496	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
256	6-36	6-36	6	XIII Sa-1皿	11.1	5.0	6.8	530	6	6 6	
257	6-37	6-37	6	XIII Sa-11-皿	(8.7)	5.6	6.1	483	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
258	6-38	6-38	6	XIII Sa-1皿	(4.4)	4.7	4.7	92	6	6 6	
259	69-39	6-39	6	XII Sp-1面盤	15.8	8.0	5.2	946	6	6 6	
260	69-40	48-40	6	XI Pb-11	16.2	7.3	4.2	755	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
261	6-41	6-41	6	XIII Sa-11	16.5	7.7	6.5	1,409	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
262	6-42	6-42	6	XI Sa-11(F)	(6.9)	6.3	4.0	276	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
263	6-43	6-43	6	XII Sa-11(F)	(7.0)	3.9	3.8	138	6	6 6	
264	6-44	6-44	6	XII Tm-1面(F)	(5.4)	7.9	5.5	345	6	6 6	
265	6-45	6-45	6	XII Sp-1皿	(10.0)	7.2	4.3	425	6	6 6	
265	6-46	6-46	北川段状 磨石	XII U1-1面盤	11.0	15.3	1.8	340	輝石安山岩	奥羽山地・中新統	
267	7-46	26-51	打製石器	XII Tg-1 片層 土(中-下)	13.6	9.7	3.8	730	閃輝石安山岩	岩手火山周辺・第四系	
268	6-47	6-52	磨石	6	11.7	9.1	7.2	910	6	6 6	
269	6-48	6-53	6	6	(6.8)	11.2	8.7	892	6	6 6	

表15 石器一覧表 (11)

( ) は原産地

No.	区画番号	写真番号	器種	出土地点	計 測 値				石 質	産 地	備 考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
270	11-49	28-130	竪石	XII Th-1 住壇上(中-下)	(8.1)	4.1	(7.0)	285	岡塚石宝山岩	狹手火山周辺・第四系	湯尾磨石
271	11-50	11-131	11	11 灰土	12.0	7.5	3.4	483	11	11 11	
272	11-51	11-132	11	上層 灰土	10.9	6.2	6.3	540	淡緑色スズライト質粘板岩	北上山地・古生界	
273	11-52	11-133	11	11 灰土	7.3	(5.8)	(3.5)	220	岡塚石宝山岩	狹手火山周辺・第四系	
274	13-6	29-147	11	XII Tk 住壇土(4)	4.8	4.4	4.3	98	玉髓	産地不詳	
275	16-2	11-181	11	XIII Sg 住壇土(中)	7.2	4.2	2.6	120	緑閃輝石岩	宇石西尾部・中新統	
276	70-47	48-47	11	XII Tk-II	13.3	3.6	3.3	348	淡緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
277	11-48	11-48	11	XII Tg-II(下)	9.6	7.5	6.9	670	凝砂岩	11 11	
278	11-49	11-49	11	XII Tj-III(下)	3.5	4.8	4.5	190	玉髓	産地不詳	
279	11-50	11-50	11	XII Tj-III(上)	(9.6)	5.7	3.9	290	淡緑色スズライト質粘板岩	北上山地・古生界	
280	11-51	11-51	11	XII R-粘板	(8.5)	6.8	3.8	330	凝砂岩	11 11	
281	11-52	11-52	11	XII Tg-III(上)	14.0	4.6	3.0	313	凝砂岩	11 11	
282	11-53	11-53	11	XII Tj-粘板	5.2	3.6	2.5	72	凝砂岩	11 11	
283	6-36	25-42	凹石	XII Th-1 住壇土(中-下)	10.6	7.7	6.6	900	岡塚石宝山岩	狹手火山周辺・第四系	
284	11-37	11-43	11	11	(10.7)	(5.8)	3.1	220	11	11 11	
285	6-38	25-41	11	11	(8.9)	(5.7)	2.7	135	11	11 11	
286	11-39	11-44	11	11	(6.5)	5.6	2.7	163	11	11 11	
287	7-45	26-50	11	11	9.4	(7.1)	5.1	450	11	11 11	
288	11-45	28-136	11	XII Th-2 住壇土(中-下)	12.1	5.9	3.7	400	11	11 11	
289	67-18	47-18	11	XII Tj-II~III(下)	16.8	10.3	7.0	2,550	11	11 11	
290	11-19	11-23	11	XII Tg-II(下)	12.2	6.0	3.0	350	11	11 11	凝石あり
291	70-54	48-54	11	XII Tj-粘板	11.8	5.6	3.3	240	凝砂岩	宇石西尾部・中新統	
292	11-55	11-35	11	XII T-粘板	15.0	6.6	4.6	650	淡緑色凝灰岩	北上山地・古生界	
293	7-49	26-54	凹石	XII Th-1 住壇土(中-下)	(8.8)	(3.2)	(1.4)	49.3	凝砂岩	11 11	
294	70-56	49-56	凹石	XII Tj-粘板	(13.6)	3.9	2.5	250	凝砂岩	11 11	
295	70-57	11-57	11	XII Tj-III(中)	48.8	3.8	2.5	790	淡緑色凝灰質千枚岩	11 11	
296	6-40	25-45	特殊状石	XII Th-1 住壇土	26.5	20.0	16.8	9,170	岡塚石宝山岩	狹手火山周辺・第四系	

表16 石器一覽表(12)

( ) は標準値

No.	調査番号	写真番号	器種	出土地点	計測値				石質	産地	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
297	7-51	26-56	石皿	XII Th-1 住壇上(中-下)	(17.1)	(16.6)	4.1	1,635	両輝石安山岩薄岩	岩手火山-第四系	
298	#-52	#-58	小形石皿	"	5.3	5.4	2.5	80	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
299	#-53	#-59	石皿	XII Th-1 住壇上(下)	(11.4)	(6.1)	(3.5)	143	両輝石安山岩薄岩	岩手火山-第四系	
300	#-54	#-57	"	XII Th-1 住壇上(中-下)	(10.0)	(9.6)	6.2	530	"	"	
301	12-53	28-134	"	XII Th-2 住壇上(中-下)	(10.4)	(11.7)	4.5	500	"	"	
302	#-54	#-135	"	"	(10.2)	(11.6)	(6.8)	480	"	"	
303	#-55	#-136	"	XII Th-2 住壇上	(17.1)	20.4	9.0	2,860	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
304	#-56	29-137	"	XII Th-2 住壇上(中-下)	(9.3)	9.0	2.5	365	細砂質凝灰岩	宇布西南部-中新統	
305	25-4	31-199	"	XI Qb 住壇上	14.5	9.1	10.0	910	両輝石安山岩	岩手火山-第四系	
306	71-58	49-58	"	XII Se-II	(16.5)	(15.7)	9.5	3,760	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
307	#-59	#-59	"	XIII Sc-I	(20.0)	8.6	2.3	540	"	"	
308	#-60	#-60	"	XIII Rd-III	12.5	10.5	4.1	975	両輝石安山岩	"	
309	#-61	#-61	"	XII Te-II	(10.5)	15.1	5.7	1,960	両輝石安山岩薄岩	岩手火山	
310	71-62	49-62	石皿	XII Tk-II(下)	26.2	19.8	5.5	2,340	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
311	#-63	#-63	"	XII U-I-粗盤	(8.1)	(10.3)	(2.1)	290	"	"	
312	#-64	#-64	"	XIII Sb-II	(22.1)	25.6	11.5	9,420	"	"	
313	#-65	#-65	"	XII Ti-II(下)	(13.8)	15.4	4.2	1,310	"	"	
314	72-66	#-66	"	XIII Sc-III	45.4	21.0	9.5	10,175	"	"	
315	#-67	#-67	"	XII Tk-I(上)	(18.7)	9.1	3.5	1,223	角閃黒雲母花崗岩	北上山地-中生界	
316	#-68	#-68	"	XII Sa	49.9	28.5	7.8	19,000g以上	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
317	#-69	#-69	"	XII Tg-II	(13.0)	15.1	4.7	1,270	"	"	
318	#-70	#-70	"	XI No-I粗	(14.7)	14.2	(5.5)	1,685	両輝石安山岩	"	
319	12-57	29-138	砥石	XII Yl-2 住壇上	(10.6)	(12.5)	8.4	645	両輝石安山岩薄岩	岩手火山-第四系	
320	72-71	49-71	石製品	XII To-粗	2.6	3.7	1.3	6.4	淡褐色凝灰岩	北上山地-古生界	
321	#-72	#-72	磨盤品	XII Um-II-III	2.6	2.2	1.1	6.0	白色輝石凝灰岩	奥羽山地-中新統	
322	7-44	25-49	砥石製品	XII Yl-1 住壇上(中-下)	6.1	4.9	1.6	102	両輝石安山岩	岩手火山周辺-第四系	
323	#-30	26-35	浮石状石製品	"	(4.7)	2.2	1.3	5.6	白色凝結凝灰岩	宇布西南部-中新統	

## 6 区写真図版



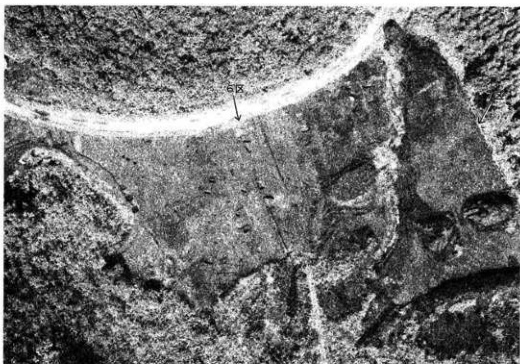


遺跡全景(南東から)



6区全景(南から)

写真図版 1 空中写真

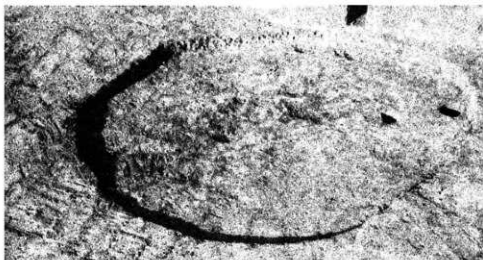


6区東部・7区空中写真(南から)



6区東部・近景(南から)

写真図版2 空中写真・6区近景



Ⅺ Ri 住完掘

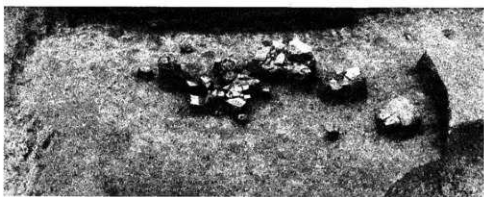


Ⅺ Th-1 住完掘



Ⅺ Th-1 断面

写真图版3 Ⅺ Ri・Ⅺ Th-1 住居址



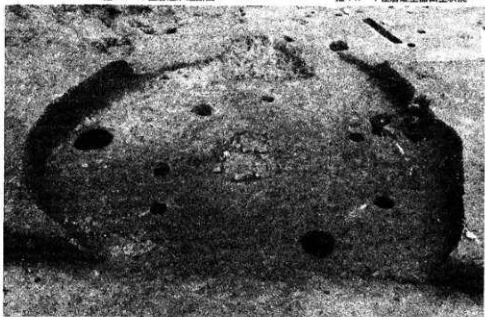
XII Th-1 住居址遺物出土狀況



XII Th-1 住居址炉址断面



XII Th-1 住居址土器出土狀況



XII Th-2 住居址完圖

写真図版 4 XII Th-1・XII Th-2 住居址



断面



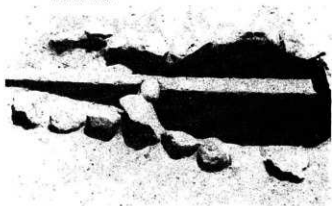
遺物出土状況



遺物出土状況



炉址

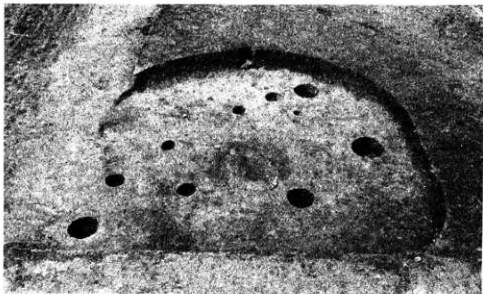


炉址断面

写真図版5 ⅧTh-2住居址



XI S1 住居址炉址断面



XI Tk 住居址完掘

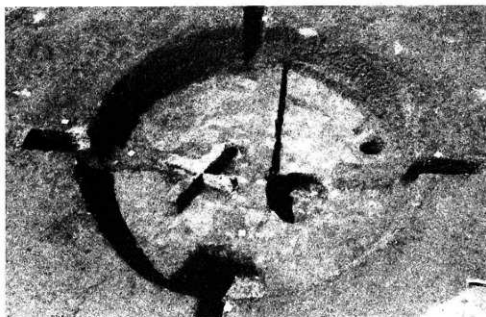


XI Tk 住居址断面

XI Tk 住居址炉址断面



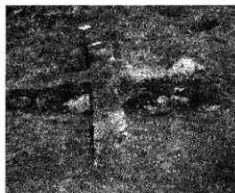
写真图版6 XI S1 · XI Tk 住居址



完備



断面

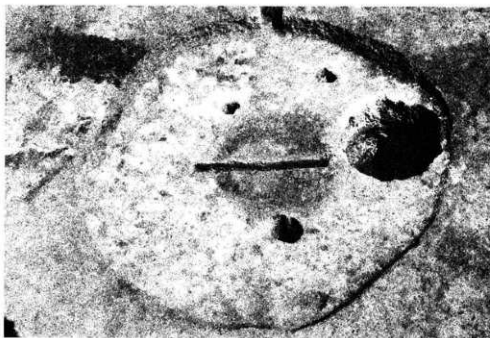


炉址断面

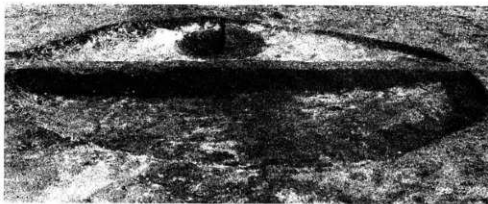


ピット断面

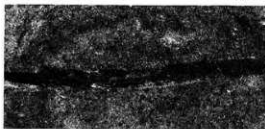
写真図版7 XIII S f 住居址



平面



断面



炉址断面



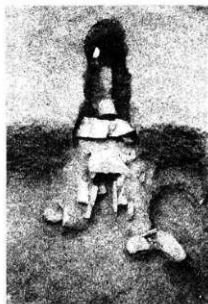
ビット断面

写真図版 8 XIII Sg 住居址





完掘



カマド



断面

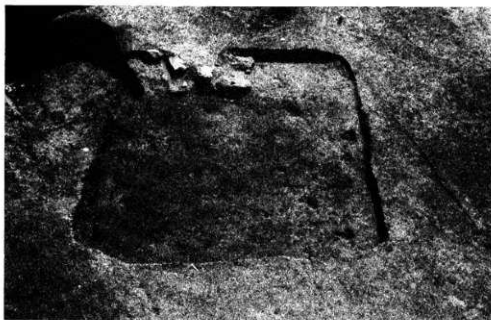


炭化物出土状況



煙道

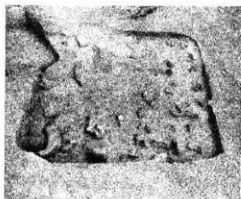
写真図版 9 XPI 住居址



完掘



断面

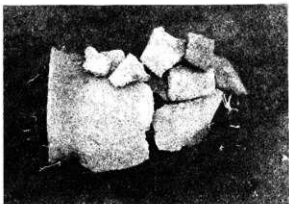


炭化物出土状況



カマド

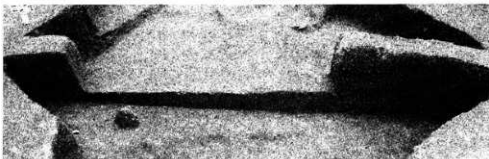
写真図版10 X Qi 住居址



XQ<sub>i</sub>住居址土器出土状況

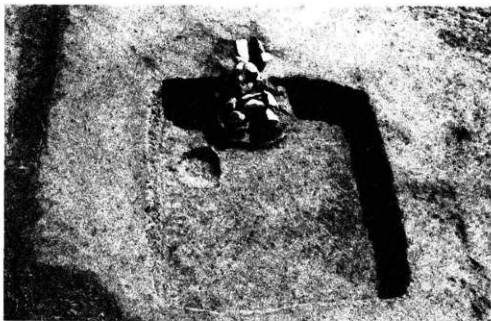


XQ<sub>n</sub>住居址完掘



XQ<sub>n</sub>住居址断面

写真図版11 XQ<sub>i</sub>・XQ<sub>n</sub>住居址



完備



断面



カマド

写真図版12 XI Qb住居址

Ⅻ Tg 豎穴状遺構

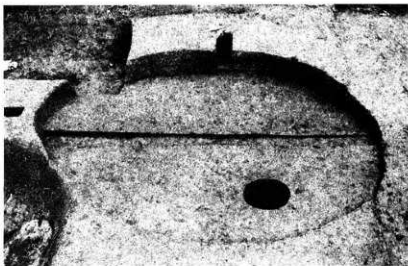


完備



断面

Ⅻ Ue 豎穴状遺構

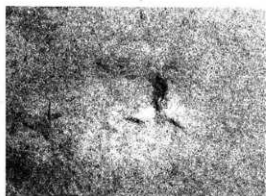


完備

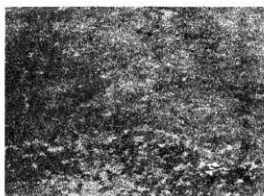


断面

写真図版13 Ⅻ Tg・Ⅻ Ue 豎穴状遺構



Ⅹd Rd 烧土



Ⅹd Tf 烧土



Ⅹd Rd 烧土断面



Ⅹd Tf 烧土断面



Ⅹd Tk-1 烧土



Ⅹd Tk-2 烧土



Ⅹd Tk-1 烧土断面

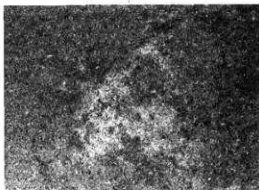


Ⅹd Tk-2 烧土断面

写真图版14 烧土遗構(1)



XIT1-1 烧土



XIT1-2 烧土



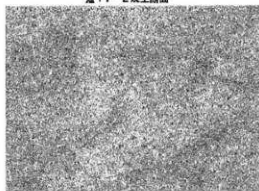
XIT1-1 烧土断面



XIT1-2 烧土断面



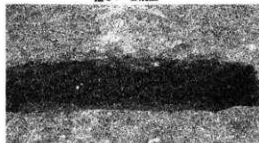
XIT1-3 烧土



XIU1-2 烧土



XIT1-3 烧土断面



XIU1-2 烧土断面

写真图版15 烧土结构(2)



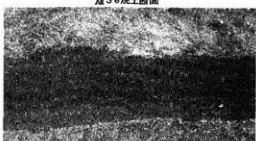
XI Qh 焼土



XI Se 焼土断面



XI Qh 焼土断面



XI Ui-1 焼土断面



XI Qh 区土器出土状況



XI Rn ビット



XI Rn ビット断面

写真図版16 焼土遺構(3)・ビット(1)





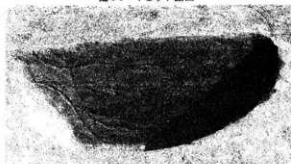
XII Se-1ピット



XII Se-1ピット断面



XII Se-2ピット



XII Se-2ピット断面



XII Se-3ピット



XII Seピット断面

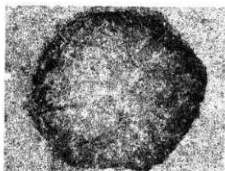


XII Se-4ピット



XII Se-4ピット断面

写真図版17 ピット(2)



XII S j ビット



XII S j ビット断面



XII Sn-1 ビット



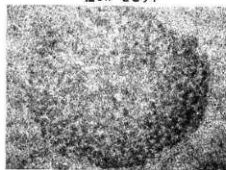
XII Sn-1 ビット断面



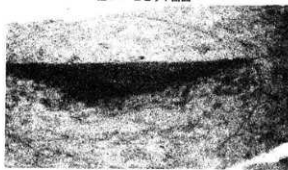
XII Sn-2 ビット



XII Sn-2 ビット断面



XII Sn-3 ビット

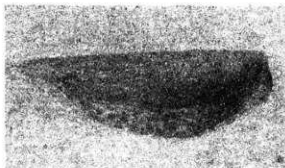


XII Sn-3 ビット断面

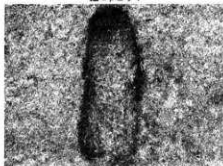
写真図版18 ビット(3)



XIII Spピット



XIII Spピット断面



XIII Scピット



XIII Scピット断面



XIII Sfピット



XIII Sfピット断面



XIII Taピット



XIII Taピット断面

## 写真図版19 ピット(4)



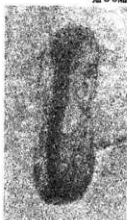
XI Sk 陥し穴状遺構



XI So 陥し穴状遺構



XI Sp 陥し穴状遺構



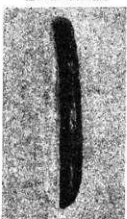
XI Te 陥し穴状遺構



XI Ti 陥し穴状遺構



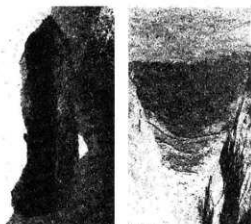
XI Tj 陥し穴状遺構



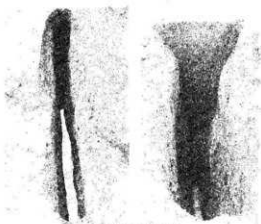
XI Tj 陥し穴状遺構



写真図版20 陥し穴状遺構(1)



XII Tm 陥し穴状遺構



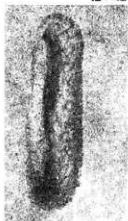
XII Tn 陥し穴状遺構



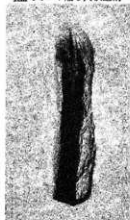
XIII Sc-1 陥し穴状遺構



XIII Sc-2 陥し穴状遺構



XIII Sf 陥し穴状遺構



XIII Te-1 陥し穴状遺構



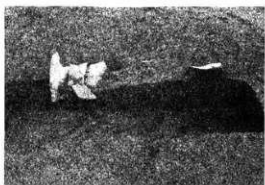
XIII Te-2 陥し穴状遺構



写真図版21 陥し穴状遺構(2)



XITg埋設土器



XIT / 埋設土器



XITp埋設土器

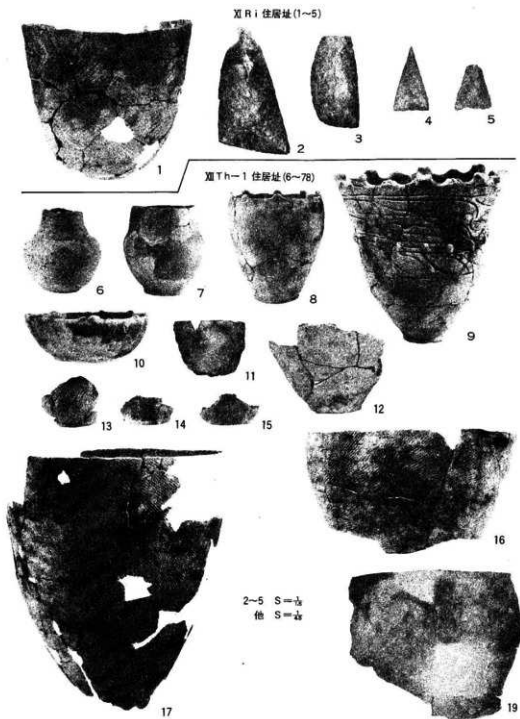


6区近景



6区作葬風景

写真図版22 埋設土器・作業風景



写真图版23 6区遺構内出土遺物(1)

Ⅷ Th-1 住居址 (20~27)



20



21



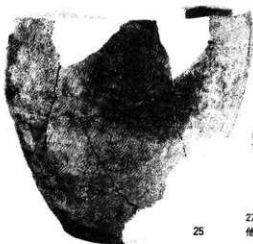
22



23



24



25



26



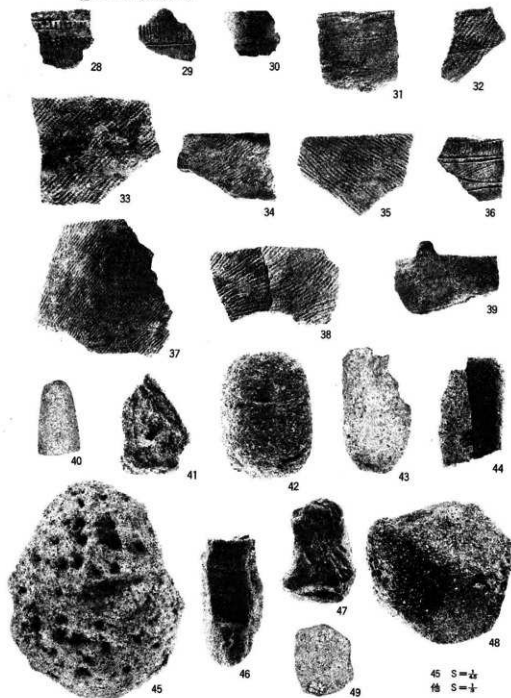
27

27 S=古  
他 S=占

写真図版24 6区遺構内出土遺物(2)

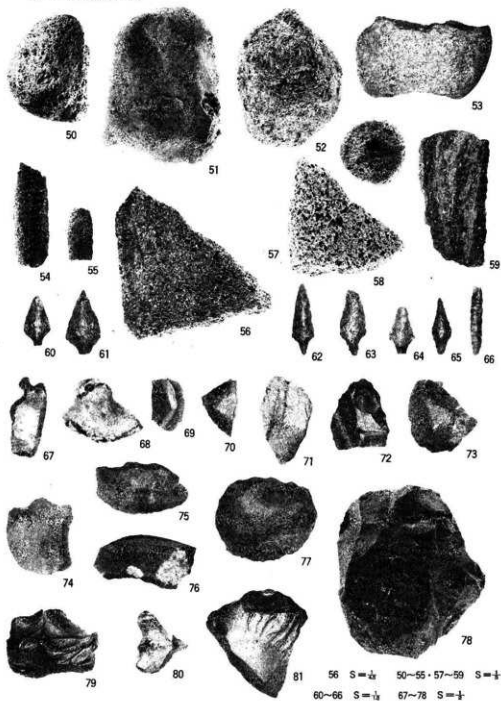


## 遺址 Th-1 住居址 (28~49)

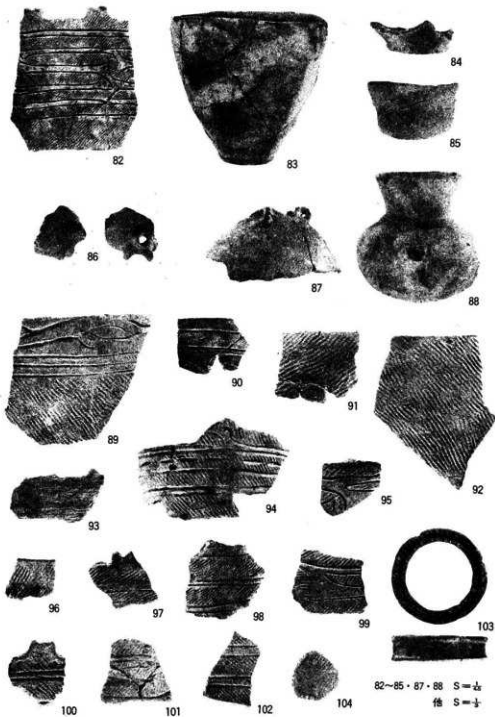


写真図版25 6区遺構内出土遺物(3)

遺Tb-1 住居址(50~81)



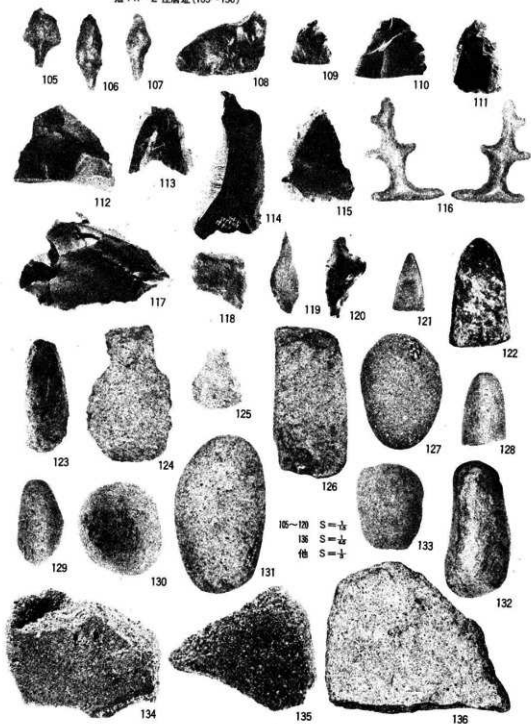
写真図版26 6区遺構内出土遺物(4)



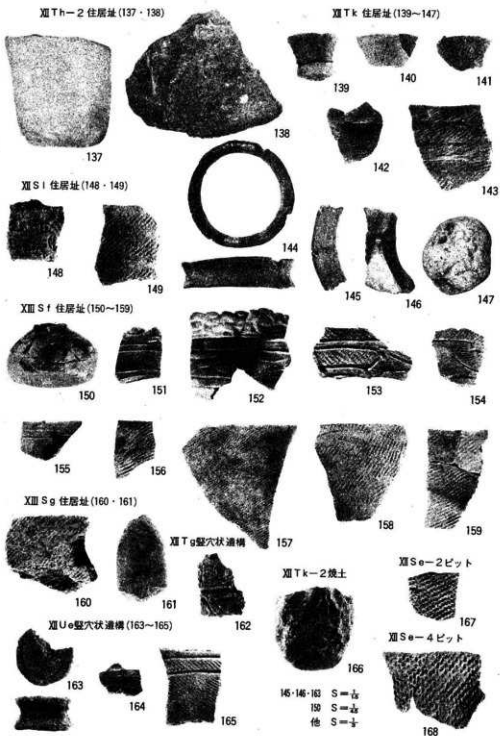
82~85・87・88 S=占  
他 S=寸

写真図版27 6区遺構内出土遺物(5)

双Th-2 住居址(105~136)

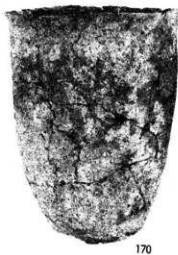


写真图版28 6区遺構内出土遺物(6)



写真図版29 6区遺構内出土遺物(7)

X P I 住居址 (169~173)



X Q i 住居址 (174~180)



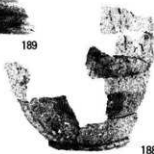
III S=ト 他 S=古



写真図版30 6区遺構内出土遺物(8)

X Qi 住居址 (181~186)

X Qn 住居址 (187~195)

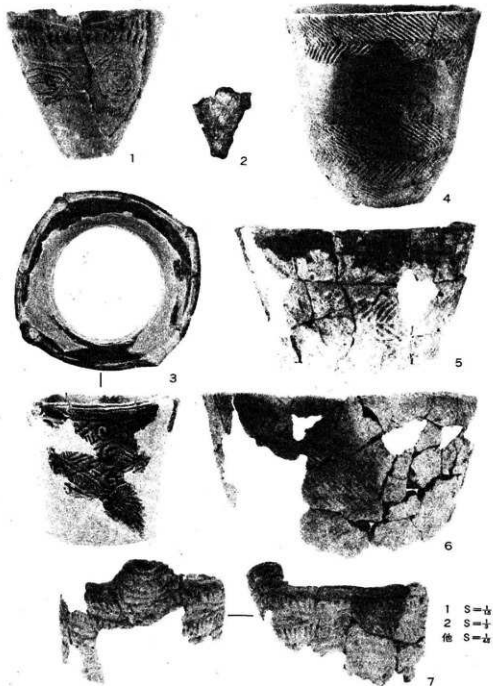


XI Qb 住居址 (196~199)



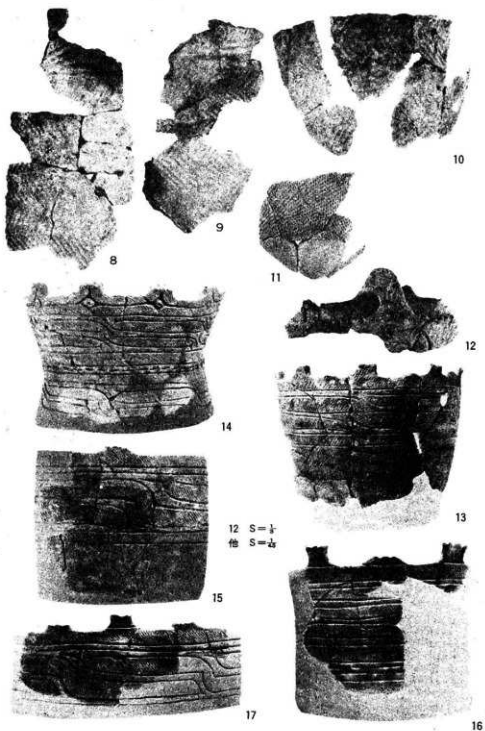
縮尺不定

写真図版31 6区遺構内出土遺物(9)

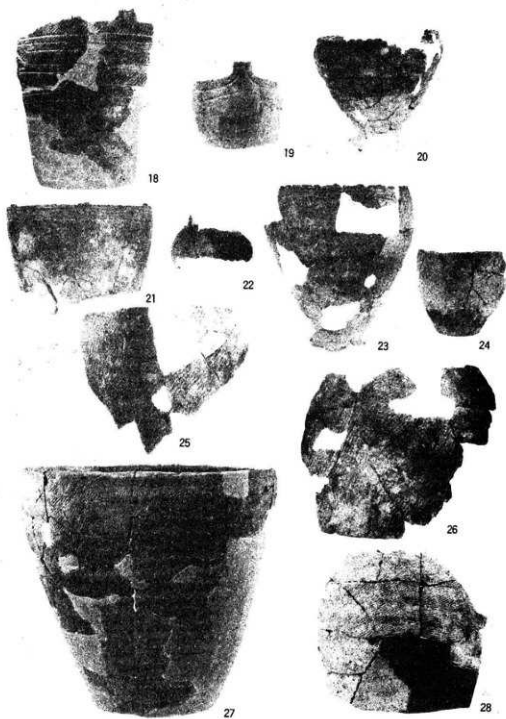


写真图版32 6区遺構外出土遺物(1)





写真図版33 6区遺構外出土遺物(2)



S=☆

写真図版34 6区遺構外出土遺物(3)



29



30



31



32



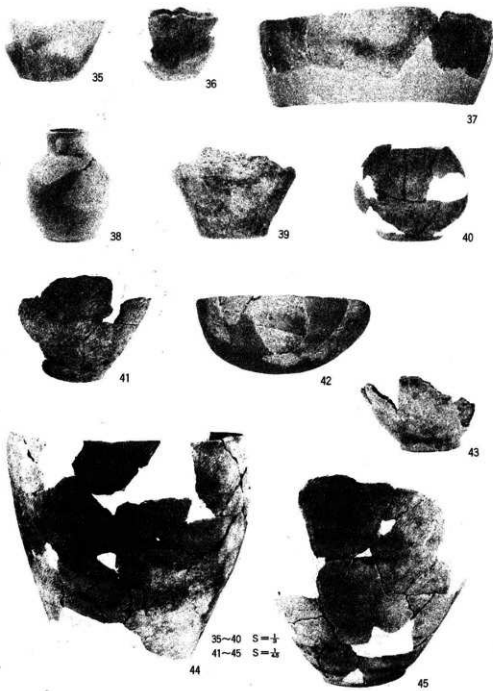
33



34

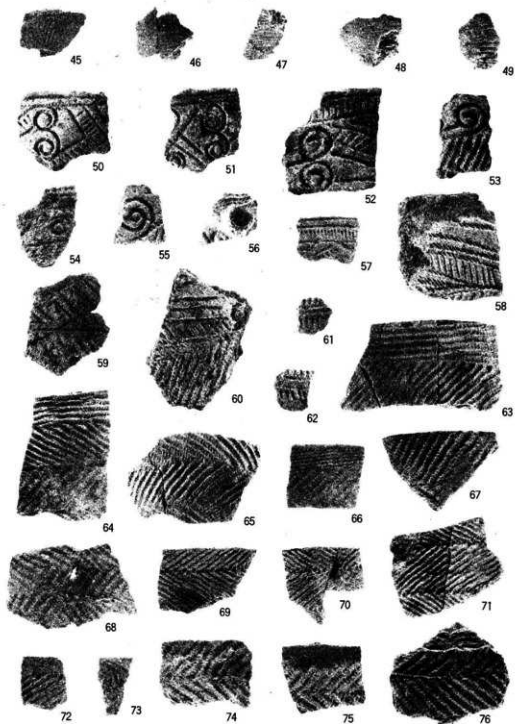
S-4

写真図版35 6区遺構外出土遺物(4)



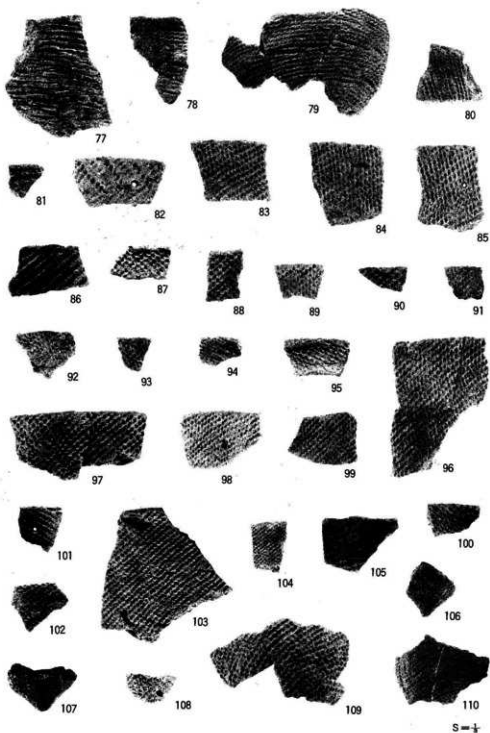
35~40 S=寸  
41~45 S=寸

写真图版36 6区遺構外出土遺物(5)

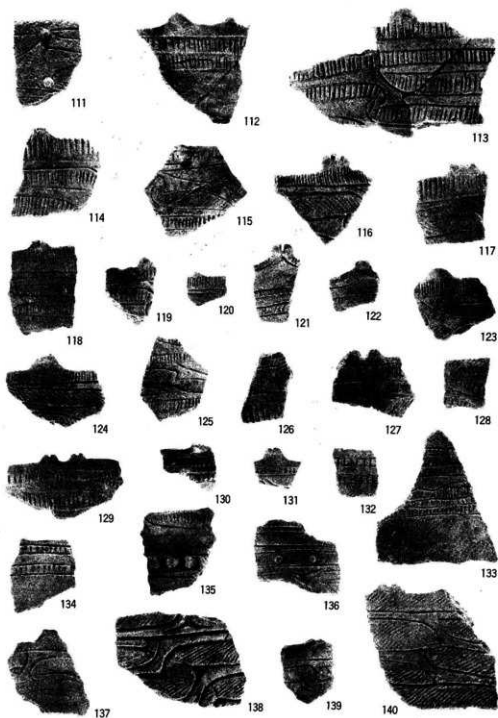


S—1

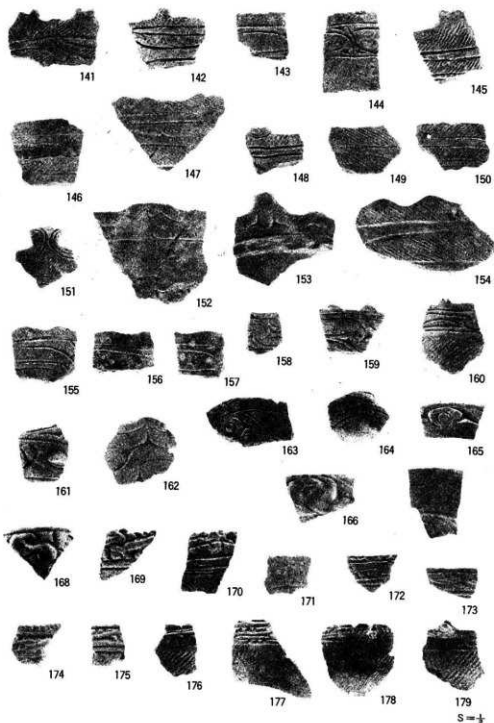
写真图版37 6区遺構外出土遺物(6)



写真图版38 6区遺構外出土遺物(7)

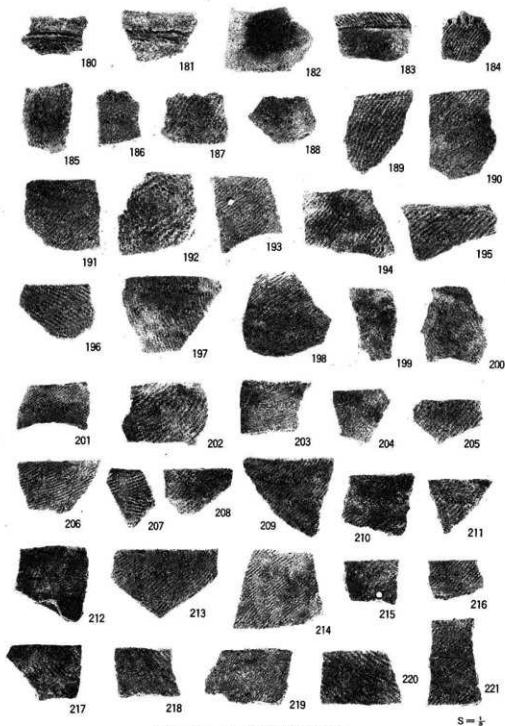


写真图版39 6区遺構外出土遺物(8)

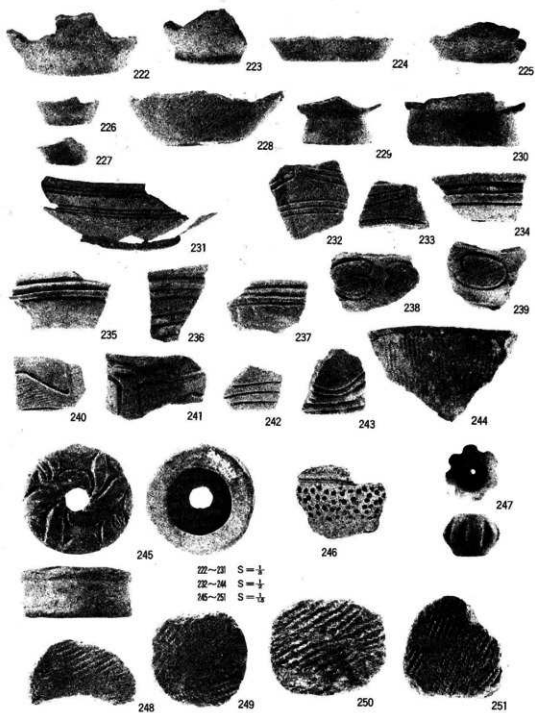


写真图版40 6区遺構外出土遺物(9)

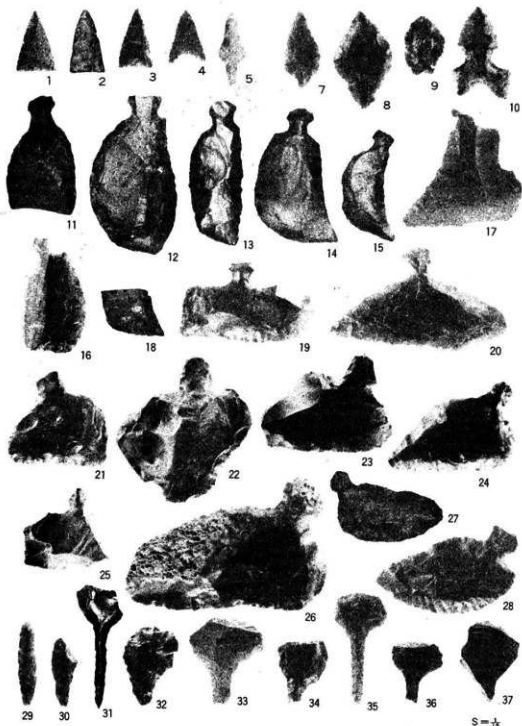




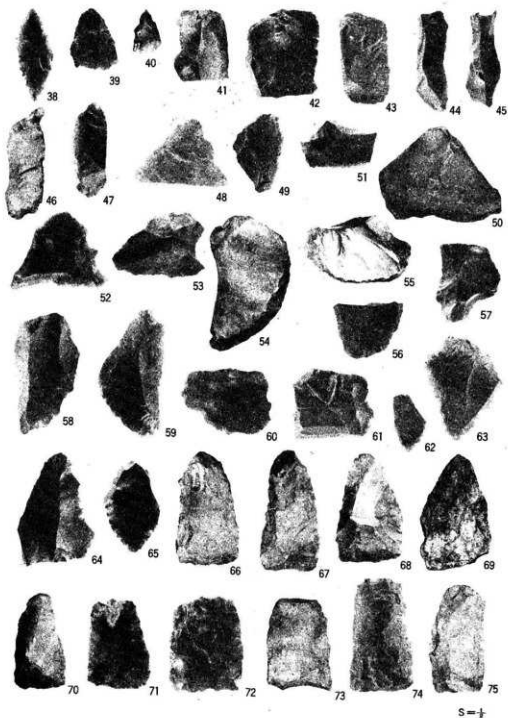
写真图版41 6区遺構外出土遺物(10)



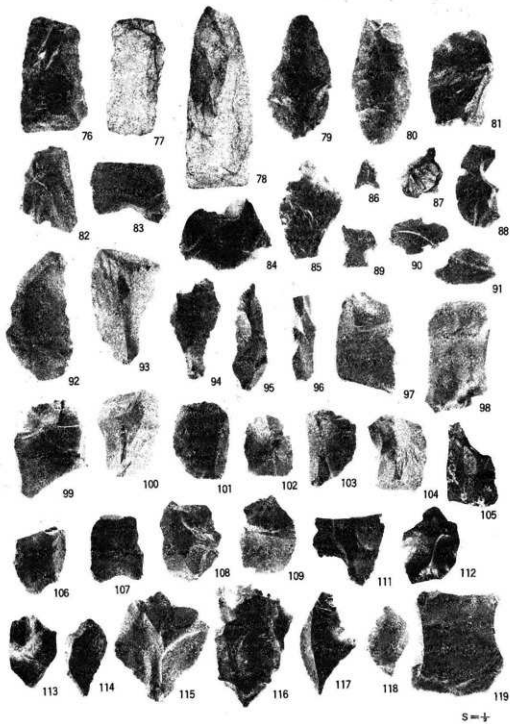
写真图版42 6区遺構外出土遺物(11)



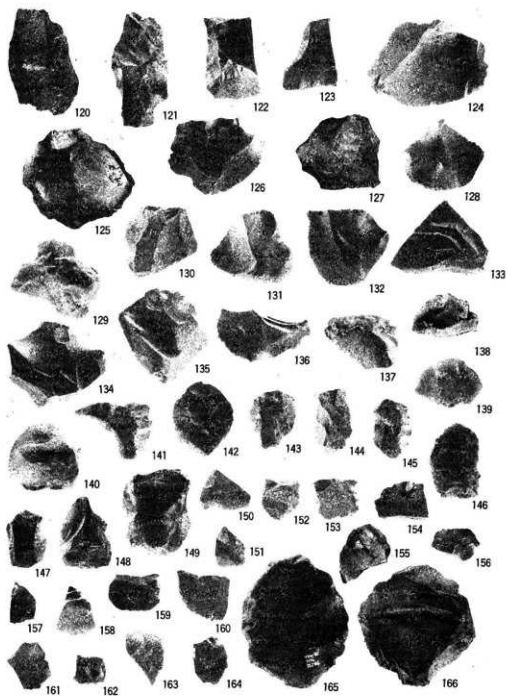
写真图版43 6区遺構外出土遺物(12)



写真图版44 6区遺構外出土遺物(13)

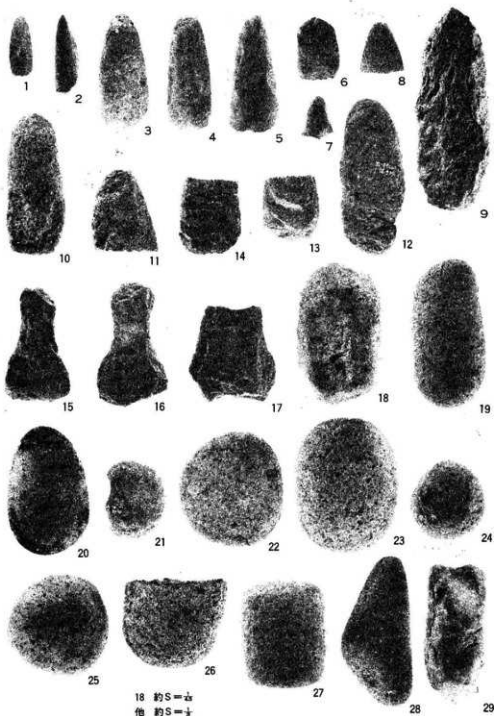


写真图版45 6区遺構外出土遺物(14)

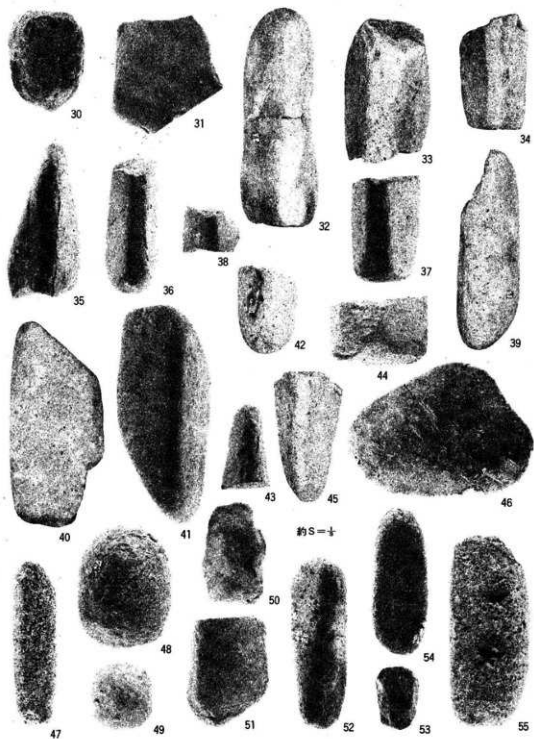


S-1

写真图版46 6区遺構外出土遺物(15)

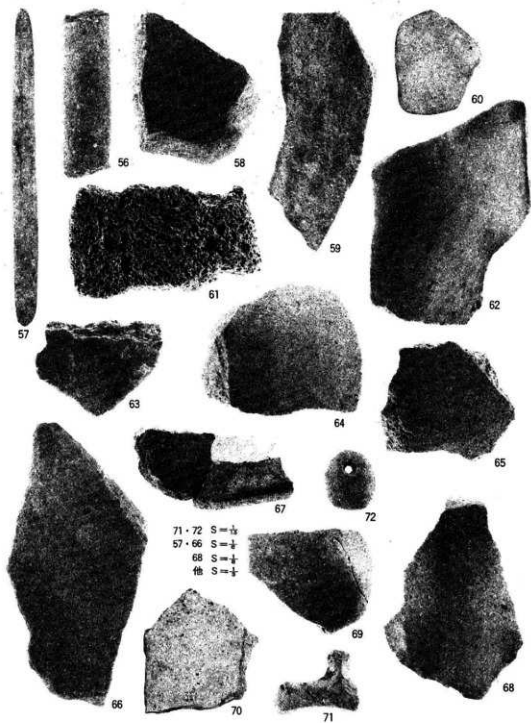


写真図版47 6区遺構外出土遺物(16)



写真图版48 6区遺構外出土遺物(17)





写真図版49 6区遺構外出土遺物(18)

7

区

略号

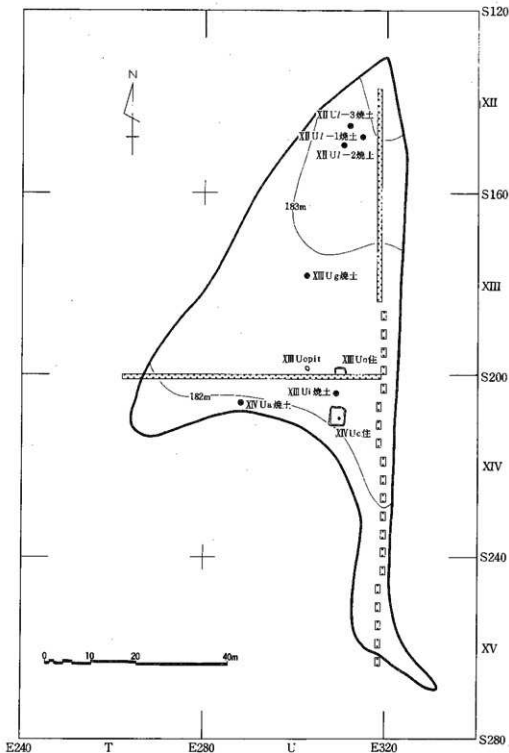
YH 7

調査面積

3.500㎡

調査機関

(財)岩手県埋蔵文化財センター



第1図 7区遺構配置図

## I. 調査区地形概観

本調査区は、湯舟沢遺跡の東端部に位置している。埋没した沢を隔てた西側に6区が、南側は湿地帯に面している。この湿地帯を挟んで、南西方向対岸に9区がある。調査区の載る地形面は、北側に連続する丘陵の裾に形成された低位段丘に相当している。調査面積は3500㎡である。遺構は丘陵寄りの平坦地と、湿地帯寄りの段丘縁辺部に分布している。

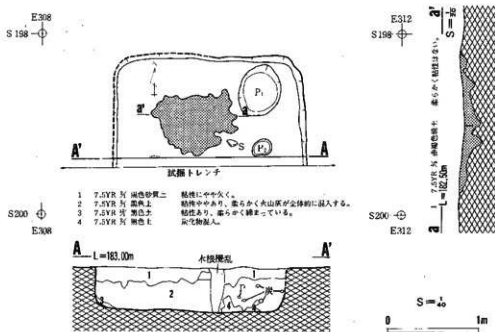
基本土層は、隣接する6区とはほぼ同様である。遺構検出面は、黒色土のI層下位から暗褐色土IV層上位に及んでいる。縁辺部に行くにしたがって、一部I～II層は薄層となっている。

## II. 検出遺物と遺構内出土遺物

### 1. 平安時代竪穴住居址

#### XIII Uo 住居址 (第2図・写真図版1)

**位置** 本住居址はXIII Uc住居址から北へ約8m隔てた7区南側平坦地にある。**検出** II層中位で灰褐色降下火山灰の堆積によって検出された。形態・規模 住居址の南側が試掘トレンチによって損壊を受けているため、全体の平面形及び規模は不明である。残存する北側の平面計測値は東西2.1m×南北1.1mの長方形を呈する。**埋土** 基本的に黒色土・黒褐色土の2層に



大別されるが、炭化物の混入と粘性等の特質から4層に細分できる。

**壁** 東～北壁は約20cmで、ほぼ垂直の立ち上がりを示す。全体にやや締まっている。西側は検出時に掘り下げているため、壁高は数センチを残すだけである。

**床** 平坦な床であるが、締まりなく柔らかい。**柱穴** 柱穴と思われるピット(P<sub>1</sub>)が1基東寄りに配置される。口径25cm×20cmの楕円形で深さ30cmを測る。埋土は灰褐色の火山灰が混入する黒色砂質土で、柱あたりは検出されなかった。**ピット** 北壁際に貯蔵穴と思われるピット(P<sub>1</sub>)がある。平面形は52cm×44cmの楕円形で、断面形は浅鉢状を呈す。深さは約20cmを測る。埋土は灰褐色火山灰が混入する黒色砂質土で遺物は出土していない。**周溝** 検出されていない。

**炉** カマドは検出されず住居中央から西寄りに不整形を呈する焼土があり、地床炉と思われる。98cm×66cmの範囲に広がり、赤褐色焼土の厚さは約10cmに及ぶが焼成は柔らかく締まりはない。床面から火熱を受けた壺の破片が多数出土しているが復元されず、一部破片が、XIV Uc住居址出土の壺と接合している。

本住居址の時期は、平安時代中葉で接合破片から XIV Uc住居址と同時期と考えられる。

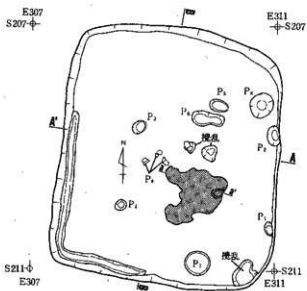
#### XIV Uc住居址(第3図・写真図版1)

**位置** 南側の平坦地に位置する。北約8mにはXIII Uo住居址があり、南側には湿地帯が広がっている。**検出** 最終検出時にIV層の上面で、灰白色細粒浮石(火山灰)の混入する暗色の長方形のプランとして検出された。**形態・規模** 平面形は北東隅に丸味をもつ歪んだ長方形を呈し、規模は南北3.8m×東西3.3mである。**埋土** 灰白色火山灰が多く混入する黒色砂質土の単層でやや締まっている。層厚は中央部で約17cmを測る。**壁** 基本土層のIV～V<sub>1</sub>層中にある。壁高は、北壁20cm・南壁8cm・東壁10cm・西壁12cmを測る。床面からの壁の立ち上がりは70度～80度の角度で外傾している。

**床** V<sub>1</sub>層上面にあって締まっている。全体には平坦であるが、木根による攪乱と水酸化鉄の形成で小さな凹凸が多数ある。**柱穴・小ピット** 計8ヶ検出されている。北東と南側にあるP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の平面形は円形で、断面形は浅皿状のものである。

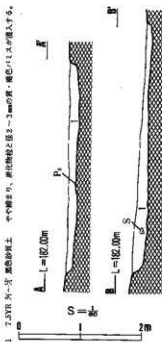
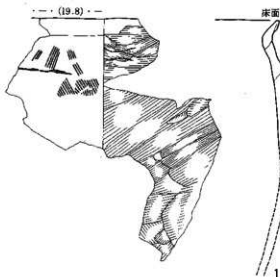
P.No	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
口 径 cm	42×38	42×39	30×21	23×13	18×18	22×17	54×20	31×17
深 さ cm	16	10	30	36	28	30	20	15

主柱穴は、台形状に配置するP<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>の4基と思われる。柱穴の間隔は、南北で1.3m～1.5m、東西で2.2m～2.5mである。P<sub>7</sub>は柱穴状のピットが2ヶ連なる形をしているが、P<sub>8</sub>と共に副柱穴の可能性もある。P<sub>7</sub>とP<sub>8</sub>からは土師器片が出土している。

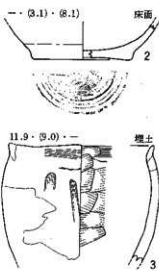


L=187.60m  
S=1.5m

- 1 5 YR 4/6 暗赤褐色土 軟い。
- 2 10 YR 4/6 無褐色土 炭化物粒多く混入する。



1. 7.5YR 4/6 暗赤砂質土 平均粒径2.0mm、炭化物粒と厚2-3mmの層・褐色P11.4が混入する。



土器 S=1.5

第3図 XIV Uc住居址・出土遺物

炉 カマドはなく、やや南北に位置し地床炉がある。焼土は1.0m×0.9mの範囲に広がり、焼土の厚さは4cmを測る。焼成による赤色変化は顕著でなく、締まりなく柔らかい。

#### 出土遺物 (第3図1～3・写真図版4-1～3)

1・2は床面から、3は埋土中から出土している。1は甕の口縁部～体部片であり、全体の器形は不明である。XIII U<sub>o</sub>住居址の床面出土の一部破片がこの甕と接合している。短い口縁部が積み出すように造られ、口縁部の一部に折り返し口縁風な粘土の貼付が見られる。器面調整は、外面が縦位のヘラナデ、内面は横位と斜位のヘラナデである。小礫がわずか含み、焼成は堅緻である。2はロクロ使用の坏の底部片である。底部は回転糸切りの後にヘラ状工具によって、底面の外周に沿って同心円状の調整が施されている。やや高台状を呈している。胎土に細砂を含み焼成が弱く、軟質な感じのする土器である。器厚は5mm、色調は明褐色で内面に黒斑が見られる。3は小形の甕であり、体部は丸味をもち口縁部は積み出しによって短くつくり出され、僅かに外反する。胎土に小礫を含み焼成は良い。

本住居址の時期は、出土遺物から平安時代中葉と考えられる。

## 2. 焼土遺構

7区では、6基の現地性の焼土遺構が検出されている。

#### XII U<sub>l</sub>-1 焼土 (第4図・写真図版2)

北端の平坦地に位置している。至近には XII U<sub>l</sub>-2 と XII U<sub>l</sub>-3 焼土遺構があり、I層下位で検出されている。長さ50cmと40cmの2本の炭化材が北西側にあり、焼土の広がり50cm×45cmの不整形を呈している。焼土の形成は厚さ約7cmに及ぶが、焼成が悪く暗赤褐色で柔らかい。炭化材はナラの老木と鑑定されている。

#### 遺物 (第5図1・2・写真図版4-5)

2は焼土周辺から破片として出土したもので、口縁部～体部下半の1/2が復元された甕である。体部は直線的に外傾し立ち上がり体部上半に最大径をもつもので、頸部が窄み口縁が軽く外反する。口唇部は棒状工具で押圧され小波状口縁を呈している。地文には単節斜縄文(LR)が施文され縄文施文後にヘラ状工具で横位、斜位の粗い調整がなされている。胎土に小礫が多く混入し、焼成は堅緻であるが全体的には粗雑な感じのする土器である。外面には煤が多く付着している。第5図1の甕は、本遺構及び XII U<sub>l</sub>-3 焼土から破片として出土したものが、接合されたもので、地文に燃糸文が施文されている。外面には煤が付着している。

本遺構の所属する時期は、出土遺物から弥生時代に位置づけられると考えられる。





XII U<sub>l</sub>-2 焼土 (第4図・写真図版2)

北端の平坦地に位置し、東側には XII U<sub>l</sub>-1 焼土遺構がある。XII U<sub>l</sub>-1 焼土遺構同様、I 層下位で検出されている。焼土の広がりには約43cm×40cmの方形状を呈し、焼土の形成は約11cmに及ぶ。焼成は良く堅く締まっている。

## 遺物 (第5図3～5・写真図版4-6～8)

3～5は同一個体と思われる甕の破片である。地文に燃糸文が施文され、その後には横位の平行沈線が数本施され、平行沈線間には斜めの刻みが付加され鋸歯状の文様が描かれる。外面はナデ調整されるが、内面調整は粗い。胎土に粗砂が多く混入し、焼成は堅緻である。器厚は約7mmで、色調は暗褐色～黒褐色を呈している。外面に煤が付着している。

本遺構の所屬する時期は、出土遺物から弥生時代に位置づけられると考えられる。

XII U<sub>l</sub>-3 焼土 (第4図・写真図版2)

北端の平坦地にあり、南側には XII U<sub>l</sub>-1・1-2 焼土遺構がある。I 層の下位で検出されている。焼土及び焼土粒が、約67cm×51cmの範囲に不整形な広がりを呈している。木根等による擾乱があり、焼土の形成は最大7cmに及ぶが、厚さは一定しない。焼成は良く堅く締まっている。

## 遺物 (第5図1・写真図版4-4)

本遺構及び南側の XII U<sub>l</sub>-1 焼土遺構から破片として出土した甕である。体部は内湾し立ち上がり、肩部がやや張り出し口頸部は体部から強く屈曲し、口縁部が外傾する器形である。体部及び口唇部に、燃糸文が施文されその後には口唇部はヘラ状工具によって調整が加えられている。内面は粗い横ナデ調整される。胎土に砂粒が多く混入し、焼成は堅緻で器厚は6mm～7mmである。色調は暗褐色～橙褐色を呈している。外面に煤が付着する。

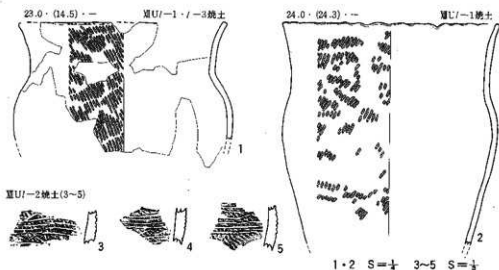
本遺構の所屬する時期は、出土遺物から弥生時代に位置づけられると考えられる。

XIII U<sub>g</sub> 焼土 (第4区・写真図版2)

調査区のほぼ中央に位置し、III層の上～中位で検出されている。焼土の広がりには約65cm×45cmの不整形を呈している。焼土の形成は約4cmに及ぶが、焼成は悪く極暗褐色で、全体的に脆い。遺物は出土していない。

XIV U<sub>a</sub> 焼土 (第4図・写真図版3)

湿地帯に面する南側の平坦地に位置し、III層上位で検出されている。焼土の広がりには約38cm×20cmの不整形を呈しており、焼土の形成は最大6cmに及ぶ。色調は赤褐色を呈しているが全体的に柔らかく締まりはない。遺物は出土していない。



第5図 焼土遺構出土遺物

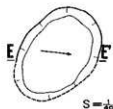
#### XIV Uc 焼土 (第4図・写真図版3)

南側平地の、XIII Uo 住居址と XIV Uc 住居址のほぼ中間に位置している。III層上位で検出されている。焼土は径約106cm×65cmと径30cm×15cmの不整形を呈する2カ所に広がる。木根等による攪乱を受けており、焼上はブロック状に散在する。焼成は悪く、柔らかく締まりはない。遺物は出土していない。

### 3. ビット

#### XIII Uo ビット (第6図・写真図版3)

XIII Uo 住居址から西へ約7m隔てた平地に位置する。III層黒色土中で、径10数cmの角礫が多量に伴出したことにより検出されている。検出時に東側の一部を削平したが、底部や壁等から北西～南東方向に長軸をもつ楕円形と思われる。断面形は、壁面が約100度外傾する逆台形を呈している。平面規模は開口部1.1m×0.8m・底部0.9m×0.6mで、深さは検出面から最大で37cmを測る。埋土は基本的に3層で、上位は微量の炭化物和浮石が混入する黒色土であり、下位は浮石が混入する暗褐色土と黒褐色土で構成される。埋土中位から底部にかけて、大きいものは径20cm小さいもので径4cm前後の角礫が計306個出土



第6図 XIII Uo ビット

している。確以外の遺物は出土しておらず、本遺構の所属する時期は不明である。

### III. 遺構外出土遺物

7区の遺構外からの出土遺物は土器と石器で、9区と同様にその出土量は少ない。土器は、縄文時代早期・前期・後期及び奈良平安時代の土師器であり、器形が分る程度に復元できたものは3点で、他は破片である。土器の総量はダンボール箱で約1箱である。石器は剥片石器7点、礫石器17点の計24点である。

#### 1. 土器

出土した土器の分類は他の区と同様であり、それぞれの特徴によってさらに細分した。7区出土のものは下記の6群に該当する。

第I群（縄文時代早期）、第II群（縄文時代前期）、第IV群（縄文時代後期）、  
第VI群（時期の識別しかねる縄文土器）、第VII群（弥生土器）、第VIII群（土師器）

#### 第I群土器（第8図12～38・写真図版5-20～37、6-38～46）

本群は縄文早期の土器である。個体数で15～16個分の土器で、総数50点ほど出土している。その多くは南西に張り出した低位の地域（XIII T～XIV T区）のIII層下位から出土している。文様、施文方法等から5類に細分した。

##### 1類（第8図12・13・写真図版5-20・21）

本類は貝殻腹縁任痕文が施文されるものであり、2点の出土である。貝殻腹縁任痕文は横位に施文され、12には口唇部に刻目文、口縁部に先端の尖った棒状工具による連続刺突文が施される。共に焼成は堅緻であり、胎土には細砂を含む。器厚は7mm～8mmで、色調は暗灰色(12)暗褐色(13)を呈している。

##### 2類（第8図14～27・35・36・写真図版5-22～35、6-43・44）

条痕文が施文されるものを本類とした。I群土器の中では最も出土点数の多いものである。19以外は横位の貝殻条痕文が施文される。口唇部に刻目文をもつもの(14・16・18・22)、爪形文をもつもの(14・35)、連続刺突文をもつもの(16・17)がある。

14・15は同一個体と思われるもので、14には口縁に平行する爪形文が2段施文され、外削りされた口唇部には連続刻目文をもつ。16・17は口縁部がやや薄手となり、頭部から体部にかけて肥厚しているもので、体部上半が僅か湾曲を呈するものである。口縁に平行する横位の連続刺突文が2段に亘り施文されている。19は16・17と類似した器形を呈しているもので、横・縦・斜の条痕が施文されている。

35・36は同一個体のものであろう。35には縦位に爪形文が施文される。器厚は6mm～9mmで、

20・35・36には小礫が、19には粗砂が多く混入しているが他のものは精選された粘土が用いられている。19・22が暗褐色～赤褐色で焼成が悪いが、他は焼成が良く堅緻である。

3類 (第8図28～31・写真図版5-36・37、6-38・39)

貝殻腹縁押し引き文が施文されるものである。28・29は同一個体のものであろう。胎土は精選された粘土に細砂が混入され、焼成は堅緻である。器厚は約6mm、色調は表面が暗褐色、内面は黒色を呈している。

30・31は器表に粘土隆帯を貼付け、結条体丘底文が施文される。体部には貝殻腹縁押し引き文が横位・斜位に施文される。隆帯の一侧縁の体部には、ヘラ状工具によって鋸歯状の文様が付加される。

4類 (第8図32～34・写真図版6-40～42)

本類は縄文が施文されるものとした。32・33は捺糸文が施文され、32には捺糸文施文後に細い沈線が数条、縦及び斜めに施される。口唇部に刻みをもっている。33は尖底土器の底部近くの破片であり、横位に捺糸文が施文されている。32・33は胎土・焼成も酷似しており、同一個体のものであろう。小礫が僅か混入している。焼成は堅緻で色調は暗灰色(32)、暗褐色(33)をしている。器厚は32が6mm～7mm、33は8mm～13mmである。

34は横走縄文(LR)が施文されるもので、焼成は良く堅緻で器厚は6mm～7mmあり、色調は表面が黄褐色、内面は黒褐色を呈している。

5類 (第8図37・38・写真図版6-45・46)

本類は無文の尖底部であり、1類又は2類に属するものの底部片であらうか。底部片からは砲弾状の尖底を有する土器と推測される。37は内外面が丁寧にナデ調整されるが、38は内面が剥落してザラザラする。胎土に小礫が僅か混入し、焼成はあまり良好ではない。

第II群土器 (第9図39～41・写真図版6-47～49)

本類は縄文時代前期に属する土器である。39・40は一段撚りの紐を用いた捺糸文で、39は斜位に、40は縦位に施文される。39には口縁部に結条体丘底文が鋸歯状に施文され、口唇部にも同じ丘底文が施されている。胎土には植物繊維、小礫、石英砂が多く混入している。器厚は7mm～9mmであり、焼成は悪く脆い感じのする土器である。41は捺糸状の縄文LRが縦位に施文される土器で、胎土に繊維と石英砂が多く混入しており、器厚は12mm～13mmと厚手である。焼成は良好で色調は明褐色を呈している。

第IV群土器（第7図1・2・4、第9図42～46・写真図版4・9・10、5-12、6-50～54）  
器形がわかる程度に復元できたもの2点（7図1・2）で、他は破片である。文様等の特徴により1～3類に分類した。

1類 沈線文をもつもの（第7図1・2・4、第9図42～46）

鉢、深鉢、壺の器種があり、沈線文は多くが2条平行沈線により横位・斜位又は曲線状に施されている。沈線の文様構成によりA～Cの3種に細分した。

A 楕円又は渦巻状沈線文をもつもの（1・2）1は口縁部上端側面に粘土貼付の小突起をもつ鉢形土器で、体部はほぼ直線的に外傾し立ち上がり、頸部が窄み口縁部は僅かに外反する。

2は胴部に比べ底部が大きく安定感のある壺形土器で、口頸部は緩く内傾し立ち上がり内窄まりとなる。1・2文様構成が類似し、横位沈線によって区画された横位文様帯が、1は体部上半に、2は器面のほぼ全面に三段に互り展開する。区画された文様帯には、さらに2～3条の沈線によって三角形に小区画され、その中央部に楕円又は渦巻状沈線文が施文される。

1の体部上半及び口縁上端の小突起に竹管刺突文が加飾され、口頸部文様帯には突起部から派生するように横位、縦位の平行沈線が施されている。

1は地文として無節斜縄文（Lr縦回転）が施文される。2は地文がなく、外面に比べ内面の調整が丁寧である。1・2は胎土に砂粒が多く、1は器面の剥落が激しい。焼成は良好であり、器厚は5mm位である。

B 平行沈線文、平行沈線文+曲線沈線文をもつもの（4・42～45）4は口縁部が「く」の字状に外反する深鉢形土器である。頸部に半円状の沈線文が連続施文され、さらにこの沈線文を連結する横位の沈線が上・下に加飾される。地文は無節斜縄文（Lr横・縦回転）で、粗砂が多く焼成は悪い。42・43は鉢形土器の口縁部片で、42は波状口縁を呈す。口縁に平行する粘土隆帯及び沈線文を有するもので、42には波状口縁頂部の下位にボタン状の貼付をもつ。地文は単節斜縄文（42はRL、43はLR横回転）である。

44・45は同一個体の深鉢形土器の破片である。体部は内湾し立ち上がり、頸部でしまり口縁部が僅かに外反する器形である。頸部に2条の横位平行沈線が、体部には横位・斜位の平行沈線及び楕円沈線文が施文され、楕円文には刺突が施されている。地文は単節縄文（RL横、縦回転）で、胎土に粗砂多く、焼成の悪い土器である。器厚は6mm位である。

C 磨消し縄文をもつもの（46）

46は壺形土器と思われるものの破片である。沈線で区画された磨消し縄文をもつ。地文には単節斜縄文（RL横回転）が施されている。焼成は良く、器厚は7mm位である。

## 2類 粘土貼付瘤をもつもの (47~49)

47は鉢形土器、48は浅鉢形土器の口縁部片である。47は口縁部が無文帯となり、頸部~体部に数条の平行沈線が廻り帯縄文を構成する。体部に2個一對の縦形の貼付瘤をもち、その上部に刻目が施されている。頸部沈線上に粘土貼付の小瘤をもつ。地文は単節縄文(LR横回転)が、沈線施文及び瘤貼付後に施される。48・49は口唇部と体部に貼付瘤をもつもので、口縁に平行する太い2条の沈線が巡る無文の土器である。47は内面調整され焼成が良い。

## 3類 山形口縁を呈するもの (50~54)

A 連続刻目文をもつもの (50~53) 深鉢形土器の破片で、山形口縁突起部に数個の刻目をもつもの (50)、突起頂部に1個の刻目をもつもの (51)がある。文様は口縁無文帯に横位連続刻目文を2~3段に互り施文し、その後刻目文の上・下端に平行沈線を施すものである。51は粗砂多く焼成悪いが、他は焼成良好である。

B 平行沈線のみ施文されるもの (54) 大小の台形状山形突起を対にもつ深鉢形土器の口縁部片である。大きい突起の上端に2ヶの押圧刻目をもち、口縁部には横位平行沈線が施され、その後地文として単節斜縄文(LR横回転)が施文されている。

## 第VI群土器 (第7図3・5、第9図55~67・写真図版6-63、7-64~75)

第7図5は無文の台付浅鉢であり、他は粗製の鉢又は深鉢形土器である。5の器面調整は、外面がやや丁寧に磨かれているのに比較し、内面の調整は粗雑である。焼成は悪い。法量は、口径12.6cm・器高6.5cm・底径5.3cmである。粗製土器の口縁部片について、口縁部の形状・口唇部・地文などを観察すると、口縁がわずかに屈曲を呈するもの(55)、内湾するもの(56・57)、口縁部上端を短く摘み出し外反させるもの(59・60)などがあり、61は口唇部が外削りされ、65・67は口唇部が肥厚するものである。地文は、多くが単節縄文(66がRL横、64はLR斜、他はLR横回転)である。56・67は、無節斜縄文に見えるが、粘土がやわらかいうちに施文され、節がつぶれかけたものであろう。器厚は、64が5mm~6mm、67は10mm~12mm、他は7mm~9mmである。

## 第VII群土器 (第9図68・69・写真図版7-76・77)

### 1類 変形工字文が施文されるもの (68)

台付鉢形土器と思われるものの体部片である。沈線によって、変形工字文が施文される。変形工字文によって区画された縄文帯には、LR横位、斜位の回転施文による単節縄文が施文される。内面は丁寧なナデ調整が施されている。焼成は堅緻であり、器厚は約6mmである。

### 2類 平行沈線が施文されるもの (69)

68と同様、台付鉢形土器と思われるものの体部片である。2条の横位沈線が施文されるが、変形工字文の一部分と考えられる。地文は原体の細い単節斜縄文(LR横～斜回転)で、胎土に細砂を含む。焼成は堅緻である。

#### 第Ⅷ群土器(第7図6・7、第9図70・写真図版5-14・15、7-78)

わずかに数点の出土である。6・70は坏の口縁部、底部の破片である。6はロクロ使用の内面黒色処理されたものだが、焼成は良好でない。器厚は6mm～9mmで、色調は暗褐色である。70は回転糸切りで無調整の底部片である。内面は良く磨かれているが、外面調整は粗雑である。7は壺で、口縁が短く外反する形状を呈す。器面調整は、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。胎土には小礫がわずかに混入し、焼成が良い。器厚は厚手で10mm～12mmを測る。

#### 底部圧痕をもつもの(第7図8～11・写真図版5-16～19)

9～11は縄文土器で、8は土師器と思われるもの(底部内面ハケメ調整、小礫多く混入、焼成良好)である。8は木葉痕、9は笹の葉類の圧痕、11は網代痕である。10は笹葉類の上に茎状のものを重ねた圧痕である。10の体部には複節斜縄文(RLR縦回転)が施文されている。

## 2. 石器

7区出土の石器等は、剥片石器7点、礫石器17点である。器種別では、石匙1点、石槍1点、掻削器類2点、不定形石器3点、磨製石斧1点、打製石斧1点、半円状打製石器1点、磨石類8点、凹石1点、石皿4点、砥石1点である。

#### 石匙(第10図74・写真図版7-82)

表裏に一次加工面を大きく残す横形石匙である。刃部は緩い曲み状を呈し、刃部加工調整は主に表面に施され、裏面は僅かな調整がなされている。つまみ部は一方に片寄ってつくり出され全体は非対称形である。器厚は薄く刃部は鋭利である。

#### 石槍(第10図72・写真図版7-80)

縄文時代早期土器片が出土した区域及び層位から出土しているが、共伴する土器については不明である。欠損品である。両側縁からの打撃調整によって表裏に剝離加工が施され、鋸歯状の側縁を呈している。横断面形は、両面に膨らみをもつ凸レンズ状である。

#### 掻削器類(第10図75・76・写真図版7-83・84)

2点の出土である。木葉状を呈する76は、72の石槍とほぼ同一区域、同一層位から出土したもので、やや幅のある縦長剥片の周縁から片面加工調整によって刃部をつくり出している。特に、先端付近の加工調整が丁寧になされている。75は自然面をもつ横長剥片の、鋭利な角をな

す一側縁に刃部加工を施すものである。

**不定形石器** (第10図71・73・77・写真図版7-79・81・85)

部分的な剝離加工または使用痕をもつものを一括した。71は小剥片の一側縁から表面に細かな加工を施し、小形ナイフ状につくられている。73は一次加工によって生じた45度位をなす二面の稜線部に使用痕をもち、77は薄手のナイフ状を呈する一側縁に部分的な剝離加工が施されるものである。

**磨製石斧** (第10図78・写真図版8-86)

78は中位で折れているが、ほぼ完形品である。基部はやや尖るもので表裏は面取りは施されていない。刃部は直刃状で、一部に使用剝離痕が認められる。側縁はやや丁寧な面取りをしている。

**打製石斧** (第10図79・写真図版8-87)

基部は中位から欠損し、刃部だけのものである。刃部は細かく剝離調整を施し、円刃状を呈している。石質は淡緑色凝灰岩である。

**半円状打製石器** (第10図80・写真図版8-88)

80は半円状を呈す側縁を、両側から剝離調整を行い刃部をつくり出している。全体的に荒い剝離である。

**磨石** (第10図81~84、第11図86~89・写真図版8-89~92・94~97)

磨石は8点出土している。81~84は中位付近から欠損している。断面形は長方形を基調としている。全面に軽い使用痕が見られるが、83のように2面が他に比較して磨滅しているものもある。

86と87は形状が三角柱状で、稜線部の1ヵ所を特に使用している。88は2面、89は1面が良く使用されている。

**凹石** (第11図85・写真図版8-93)

1点のみの出土で、表裏の両面に凹を数ヵ所所有している。側面には使用痕は見られない。

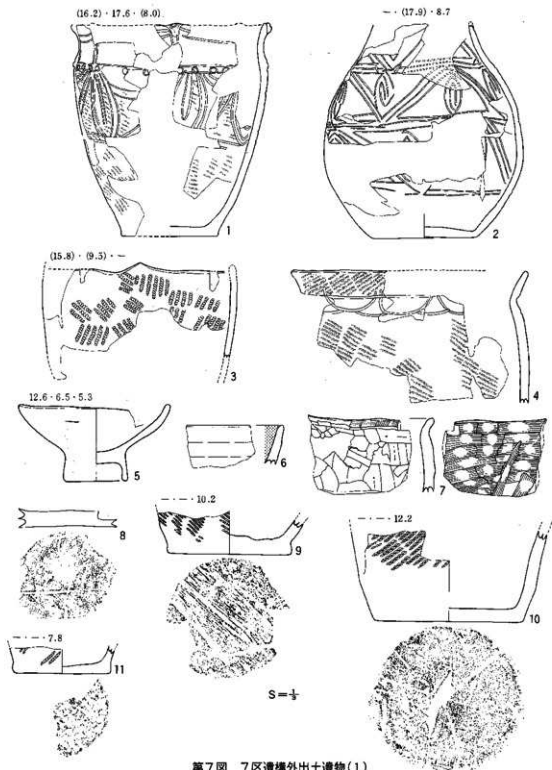
**石皿** (第12図90~93・写真図版8-98~101)

大小合わせて4点出土しており、各面とも風化が著しく使用面と剝離面の違いが不鮮なものが多い。90と93は1面使用、91は表裏の2面使用している。

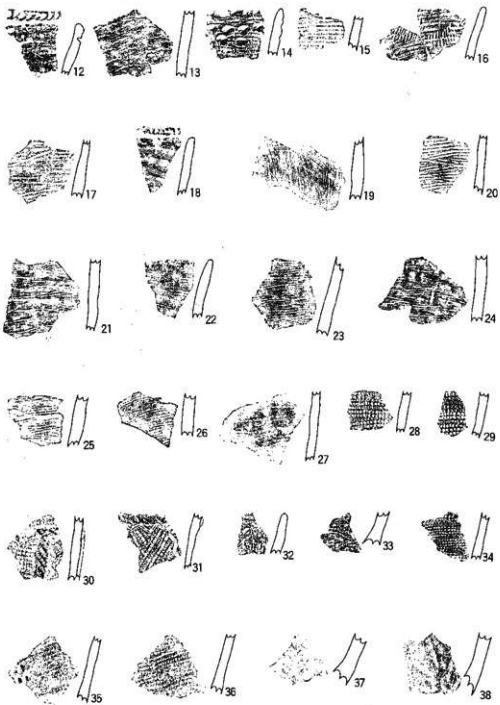
**砥石** (第12図94・写真図版8-102)

1点出土しており、各面とも磨滅が著しく全面使用されている。石質は両輝石安山岩系のものである。



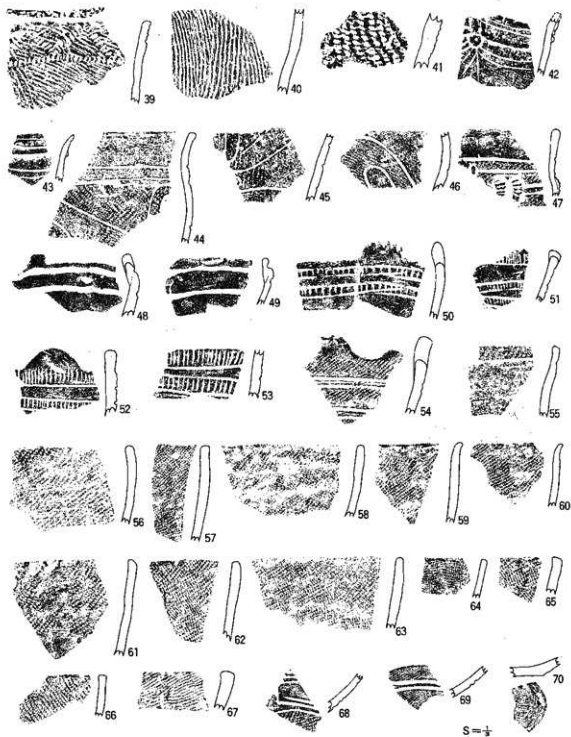


第7图 7区遺構外出土遺物(1)

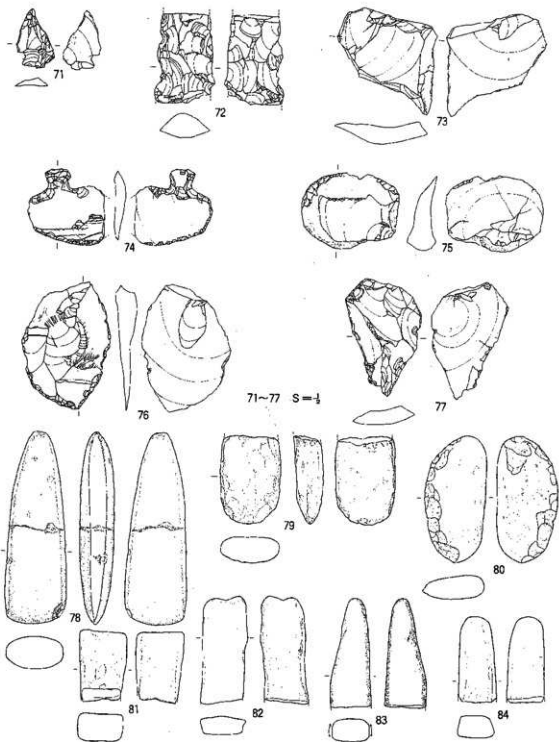


S=1/2

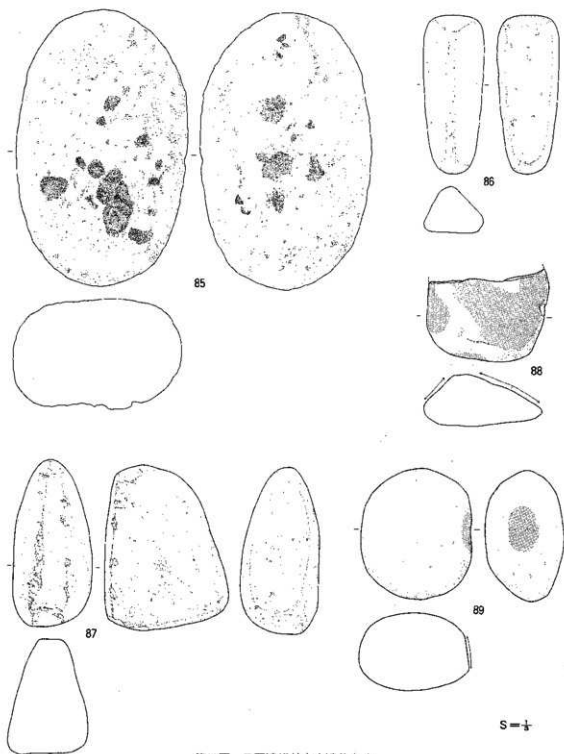
第8图 7区遺構外出土遺物(2)



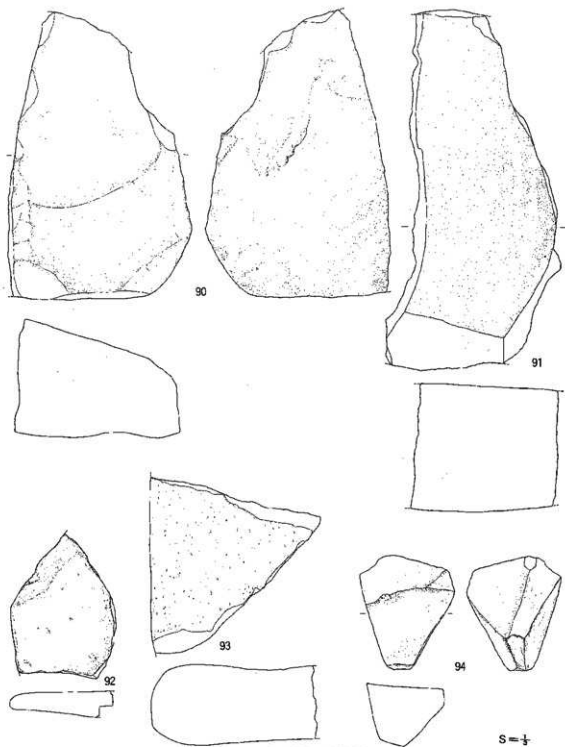
第9图 7区遗物外出土遗物(3)



第10图 7区遺構外出土遺物(4)



第11图 7区遺構外出土遺物(5)



第12图 7区遺構外出土遺物(6)

## IV. まとめ

### 1. 遺構

#### (1)平安時代竪穴住居址

7区では、湿地帯寄りの南側緩斜面で、平安時代中葉と思われる住居址が2棟検出されている。2棟のうち北側に位置する住居址は、試掘トレンチによって切られているので、完掘されたXIV Uc住居址について概略を述べることにする。平面の形態・規模は、東西3.3m×南北3.8mを測る歪んだ長方形を呈し、カマドはなく中央部附近に地床炉をもつものである。柱穴は炉を囲んで台形状に配置される4本の構築と思われる。埋土下位の土質は2棟とも、降下火山灰（和野田a降下火山灰であろう）が混入する砂質土である。地床炉は掘り込み、配石をもたず、焼土の形成は微弱である。西～南壁の隅みに浅い周溝をもっている。

#### (2)焼土遺構

6基検出されている。すべて現地性のものである。北側に位置する3基に伴い弥生式に比定される土器が出土している。他の3基は出土遺物はなく時期不明である。

#### (3)ピット

南側に位置し、開口部1.1m×0.8mの楕円形のピットが1基検出されている。埋土中位から下位にかけて礫が多数出土しており墓塚の可能性もあるが、礫以外に出土遺物はなく時期及び機能の不明なものである。

### 2. 遺物

#### (1)土器

出土量は少ないが、縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。殆どが破片で土器型式の判明するものは極く僅かである。弥生土器、土師器に比べ出土点数の多い縄文土器について述べる。土器は早期・前期・後期に所属するもので、土器分類と、それに併行する（又は比定される）土器型式について要約すると以下のとおりである。

第I群1類、2類の貝殻腹縁瓦痕文又は爪形文が施文されるものは早期中葉の寺の沢式併行のものであろう。第II群の絡糸体側面瓦痕文をもつものは円筒下層C式に比定されるものと思われる。第IV群1類Aは後期前葉の南境式又は関東の堀之内I・II式に比定されるもの、第IV群3類は後期後葉～末葉の十腰内VI式及び新地3～4又は宮戸IIIb式に比定されるものであろう。

## (2)石器

遺構内出土のものはなく、すべて遺構外のものである。剥片石器は奥羽山地(磐石西部)供給源とする硬質泥岩や珩質泥岩等で作られ、縄文早期に属すると思われる石槍、木葉形状の掻削器が出土している。礫石器は遺跡周辺に産する両輝石安山岩を磨石・石皿として用い、石斧等は北上山地にその素材を求めている。断面が角形をした棒状の磨石がごく限られた範囲から4点出土している。



表1 7区出土縄文・弥生土器一覽表

No	器種	現存部位	図版番号	写真番号	出土地点	計測値		文様と施文方法	分類	備考	
						口徑(cm)	器高(cm)				底徑(cm)
1	鉢	口縁~体部 1/2	5-1	4-4	XII Uf-1・3 集土	23.0	14.5	—	6~7	底糸文	外面に煤付着
2	深鉢	口縁~体部 1/2	5-2	4-5	XII Uf-1 集土	24.0	24.3	—	6~7	単筋斜縄文(LR)	外面に煤付着
3	鉢	口縁~底部 1/2	7-1	4-9	XIII Un-II	16.2	17.6	8.0	5	竹筥文、 三角形区画 文、渦巻文	無筋斜縄文(Lr)
4	甕	口縁~底部 1/2	7-2	4-10	XIII Uf-II	—	17.9	8.7	6	沈線による 三角形区 画分、渦巻文	IV
5	鉢	口縁部1/2	7-3	4-11	XIII Ue-粗頸	15.8	9.5	—	5	単筋斜・縦縄文(RL)	VI
6	深鉢	口縁部1/2	7-4	5-12	XIII Ug-II	—	—	—	6~7	頸部に当円状沈線十 幾位沈線	IV 無筋斜縄文(Lr)
7	台付浅鉢	全体の1/2	7-5	5-13	XIII Uo-1	12.6	6.5	5.3	5~6	縄文	VI
8	深鉢	底部	7-9	5-17	—	—	(3.6)	10.2	13	単筋斜縄文(LR)	VI 底面に荏葉状庄 痕
9	深鉢	底部	7-10	5-18	—	—	(7.5)	12.2	15~16	複筋斜縄文	VI 底面に手の要状 庄痕
10	鉢	底部	7-11	5-19	—	—	(2.1)	(7.8)	7	単筋斜縄文(LR)	VI 底面に刺代痕

( ) は推定値 ( ) は現存値

表2 7区出土土師器一覽表

No	器種	現存部位	図版番号	写真図版	出土地点	計測値(cm)				器面調整		備考
						口徑	器高	底徑	器厚	外	内	
1	甕	口縁~体部1/2	2-1	4-1	XIV Uc 住床 面	(19.8)	—	—	0.8	ヘラナデ	ヘラナデ	XIII Uo 住出土 破片接合
2	坏	底部1/2	2-2	4-2	# 床面	—	(3.1)	(8.1)	0.5	ヘラナデ	ヘラナデ	回転糸切り
3	甕	口縁部1/2	2-3	4-3	# 埋土	11.9	(9.0)	—	0.7~0.8	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	
4	坏	口縁部1/2	7-6	5-14	XIII Up-粗 頸	—	—	—	—	—	—	内黒
5	甕	#	7-7	5-15	XIV Ud-粗 頸	—	—	—	—	ナデ ヘラケズリ	ヘラナデ	

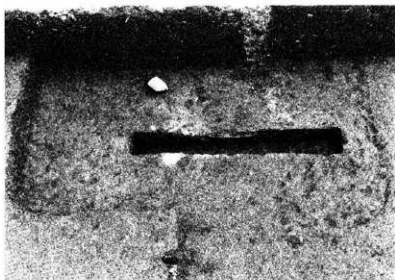
( ) は推定値 ( ) は現存値

表3 7区石器計測一覧表

( ) は現存値

No	器物番号	器名	出土地点	計		重		石	質	産	注	備	考
				長さ(mm)	幅(mm)	長さ(mm)	幅(mm)						
1	10-71	7-79	平足形石鏃	XIII Ua - 榎屋	3.2	2.2	0.4	1.7	硬質灰岩	榎屋西原, 作新院			
2	10-72	7-80	石鏃	XIII Ua - 榎屋	(4.8)	5.4	1.3	25.4	硬質灰岩	榎屋西原, 中野院			全物品
3	10-73	7-81	平足形石鏃	XIII Ua - 榎屋	5.8	5.5	1.1	30.7	硬質灰岩	榎屋西原, 中野院			
4	10-74	7-82	石鏃	XIII Ua - 榎屋	4.2	(4.2)	0.6	19.2	硬質灰岩	榎屋西原, 中野院			撮影
5	10-75	7-83	平足形石鏃	XIII Ua - 榎屋	4.2	5.4	1.6	25.1	硬質灰岩	榎屋西原, 中野院			撮影
6	10-76	7-84	厚刃石鏃	XIV Td - III	7.6	6.9	1.2	24.9	硬質灰岩質灰岩	榎屋西原, 作新院			撮影
7	10-77	7-85	平足形石鏃	XIV Td III	6.6	6.3	1.4	22.7	硬質灰岩質灰岩, 榎屋西原, 中野院				
8	10-78	8-86	石鏃	XIII Ua - 榎屋	15.9	5.1	2.7	34.0	厚砂岩	北上山, 吉生井			
9	10-79	8-87	打製石鏃	XIII Ua - 榎屋	(7.2)	5.1	2.3	14.3	赤褐色粗面岩	北上山, 吉生井			
10	10-80	8-88	平足形打製石鏃	XIV Td III	10.5	5.1	1.9	14.0	硬質石安山岩	榎屋西原, 中野院			
11	10-81	8-89	石鏃	XIII Ua - 榎屋	(6.0)	5.9	2.3	9.5	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
12	10-82	8-90	石鏃	XIV Ua - 榎屋	(8.8)	3.8	1.5	8.1	硬質粗面岩	榎屋西原, 中野院			
13	10-83	8-91	石鏃	XIII Ua - III	(9.0)	3.5	1.9	7.8	硬質粗面岩	榎屋西原, 中野院			
14	10-84	8-92	石鏃	XIII Ua - II	(7.1)	3.2	1.8	6.9	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
15	11-85	8-93	石鏃	XIII Ua - II	22.7	14.0	9.1	24.0	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
16	11-86	8-94	石鏃	XIII Ua - III	12.9	5.0	3.7	39.0	硬質石安山岩	榎屋西原, 中野院			
17	11-87	8-95	石鏃	XIII Ua - IV	13.7	6.3	9.5	11.65	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
18	11-88	8-96	石鏃	XIII Ua - I	(7.2)	10.0	4.2	29.6	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
19	11-89	8-97	石鏃	XIII Ua - 榎屋	10.7	9.1	6.4	9.0	硬質石安山岩	榎屋西原, 中野院			
20	12-98	8-98	石鏃	XIII Ua - III	(24.8)	(15.3)	9.7	40.3	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
21	12-99	8-99	石鏃	XIII Ua - III	(25.6)	(14.6)	10.7	50.0	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
22	12-92	8-100	石鏃	XIII Ua - 榎屋	(11.8)	(8.7)	2.2	26.5	硬質石安山岩	榎屋西原, 中野院			
23	12-95	8-101	石鏃	XIV Ua - III	(14.5)	(11.2)	6.7	17.0	厚砂岩粗面岩	榎屋西原, 中野院			
24	12-94	8-102	石鏃	XIII Ua - II	9.4	7.9	5.1	29.0	硬質石安山岩	榎屋西原, 中野院			

## 7 区写真図版



XIII Uo住居址(北から)

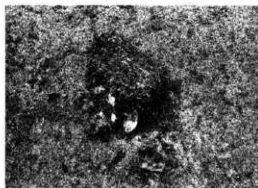


XIV Uo住居址(南から)

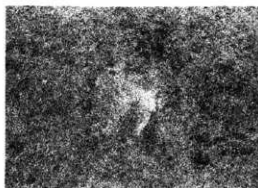


XIV Uo住居址埋土断面

写真図版1 XIII Uo・XIV Uo住居址



XUI-1 煨土



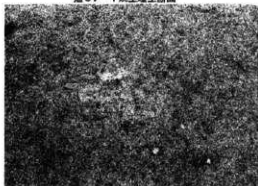
XUI-2 煨土



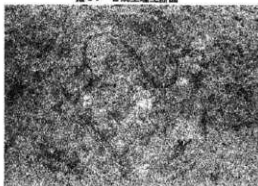
XUI-1 煨土埋土断面



XUI-2 煨土埋土断面



XUI-3 煨土



XUI Ug 煨土

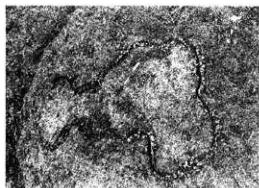


XUI-3 煨土埋土断面

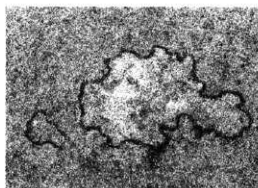


XUI Ug 煨土埋土断面

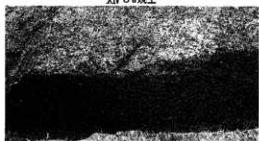
写真図版2 煨土遺構(1)



XV Ua 焼土



XIV Uc 焼土



XV Ua 焼土埋土断面



XIV Uc 焼土埋土断面



XIII Uo ピット



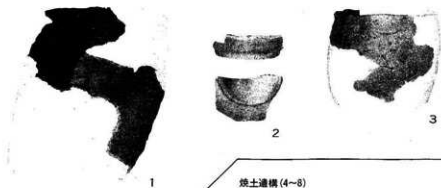
XIII Uo ピット埋土断面



作業風景

写真図版3 焼土遺構(2)・ピット

XIV U c 住居址 (1~3)



1

2

3

烧土遺構 (4~8)

XIV U i-1-3 烧土



4

XIV U i-1 烧土



5

XIV U i-2 烧土 (6~8)



6

7

8

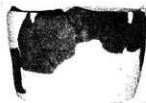
遺構外出土遺物 (9~102)



9



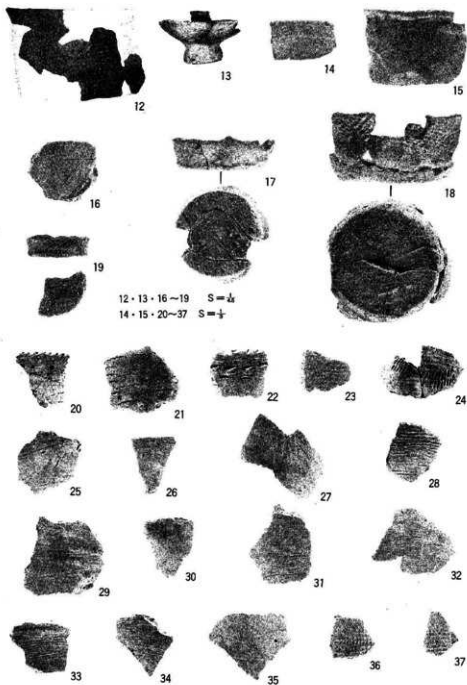
10



11

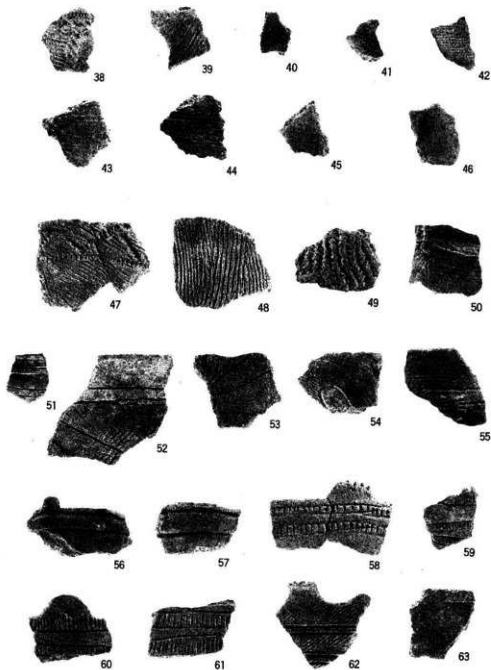
1~5・9~11 S=△  
6~8 S=+

写真図版4 XIV U c 住居址・烧土遺構出土遺物・遺構外出土遺物 (1)



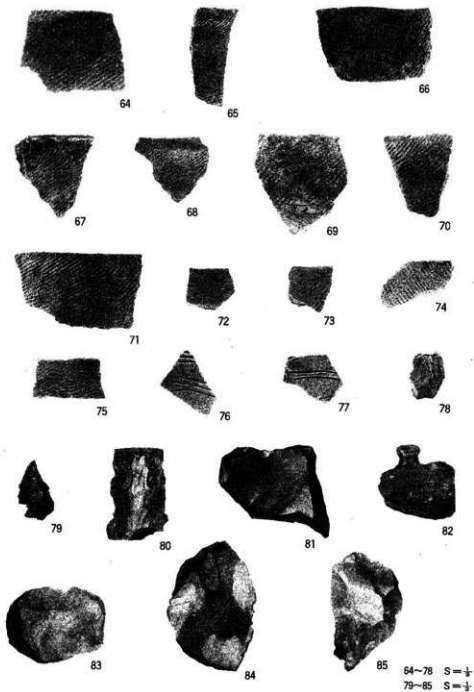
写真図版 5 7区遺構外出土遺物(2)



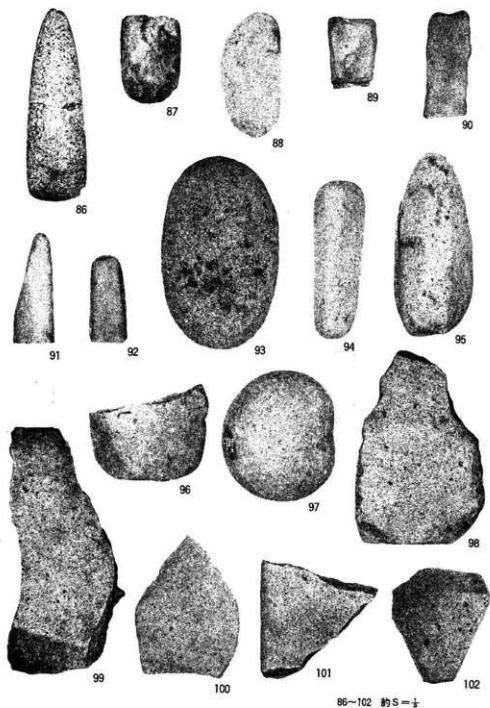


38-63 S=1

写真图版 6 7区遺構外出土遺物(3)



写真图版 7 7区逾槽外出土遺物(4)



写真図版 8 7区遺構外出土遺物(5)